

(1980)

北海道サケ友の会







遠い太平洋からサケが背負ってきたテーマは

私たち現代人にとって、沢山の衝撃的な内容を含んでいました。

それは人類の、文明への盲目的過信をたしなめるものであり、

科学万能の世界に対する警告でもありました。

サケは長い旅路の終りに、自らの死をもって、

人間の「たかぶり」を諭してくれたのです。

わずか四年ほどの短かい一生、

炎のように激しく生きぬいて逝くサケ。

その感動を私たちは冷静に受けとめ、

人間とサケが共存できる環境を考えてゆかねばなりません。

私たちが抱き続けているこのサケへの熱い想いは、

やがて来る新しい世紀への架け橋を築いてくれることでしょう。

あ い さ つ



北海道サケ友の会会長
植村　　敏

『カムバックサーモン』は今年、満20年を迎えました。

顧みれば、昭和53年10月「豊平川にサケを呼び戻そう」と『さっぽろサケの会』（代表吉崎昌一北大助教授・当時）が結成され同56年10月、待望の“とよひらサーモン”の回帰が現実のものとなりました。当時、この運動にかかわった多くの人々は、躍動するサケを目の当たりにして、喜びは筆舌に尽くし難く、その苦労も一度に吹き飛んだものでした。

この快挙は挙げてマスコミの取り上げるところとなり、一大フィーバーを起こし、その波紋は道内はもとより広く日本全国、アメリカ、カナダ、イギリスなど世界各地にまで広がってゆきました。

そして今日まで「人はみな川と深くかかわって暮らしている。川の流れをきれいにすることは自分達の暮らしを豊かにすることだ。サケはそのシンボルである」という思いのもとに、河川や自然環境の問題について取り組んで参りました。

こうした中で多くの事業が、試行錯誤の努力で次つぎと生まれ、定着しつつあります。その一つは小・中学生によるカナダとの「サケ学習国際交流」事業であります。カナダからの来訪はもとより、日本からはすでに10回・200名もの派遣が行われております。いま一つは、今年で８回目を迎える「北海道サケ会議」の開催です。運動の精神とそのたゆまざる活動の足跡は、本誌の随所に見ることができます。どうぞご一読下さい。

いま、静かに来し方を振り返り、多くの人達のご支援があったことを思うとき、万感胸に迫るものがあります。20周年を機に、この大切な文化遺産とも言える運動の継承とさらなる発展を、次代に向けて構築しなければならないとの決意を新たにしているところでございます。今後とも、皆様の温かいご支援を賜りますようお願い申しあげます。

20年のあゆみ　目次

あいさつ ……5

北海道サケ友の会20年のあゆみ

1978　人と川のふれあい創る ……8
1979　小さな命　大きな夢　サケ放流 ……10
1980　海外へも波紋　国際交流元年 ……12
1981　豊平川にサケがもどった ……14
1982　サケを教育素材に……16
1983　カムイよ川にサケ復活を ……18
1984　さけ科学館が誕生した ……20
1985　カナダでサケを学ぶ ……22
1986　林間学校などでサケ学習 ……24
1987　サケがとりもつ姉妹交流 ……26
1988　札幌で第4回国際サケ会議 ……28
1989　文化や伝統は土着の産業から生まれてくる…30
1990　共同で環境を守る“地球市民” ……32
1991　小・中学生が大使役果たす(サケ学習国際交流) ……34
1992　「川の文化」サケを語る ……36
1993　全道の子供たちと共に ……38
1994　待望の魚道ができた ……40
1995　サーモンロードをゆく ……42
1996　市町村に根づく国際交流 ……44
1997　20年に向け新たな展開 ……46
1998　20周年のプロジェクト動く ……48

サケの詩がたくさん生まれました ……50

豊平川カムバックサーモンは
多くの人のお世話になりました ……53

偉大なる井戸を掘っていただきありがとう ……54
吉崎　昌一氏・菅原　安信氏

石原　裕次郎さん・渡　哲也さんらが一役……56
西部警察「北都の叫び！カムバックサーモン」

豊平川をかけあがるサケ ……58

豊平川はサケを育む源川だった ……59
(「サケ学習国際交流」参加校一覧) ……61

忘れられないひとコマです……62

参議院予算委員会でサケ問答……64

サケの回帰と河川の浄化 ……69
(さっぽろ「サケ」の憲章) ……70

世界にも波紋……73

座談会（創立20年特集） ……76
(野性のサケを通じて学ぶ教育)

北海道サケ友の会会則 ……88

北海道サケ友の会役員名簿……89
(付　会員の現況)

北海道サケ友の会20年史年表……90

あとがき ……99

巻頭の豊平川の空撮写真は石狩川開発建設部札幌河川事務所提供

1978
昭和53年

人と川のふれあい創る



「さっぽろサケの会」がスタート、豊平川サケ連絡協議会も発足

イクラ ピンバッジ

全道にひろがる Come Back Salmon の夢

昭和の初め、豊平川は雁来に人工授精用捕獲場が設けられるほどサケがのぼった。もし今、ひと昔のようにサケが銀鱗を躍らせて戻ってきたらどうだろう。こんな夢を描いた人たちが集まり「やってみましょう」と活動をはじめ、そしてこれを自然回帰の市民運動に広げようじゃないかと生まれたのが「さっぽろサケの会」である。この年の10月28日、13人の発起人の手で「さっぽろサケの会」はスタートした。北海道大学助教授吉崎昌一氏が代表になり、会は次のようなメッセージを札幌市民に贈り参加を呼びかけた。

「札幌市の中心を流れている豊平川は、北海道開拓史の中で大きな地位を占めている川です。北海道における治水、利水そしてサケマス増殖河川としてパイオニアでありました。いま豊平川は130万人を越える都市の中で、美しい管理河川のたたずまいを見せています。川はかつての荒々しさを失い、市民の利益と安全の保障としてみごとに制御されるようになりました。それは生態系の変化であり、魚達を追い出す人間のエゴであったかもしれません。

私達札幌市民は母なる豊平川にサケを呼び戻す計画をたてました。行政、経済などあらゆる分野の協力を仰ぎ市民総ぐるみの運動に盛りあげるべく考えております。サケから始まる市民意識の高まり。そのインパクトの広がりに大きな期待をもって、いま運動がスタートしました」Come Back Salmonキャンペーンはこうして始まったのである。

当時、豊平川でのサケ目撃の情報もあって、市民の関心は強く、会は翌年春にサケの稚魚を放流する計画をたて、放流資金1,500万円の募集を決めるなどスピードのある行動で市民の気持ちを盛り上げていった。一方で板垣武四札幌市長や堂垣内尚弘北海道知事を通じて、国にも働きかけた。さらに発起人でもある道水産資源技術開発協会顧問の佐野誠三氏をチーフに豊平川の水質、環境を調査「現状ではサケがのぼることに対して、何も問題はない」というデータも揃えた。サケのふ化・放流は国の管理であり、行政側も対応を迫られたことから関係の代表が集まり豊平川サケ連絡協議会を発足。石狩川開発建設部、水産庁さけますふ化場、北海道庁水産部、北海道サケマス増殖事業協会、札幌市、北海道警察本部がメンバーとなり、熱く燃え上がった市民運動「カムバックサーモン」を支援することを決め、実験放流へ踏み切った。これで稚魚放流の目途もでき、運動は立ち上がって3ヵ月で大きく前進した。むろん様々な課題、問題が山積したが、とにかく『夢を実現したい』とする意欲で全てをクリアしていった。イクラを模した募金箱が好評。ポスターの『SALMON BABY　私はサケです－大きくなる力を与えてください!!』のキャッチコピーも市民のハートをがっちりと掴んだようであった。

豊平川からサケが完全に姿を消したのが昭和28年。種々原因が上げられてはいるが、やはり、稚魚の放流が中止されたことが最大の要因という観点に立つ「サケの会」は、放流さえ出来れば豊平川にサケは戻る、夢ではない復活に、大きな自信をもった。200カイリ問題で一番の打撃を受けたのがサケである。これを豊平川のサケが肩代わりするわけにはいかないにしても、当時140万都市のど真ん中を流れる川に、サケが群れをなしてのぼってくるとしたら、近年こんな愉快なことはないではないか。そして運動の裾野が広がっていき、サケに託した自然回帰を市民の手で実現できたとしたら、これ以上の素晴らしいことはないだろうし、社会的にも大きな波紋となり、ふる里の川を守り再生させたという自治意識の芽も、大きく膨らんでくるに違いない。「さっぽろサケの会」は、そんな希望をも包み込み、いよいよ来春の稚魚放流へと進んでいった。

発起人（敬称略）

吉崎　昌一（北大助教授）　田中　健二（弁護士）　おおば　比呂司（漫画家）　井上　聡（北大教授）　高橋　長雄（札医大教授）
原田　康子（作家）　黒田　基義（札幌スバル自動車株式会社社長）
菅原　安信（ジャーナリスト）　佐野　誠三（道水産資源技術開発協会顧問）　吉岡　道夫（シナリオライター）　鍛治　滋（魚類研究家）
綟子　広導（デザイナー）　国松　明日香（彫刻家）



豊平川を視察する連絡協議会のメンバー



赤いイクラの募金箱は市民の話題になり、募金活動の輪は全市に広がった

1979

昭和54年

小さな命 大きな夢 サケ放流

サケよ帰れ！第１回豊平川稚魚放流は、３月８日豊平橋上流の魚釣り場で市民ら500名が参加して行われた。一時は死の川と化した豊平川に再び生命を甦らす使者として、20万尾の稚魚が「いい日旅立ち」のメロディーに送られ、はるか一路北の海へ。板垣札幌市長も４年後の回帰を確信し、自ら稚魚を放った。札幌市立東橋小学校３年の風間広江ちゃんは「サケの赤ちゃんへおくることば」を書いた。

豊平川にサケをはなしたらどうなるだろう
かえってくるかな　かえってこないかな
川がきれいになったらかえってくるかな
かえってくるといいな　すむところのない
サケはどうなるのだろう
サケとはなしてみたいな
はなしができればいいな

「おくることば」に市民運動の夢とロマンと不安が凝縮されているようにみえた。市民一人ひとりの胸中にも同じ思いがあったはずである。放流は運動がスタートしてわずか半年で実現したが、関係機関の予想をはるかに越える支援があったことを忘れてはなるまい。札幌市の環境局を窓口に開発局、道水産部、北海道さけますふ化場がその中心になった。そして豊平川に漁業権がなかったことも、放流にたどりつく道のりを、スムーズに進行できた大きな要因の一つであった。また、放流後の密漁問題の心配に対し、道警側は「カムバックサーモン運動が、市民の精神面に与えるいい影響のほうが大切」と、前向きにアプローチ。こうした官民一体の展開が第１回の稚魚放流を大成功に導いてくれた。

成功した放流の成果はサケの回帰であるが、放流の意義はどうか。この質問に「さっぽろサケの会」の吉崎昌一代表は、「この砂漠といわれる都会に、精神的オアシスは必要です。深刻な200カイリ問題がある時、重要タンパク資源となる水産資源の回復や教育的効果も期待できます。この川にサケがのぼってきたら、子供たちの自然に対する親しみは変わってくるでしょう」と答えている。空気や土や川が汚れ、草や虫や魚が住めなくなったような環境で、どうして、同じ生物である人間だけが健康に暮らせようか。スモッグの街ロンドンはかつて、多くの死者をだした。それは街が産業革命以来前進し続けた先進都市の宿命ともいえる悲劇だが、そのロンドンでは河川資源保護事業テムズウォーターを設立し、カムバックサーモン運動を展開、札幌より一足早くテムズ川にサケが戻り、ロンドンっ子を感動させ、彼らはそれを自慢し胸をはるのだそうだ。



雪まつりで募金活動

雪まつり会場に並べられた氷のイクラとイクラ募金箱

今年、豊平川を旅立ったサケは３年か４年後に、間違いなく帰ってくると、専門家が太鼓判を押している。その時さっぽろっ子も、豊平川を指して「やったね」と、胸を張るに違いない。札幌のことは、はやくもロンドンに伝わっており、テムズ川から『連帯』の便りが届いた。放流の日、世界でも１、２を争う発行部数900万部を誇るアメリカの地理専門月刊誌（同国地理学会公式機関誌）「ナショナル　ジオグラフィック」の記者とカメラマンが突如現れ、北海道の自然と風土紹介の一貫として、市民運動と稚魚放流を取材した。同誌は日本紹介として、これまでに東京、京都、奈良などを取材掲載しているが、北海道は初めて。札幌のカムバックサーモンはこれで、イギリス、アメリカに紹介されることになり、はやくも国際化の展開となった。秋にはサケ資源倍増計画をたて、国と州が一体となって事業を展開中のカナダB・C州（ブリティッシュ・コロンビア州）を、吉崎代表と札幌市民代表の西田良子さん（教育大講師）が訪問、カナダのサケ事情をつぶさに視察してきた。B・C州の事業（SEP）は資源の増殖だけでなく、サケを教材にした教育を実践しており、訪問団は多くの収穫を得て帰った。早速報告会を開き、市民やサケの会会員に新鮮な海外情報を伝え好評だった。国際化がまた一歩進んだ。市民の要望に応え、サケに関すること、海外の事情などを紹介する講演会や映画会が「さっぽろサケの会」によって多数開催され、市民たちの知識は一段と向上し、カムバックサーモンの期待は益々大きくなっていった。折りも折り、豊平川をはじめ札幌市内の発寒川、厚別川、新川などに、昭和50年生まれと推察されるサケの親魚が回遊していることが判り、回帰間違いなしの実証を得た。これは会員と市民に大いなる自信を与え、運動はさらに盛り上がっていった。

サケよ帰れ！の願いを込めた歌「SALMON BABY」（佐藤三樹夫作詞・作曲　小出正則・唄）は、稚魚放流の日に生まれたがその後、レコードが全国発売となり、より一層全国の目が札幌に注がれた。

放流資金のため、道民に募金の協力を呼び掛けていたが、イクラ募金箱の評判も上々で、さっぽろ雪まつり会場などでも多くの協力を得た。氷のイクラが並べられた雪まつりのステージは、会場を訪れた人々の関心を集め「さっぽろサケの会」のアイディアには、度肝を抜かれたようだった。香港からやってきた観光客もカムバックサーモンの基金にしてくださいと募金。ここでも国際化の姿がクローズアップされた。募金の使用については、調査・取材、広報・宣伝、稚魚放流諸経費、海外さけます族保護資料収集調査、豊平川サケマスふ化場建設基金（サケマス族資料室、水族館、博物館、観察教育施設・付帯）とすると、各メディアに発表した。









①氷のイクラをけずる吉崎氏
②第１回の稚魚放流「壮行会」に多数の市民が参加した。

板垣札幌市長（故人・前列）も第１回稚魚放流に参加した。

1980
昭和55年



ロンドンの空にひるがえるカムバックサーモン旗とテムズウォーターの旗



海外へも波紋 国際交流元年

'80年の最大のイベントは、夏季オリンピック「モスクワ大会」のはずだった。しかし旧ソ連のアフガニスタン侵攻により、アメリカやヨーロッパ諸国が反発。アメリカやヨーロッパ、アジア諸国の65ヵ国が不参加を表明、オリンピックはただの競技会になり、日本も世界の足並みに同調した。

モスクワオリンピックのキャラクターマスコットは熊のミーシャだった。カムバックサーモン運動をバックアップしてきた、HTB（北海道テレビ放送）は、冬のさっぽろ雪まつり大通り8丁目広場にでっかいミーシャの像をつくりあげた。みごとな出来栄えは、子供たちの話題になったが、トピックとしてもオリンピックとからめて様々に取りあげられ、全国的に評判になった。


雪まつりホットラインで交流したシアトル小からその時のVTRがサケの会に届いた

さっぽろサケの会は、このミーシャのステージを活用し、キャンペーンを行い話題をつくりあげた。その一つが、8丁目会場の特設コーナーで行った「北太平洋のサーモンベイビーに手紙を送ろう」である。来年にはサケの回帰が見込まれる中でのキャンペーンだったが、札幌伏見小学校2年生、中村美雪ちゃんは、こごえる指で鉛筆を握り「サケがぜったい　くるようにね」と手紙を書いた。またはるか北の海にいるサケに向かって、子どもたちが書き送った手紙は、2,600通にのぼった。

サケの会は、豊平川の環境と、サケを取りまく自然生態学的見地から、来年の回帰は間違いないと確信していたが、この年をその前夜祭に位置づけ、こうしたメルヘンのある催しで子供たちの夢を育んでいった。

そして雪まつり会場でこんどは、サケを最も身近に感じている、カナダのバンクーバーの子供たちと札幌の子供たちが電話で結ぶ「ちびっこサーモン・ホットライン」を電々公社（当時）とKDDの協力で成功させた。電話で話し合ったのは、サケ学習で話題の多かった札幌市立東白石小とシアトル小の子供たちで、ミーシャ像の特設舞台でサケを通し国際交流を行った。サケの会は、カナダのサケ関係者とはすでに深い交流を展開していたが「教育」を実践し未来に「遺産」を残すような国際交流はホットラインが口火だった。後に多くのアメリカ・日本・カナダの児童や生徒らが国際交流で親しくなっていくが、そのきっかけはここから生まれたのである。

この年もう一つの国際交流は、さっぽろサケの会の代表がロンドンテムズ川のサケの稚魚放流に参加したことだった。テムズ川の汚染は、産業革命以来の文明進化の“アカ”がつもり積もったもので、川の回復に向けてロンドンっ子は「川をきれいにしよう」と必死だった。イギリスをはじめ各国はBOD値（生物化学的酸素要求量）やその単位であるPPMで汚染度をチェックしているが、テムズ川はBOD値の指標魚としてサケを使った。つまりサケが住める川（BOD値3PPM以下）なら、人も健康に住めるということであろう。そのロンドンから、スタートしたばかりのサケの会に、連滞の呼びかけがあり、サケの会もテムズ川のデータを送ってもらうなど積極的に交流した。市民運動として大成功を納めた豊平川に対し、テムズ川は“敬意”を表しサケの会の幹部を招待したという。吉崎会長をはじめ、北の川編集長の乳井洋一氏、サケの会の名物プランナー菅原安信氏（総務）、それに市民代表の西田良子さん（児童文学評論家）が自費参加し、テムズ川ウォーター（TWA）スタッフの歓迎をうけた。

夏にはカナダ太平洋サケ資源協会理事ジム・マレー氏が来札した。親子サーモン学習の4組が北方圏センターの基金援助と、カナダのフレーザー教育財団の協力でカナダに渡った。そして秋、テムズ川に1978年に放流したサケがついに回帰！のニュースが札幌にも伝えられた。

正にサケは、国際交流の橋渡しであった。こうして札幌の市民運動は、世界の注目を集めることになった。そして課題も増えていった。


テムズウォーターを訪れたサケの会の一行左から一人おいて吉崎氏と菅原氏



札幌市内の各所でサケに関する講習会や講演会が開かれた


雪まつり会場での「北太平洋のサーモンベイビーに手紙を送ろう」の呼びかけに多数の児童が関心を示し思い思いに手紙を送った

1981
昭和56年

Come Back Salmon

豊平川にサケがもどった

“とよひら１期生”が堂々と帰ってきた。1979年（昭和54年）の３月に放流した子供たちが立派になって市民の歓迎に応えるように、二度、三度とジャンプしてみせた。札幌市民が待ちに待った回帰だった。

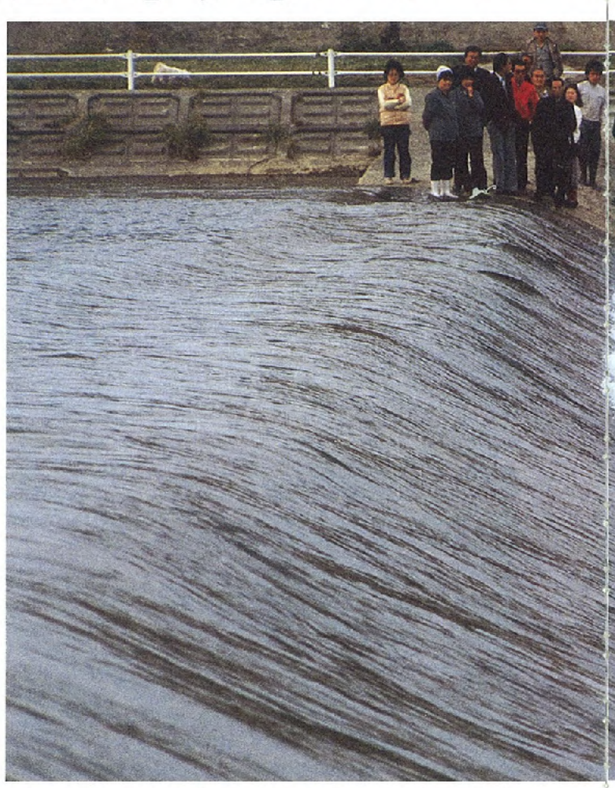
放流する前から、回帰の手応えは十分だったはずのさっぽろサケの会の会員たちも、思わず興奮したと当時を振り返る。しかし万全の形で取り組まないと、サケの回帰を見逃しかねない。「子供サケ自然の観察隊」が結成され、76名が団員として勉強をかねて観察を行った。また札幌大学の学生が豊平川と厚別川の合流点にキャンピングカーを置き、回帰の観察を行った。

カムバックサーモンの第１号は９月15日。札幌市内の真駒内川で発見された。以後、10月５日に、同市内豊平川の南九条橋上流えん堤に群れをなして回帰した。サケは国の財産。全ては水産庁の権限だから、いくらサケが帰ってきても、市民は触れることはできない。そんなもどかしさがあり、だから１尾１尾抱きあげるなんてことはできなかったが、市民は「よう帰った」と、それこそ抱きあげたいほどの感動につつまれた。この年の回帰はシーズンを通して1,500尾前後と発表された。そしてこれらのサケは、ウロコの検査で３年魚であることが確認された。ウロコという身分証明書を提出したのは、体重3.7キロ。体長は61センチのオスだった。

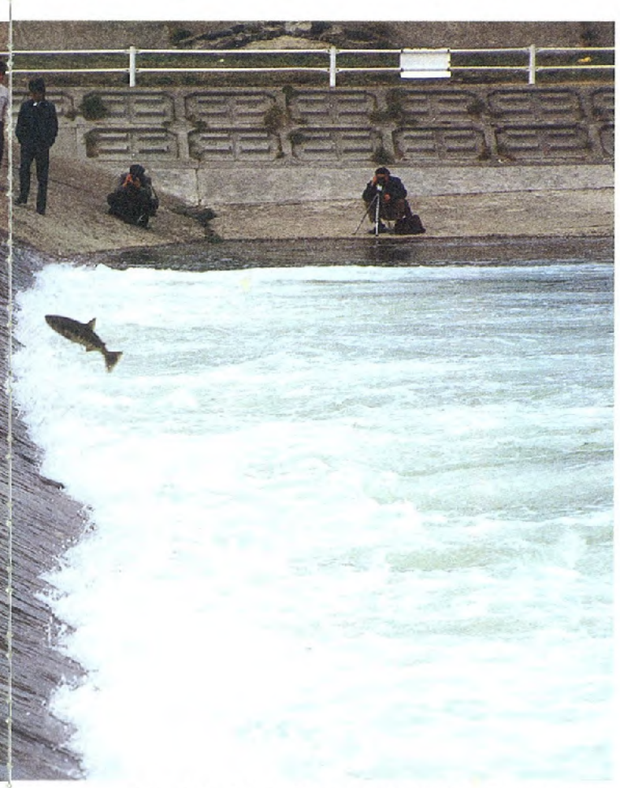
サケがえん堤をのぼり、水流に向かってジャンプする姿は、知らないわけではないが、目の前でその事実が展開するドラマチックな動きは、見る人たちに多くの感動を与えた。終日カメラを据えてシャッターチャンスをねらう人。幸運だったら、ジャンプを見ることができるかもしれないと、弁当持ちのピクニック、ウォッチング組もつめかけた。河畔の遊歩道や公園でくつろいだ後で、偶然にも感動的なジャンプを見た人たちも多かった。フィーバーは２カ月も続いた。

しかし数多くの市民や、札幌市民以外の道民、それに観光客も含めた人たちが豊平川に集まったことで、様々な問題が、にわかに浮かびあがったのも事実だった。

サケを浄化のシンボルとして、豊平川に稚魚を放流し、



そして成魚を迎えたというイベントに対し「あの暴れ川が人のオアシスになった」「素晴らしいことだ」と思った人は多かった。半面、文字どおり死の思いで帰ってきたサケは、それでどうするの？。卵を産んで親は死んでいくという、サケのライフサークルはどうなるの？という大きな問題が提起された。サケがその一生をまっとうできる川にするためには、魚道がいるのではないだろうか。自然産卵ができる環境づくりはどうするのか。市民ふ化場を豊平川に造れないのだろうか。こうした具体的な意見や印象が交錯し、カムバックサーモンのアフターケアが市民の課題として急速に浮上していった。中には、ケアできないのであれば、サケを帰すべきではないという意見の人も少なくなかったのである。



「さっぽろサケの会」は、これらの意見と同質のものを会の中で討議していた。実はこの年の回帰について、湧水産卵床がないことから、水産庁は、回帰した全サケを捕え千歳のふ化場に運ぶことにしていた。サケの会もこれを同意していた。ところが、雨が降り豊平川は増水。その水に乗ってサケは、７つの床止めを突破。市の中心部までのぼり、あのサケフィーバーになった。多くの市民は感動したが、一方ではむなしく放卵し、ホッチャレとなった豊平１期生の末路を見てしまった。このことが幸であったか不幸であったのか。判定は軽々に出せないだろう。

サケの会からみれば、計画外のアクシデントの結末であって、改めてのコメントはないはずである。しかし１期生が演じたドラマによって、市民はサケをより一層身



「北の川」発刊

さっぽろサケの会の季刊誌「北の川」創刊。「北の川」とは「サケ科の魚類がのぼる川」とよみ代えてもらい、全国の北の川に参加を呼びかけた。平成３年12号まではB５版の雑誌スタイル。以降はA４版タブロイド版になった。今や運動の記録としても貴重な存在である。



旭川でも稚魚放流を計画した。（右）吉崎氏が招かれた京都の由良川でも放流が行われた（切りこみ）

近なものにした。サケ回帰をロマンとしか感じていなかった人は、現実の目のあたりにして、考えが変わったはずである。サケは、この時改めて札幌市民のものになったと言えるかもしれない。市民が自分の言葉で語った意見が、新しい行動になれば、市民運動は一歩前進し、カムバックサーモン運動を真に実感することになれば、そこから本当の運動がスタートする—と、サケの会は、そう確信した。その一環とも言える行動が10月中旬にあった。サケが帰ってくる豊平川をもっと、きれいな川にしようというキャンペーンが、北海道潜水スポーツ協会とボーイスカウト27団（豊平地区）らの手によって行われた。行動する市民活動がはじまったのである。



川の浄化はまずゴミ清掃から　こんなにゴミを回収した

この年の暮、北海道開発庁長官が来道した。カムバックサーモン運動の準主役の豊平川は、開発庁の管轄。長官は白石のミニふ化場などを観察したが、サケの会は、この機をのがさず、魚道の設置などを訴え、豊平川をサケののぼる川にしてほしいと長官に話をした。サケのふ化を勉強している札幌東白石小の児童らも、長官に実情を説明。新しい市民運動は、こんなふうに進化をはじめたのである。

1982

昭和57年

サケを教育素材に





児童たちとサケについて話すサンディー・マクローレンさん

カナダの連邦政府とB・C州の共同プロジェクトであるSEP(サケ・マス増殖計画)は、単なる産業だけの計画ではなく、自然への投資と環境整備を理解してもらう教育と密着しており、1976年(昭和51年)にその基礎がつくられた。翌1977年、J・マッキントッシュ氏によって、フレーザー教育財団が創立され、B・C州を流れる最大の川であるフレーザー川のサケ・マスと環境保全の教育に、最も大きなウェートを置いた。マッキントッシュ氏は、カムバックサーモン運動スタートと同時に、札幌を訪れ、サケの会の活動を支援し、貴重なアドバイスを行ってきた。札幌の運動もカナダに紹介、カムバックサーモンの言葉を、カナダでも使うというほど、札幌は彼を通してB・C州と密接な関係になった。



カナダのバンクーバー郊外に子供サケふ化場完成　吉崎氏と壹野茂氏(二風谷アイヌ文化資料館長)が招かれた。セレモニーであいさつする壹野氏

札幌サケの会が、サケを通して展開する教育については、カナダがかなり先行しており学ぶ点も多く、学習交流のきっかけが生まれた。

1982年（昭和57年）の3月、そのB・C州からサケ増殖計画（SEP）のメンバー、サンディー・マクローレンさんが女性サケ使節として、札幌市立東白石小学校のふ化場を訪れた。独自でサケの稚魚の飼育を行い、教育の素材にサケを活用している同校の教育現場を視察した。体長4センチに育ったサーモンベイビーについて、彼女は同校のサケ観察隊の子供たちと意見を交換。専門



10月15日から3日間、札幌の北方圏センターで「日本サケ会議」（JAPAN SALMON MEETING）が開催された。全国から「サケの会」や「サケを呼び戻す会」が参加した。またカナダなど外国からゲストを招いた。



N・ワード・フォークナー氏
カナダサケ増殖計画委員



ジム・マクドナルド氏
カナダセーブ・ザ・サーモン協会長



W・ピーターソン氏
カナダセーブ・アワ・サーモン委員

札幌で初の「日本サケ会議」外国からも参加

的な指導も行った。翌日には市民セミナーに参加「カナダのサケ事情」についてスライドを写しながら、札幌より進んでいる“サケボランティア”の現状を紹介し、説明した。これらの交流は、札幌の活動に極めて重要なインパクトを与え、現在も引き続き行われている、サケ学習国際交流の流れをつくる、ひとつのきっかけになった。

この年、北海道教育大学附属札幌小学校で行なわれた



鈴木総理（中央）を訪れ豊平川のサケについて実情を話し、魚道設置をお願いした札幌の東白石小の児童たち

北海道国際教育学会で、教育出版「国語2年下」にある「さけが大きくなるまで」という説明文を取りあげた公開授業が行なわれた。指導に当った瀧本勝教諭は、学習指導の中で「この時期、生きものに強く興味をひかれる子供たちに、サケという魚を通じて、生命の神秘に触れさせたい」とする箇所を示し、子供たちに疑問や感想を発表させ、サケに対する関心をより深める授業を展開し

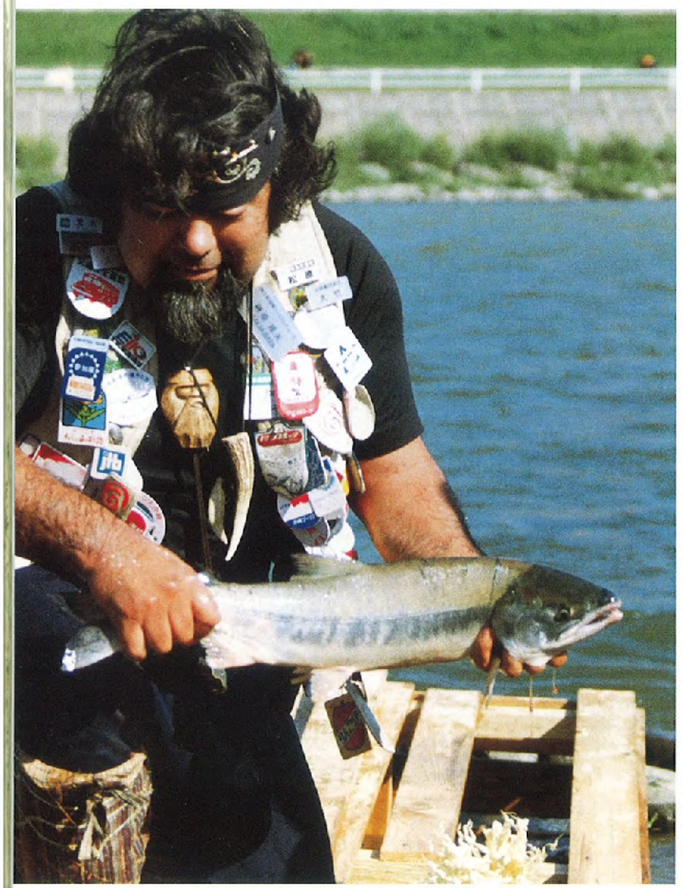
たと、サケの会に関心をよせる児童文学者の西田良子さんが、「北の川」で紹介した。と同時に、同教科書が教材として子供の新しい知識に応えるには、カムバックサーモンでサケに関心が集中しているだけに、不備な点も散見されるのは問題だし、今後加筆改善されるようにという要望も出し、注目された。

秋の10月15日～17日札幌の北方圏センターで「日本サケ会議」が開かれた。これは「さっぽろサケの会」が主催したもので、全道はもちろん、全国8地区のサケの会と関係者。また海外からカナダ、アメリカ、イギリスの各国も参加した。いずれもサケと人と川、というテーマを共通とする団体の代表で、それぞれの活動がつぶさに報告された。分科会では「サケと文化」「学校教育の活用」「少数民族とサケ」などをテーマに、掘りさげた論議を展開。さっぽろサケの会は、一つ大きな仕事をやりとげた。

正月には鈴木善幸総理大臣が、札幌の東白石小の児童たちと「サケから学んだこと」を話しあった。またサケののぼる川の環境を訴えられたことに対し、鈴木総理は、その席で「魚道」の設置を約束し、子供たちは大きなみやげを持って札幌へ帰った。河川整備についてサケの会が既に陳情していたが、こんな形で決着するのは、極めて異例のことであり、大きな話題になった。元々農水関係で力量を示し、知識のあると言われた鈴木さんだが、分野が分野だけに回答も早い。いつもとは違ったとの尾ヒレまでついたうれしい決定だった。

1983
昭和58年

カムイよ川にサケ復活を



アイヌによる「アシリ　チェプ・ノミ」が昨年に引き続き９月15日豊平河畔で行われた。「さっぽろサケの会」が後援した。

100年前から途絶えていた「神魚迎えの儀式」で昔を今に伝え残そうという、アイヌウタリによって復活した。

神さま
清い清流の渦にいる尊い神さま
どうかこの灰に似た老人の言うことに
お耳をかして下さい

下界は瞰の冷たい季節になりました
間もなく天上の川に遡る鮭の背中が
見えてくるでせう
私達は毎日先祖たちがしたように
清いあなたの声に耳を傾け
あなたの庭を見守っています

神さま
私たちは鮭（カムイチェプ）が今もあなたの
大きな袋の中にあることを信じています
あなたのお許しがなければ
その一片だって誰の口にも入らないことを知っています

これはかつて日高の山奥で行われた「鮭迎え」を見た更科源三さん（故人・アイヌ文化研究家）の詩の一節である。アイヌはその昔、夜空に現われるW字形のカシオペア星を、ヤーシノカ（袋網を曳くかたち）と言って、天上の神々も二艘の舟で袋網を曳いて川漁をすると信じたという。また天の川の状態により川の豊凶を占う儀式を行ったとも伝えられている。サケ遡上の気配を感じると、各部落では河口や川岸に祭壇をしつらえて、サケを迎える祭事を行なった。サケのことを神魚（カムイチェプ）と呼ぶが、これは神の化身というよりも、神によっておろされた魚という意味の方が強いのだそうだ。



豊平河畔でアイヌの手によって「カムイ　チェプ・ノミ」の儀式が行われ、多数の市民が見学した

アイヌ文化の「熊送りの儀式」（キムン　カムイオプニレ）は、伝統的に受け継れており「ふくろう送りの儀式」（コタンコロ　カムイオプニレ）も、上川で復活している。神魚はサケだけでなく、シシャモやニシンもすべて、その季節、最初にやってくる魚群をカムイチェプと呼び魚神迎えの儀式があったそうだ。

神とは切ってもきれないアイヌの精神生活とその文化の復活は、豊平川にサケ帰るに盛りあがる市民に、新たな感動を与えた。絶滅寸前と言われるこれらアイヌ文化



豊平生れ、豊平育ちの稚魚放流

第５回の稚魚放流壮行会は豊平川に戻った親サケの子が放流された。横路知事、板垣市長が揃って参加した

の継承は極めて重要なことだし、それを支えていく活動を展開している「アイヌ文化協会」では、公開された神事を通してアイヌ文化が、多くの人たちに理解され、心に残ってくれればと願っていた。

この年の豊平川サケ壮行会は、４月30日に行われたが、板垣札幌市長、横路北海道知事がそろって参加した。また札幌市立東白石小学校をはじめ、市内８校で飼育された稚魚やHTB（北海道テレビ放送）で飼育された稚魚など7,000尾が放流された。記念すべきことは、豊平川にそ上したサケから採卵しふ化、飼育した稚魚が放流の主役になったことで、豊平生まれの豊平育ちの稚魚を放流できるという形がこの年に初めてできあがった。もっとも、この年はふ化、飼育は千歳のふ化場が行っているから完全なパターンとは言えないが豊平川岸に、そうした施設ができれば、いつでもOKという姿にはなった。新たな前進である。

カムバックサーモンを成しとげた市民は、次の課題に立ち向かう。サケの会は運動のリーダーとしての役目を果すべく、海外事情をはじめ、数多くの情報を提供した。サケが戻ってくる最良の環境とは何なのか、これもテーマのひとつだが、自分たちの住む川を少しでもきれいにしたら、ここにもサケが戻ってくる。そんな願いをこめて発寒川や厚別川で周辺の住民や町内会、釣り愛好家らが中心となり「サケをのぼらす会」が発足した。

西区の発寒川は正式には琴似発寒川と呼ばれ、かつてはサケの母川であったことが分っている。古老たちの話と合わせ「のぼらす会」の希望は大きくふくらんだが、とにかく川をきれいにしようという浄化作業を町内の親子が進めるなど積極活動を展開した。トラック３台分のゴミを拾いあげた子供たちは、これがまたとない学習にもなったという。厚別川でも、フナやウグイの放流などを行い、魚の住める環境に手をつけていたが、発寒川はひと足早く、サケの稚魚放流にこぎつけた。厚別川でも計画の実現に向けて活動をはじめた。こうして豊平川カムバックサーモンは、その支流にも波紋が広がり、サケの会の運動は裾野をさらに大きく広げていった。そしてサケはのぼってきた。



札幌市の西区にある発寒川はかつてサケの川だった。再び戻っておいでと放流が行われた

1984

昭和59年



さけ科学館が誕生した

札幌市豊平川さけ科学館が10月６日に開館した。同館は総工費１億６千万円あまり。現住所は札幌市南区真駒内公園２－１。豊平川へのサケ回帰は、年齢を問わず、多くの人々に自然の仕組みや身近な自然環境保護の大切さを教えるという、大きな役割を果たした。また、街に帰ってきたサケを通じ、同じ運動を進めてきた諸外国との交流も生まれた。

札幌市は、こうした様々な現実とこれまでに検討・研究した観点から、札幌市民をはじめ、全道、全国いや世界の次代を荷なう人たちが、サケの観察を中心にしながら、動・植物などの生物やそれを取り巻く自然環境の仕組みなどについて、気軽に学習する施設の必要を認め、同館を建設した。サケ回帰が確実という立場からさっぽろサケの会をはじめ、関係者らが、早くからサケのための施設の設置を求めてきており、その要望に沿う形で科学館の誕生をみた。これには北海道が協力し、道立真駒内公園の中に施設が置かれた。

せっかくサケが戻ってきても、アフターケアができないのでは、カムバックサーモンは意味がないとする厳しい意見もあった中で、施設の登場は多くの道民に、また新たな希望や目標を与えることにもなった。官民一体の成果として、サケ回帰に次ぐ、運動の最大目標は、豊平川生れのサケのリサイクルであり、また実際にサケに触れることができる施設としても機能を十分に備え、人々のニーズに応えられる科学館が実現した。

建設の現場責任者だった札幌市用地部の高橋尚巳氏は当時を振り返り、「市としてはふ化場は造れない。しかしその機能は必要であり、苦労しました。特に湧水捜しは大変だった。あちこちに穴をあけ、ボウリングをやりました。また、最初の計画だけでは学習の場として不十分ということで、後で追加建設したものもあります。市としては精いっぱいのことをやりました。」と話してくれた。

サケの会を中心としたこれまでの運動は、単なるサケ回帰のキャンペーンだけではなく、サケの価値を幅広くとらえ、欧米にみられるような、「教育」との接点としてのサケを知ることにも力点が置かれていた。こうした観点からも、さけ科学館の果たす役割は重要であった。開館後は小・中学校の現地学習、高校・大学ではクラブ研修に利用しており、地方校では修学旅行のスケジュールに組みこむなどの利用価値の高い施設になった。諸外国からの見学者や全国からの見学者も増えている。また北海道サケ友の会の事務所として全国及び海外に窓口を開き、単なる科学館活動にとどまらない科学館としての存在をアピールしている。

オープンの記念行事の一つに、カナダのアウトドアスクール体験入学などの抽選会があり、サケの会を度々訪れているジム・マレー氏（カナダ太平洋サケ資源協会理事）が「さけおじさん」として招かれ、文字どおり国際化を押し進める科学館の一端を示した。

施設が誕生し教育の場として広く活用されはじめた中で、カナダから学校単位による交流学習の呼びかけがあった。それに応えるべく、サケの会は準備を進めていた折も折、キャンペーン運動開始と同時に積極協力を示していた宝酒造株式会社が「道内の児童・生徒の国際学習の交流基金に」と２千万円を北海道を通し北方圏センターに寄付した。これでまた新たな局面が開かれ、児童・生徒の実習教育が海外で展開されるというプランが進行することになった。むろんこれらは一方的交流ではなく、海外からも北海道に来てもらう双方交流が中心であるから、共に互いの国を視察・体験し理解しあえるまたとない機会ともなり、次代の人々を育成するという大きな目標が生まれた。１粒の麦とは言わないが、それに近い市民運動だったカムバックサーモン・キャンペーンが、ここまで到達するとは誰が想像していただろうか。これは全国でも例をみない市民運動の展開、発展であり、札幌っ子は誇るべき仕事を継続して成しとげたことに大きく胸を張ったものである。



さけ科学館で実際にナマのサケにふれる児童たち

この年は沢山の事業が行われた。２月の雪まつり会場で「北太平洋のサケ君に手紙を書こう」キャンペーンでは2,600余枚のハガキの応募があった。

サケの会は会員の学習で小樽水族館を訪れ、魚の学習を行い、開催中の小樽博覧会を見学している。サケの会員を中心に行われたが、大いに勉強になったと評判だった。

秋には、カムバックサーモン書展を開催。豊平川さけ科学館の完成を記念した書展で、道知事賞受賞者は、カナダサケ学習派遣団員に選ばれている。



小樽水族館で魚の学習をした「サケ学習小樽ツアー」



雪まつり会場に登場した氷像サケに乗った少年



サケポストが雪まつりの会場にできた。子供たちはハガキでサケに手紙を書いた

カナダでサケを学ぶ

第1回サケ学習団を派遣

サケ学習の国際交流が正式に始まった年である。それまで札幌市立東白石小学校とカナダ北バンクーバーのメープルウッドコミュニティスクールが、独自のサケ学習を通じて交流（1983年・昭和58年から）があった。これについて、バンクーバーの新聞はこう伝えている。

一行（39人）は2週間の日本旅行を楽しんだ。日本の家庭に民泊し、姉妹校の東白石小学校の児童たちと一緒に学習した。生徒の1人は「とてもすばらしい旅でした。特に民泊が楽しかった。違う文化だったから」と語った。また「僕たちは両校のプログラムを比較した。僕たちのはセーブサーモンと呼ばれていて、日本の方はカムバックサーモンといいます。違う点を全て比較してみましたが、名称が違っているだけでした。ただしカナダにはあるけど、日本にない設備がいくつかありました」と報告した。

この様に伝えた新聞はバンクーバーサン紙で、カナダにおけるサケ保護並びに増殖について、キャンペーンを行い、資金も提供している有力紙だが、新聞に掲載された子供たちの話は、サケについてほとんど同じ考えであり、そして日本への旅がいかに楽しかったかであった。そして同紙は、メープルウッドの生徒たちと家族が、3月下旬に北海道の札幌と網走から、バンクーバーを訪れる予定の日本人学生約40人を迎え入れる。と結んでいるが、この派遣がカナダサケ学習交流の第1回目だった。

この北海道の第1回派遣団は札幌、網走から計51人が参加。札幌医科大学高橋長雄教授を団長に、豊平川さけ科学館の小宮山英重氏（当時職員）ら大人4人が随行した。札幌からの派遣団の中には、前述の東白石小学校の児童もいて、訪問先のメープルウッド小学校児童・生徒との再会を楽しい想い出として心に刻んだ。



メープルウッド小の児童たちは日本の文化をたっぷりと体験した（写真①②）



出発に先だち板垣札幌市長に挨拶のあと、市庁舎内で記念撮影をした第1回派遣団

新しく「サケ友の会」が発足



水槽でサケを飼育する「サーモンスクール」HTBでも飼育（切りこみ）

「さっぽろサケの会」解散

小宮山氏の報告によると、メープルウッド小学校は、児童・生徒数360人。日本で言うところの幼稚園から中学1年生までを収容し、1クラス20人から25人の規模の学校。派遣団は4～5人1グループを構成し、ふ化場や飼育を観察。また北バンクーバーから車で約1時間ほどにあるスコアミッシュ町につくられた、アウトドアスクールで1泊2日のキャンプを体験した。ここにもミニふ化場があった。地元の小学生は、ここで毎年4,000人近くが体験学習をするのだという。サケ学習のほか、農場学習や自然観察、バードウォッチングなどの野外学習ができるひと通りの設備が整えられていたという。

子供たちのサケ学習は、マスノスケ、ギンサケ、シロサケのライフサークルの勉強。1人ひとりにコップを持たせ、中に稚魚を入れてふ化場近くの川（この時はキーカマス川）に放流させてくれた。コップに稚魚を移す際にコップの水の量とか、稚魚を受取る時のコップの差し出し方など、細かいアドバイスがあり、子供たちは、改めて命あるものを、その性質にあわせて、どう扱うかという点を学習したものと思われた。



北海道版アウトドアスクールで1泊学習をした児童たち。写真は植物について勉強中の児童

指導者として感じたことは、教師用サケ科魚類指導書があること。それも日本の高校や大学の教養課程の生物学に出てこない、最近の進化生態学の視点も取り入れてあるのに驚いたという。

また一般的に、日本ではサケの稚魚に対する姿勢はペット的であるが、カナダでは、あるがままの姿「その動物にその動物の生き方にまかせる」という、ある一定の距離をおくなどを感じとったという。

子供たちはカナダの広さ、自然の豊かさ、民泊先の家の大きいことや立派であることに驚いたふうだった。またカナダのサケの育て方は、自然活用が主流で、この点で豊平川さけ科学館と異なることや、カナダの仲間たちは、自然と上手に対話ができるなど、子供たちは交流でしか得られない文化を、いっぱいみやげにして帰札している。この旅から小学生最後のサケ学習になったという児童は「これからもいろいろサケ学習をして、またここにきてみたい」との感想を残している。こうして、第1回のカナダ学習は大成功だった。そして現在にまでそれが引き継がれている。

この年「さっぽろサケの会」が3月31日解散。翌1日「サケ友の会」が発足した。10日の総会で会則の成立、新理事などを決め、その後の理事会で会長に吉崎昌一氏、副会長に渡辺進氏を互選により選出した。

1986

昭和61年

林間学校などでサケ学習



カナダB・C州北バンクーバーから、列車で1時間くらいの小さな村に、チャカムス川がある。サケがのぼり、産卵し、やがて死ぬ。大ワシが群がりサケの死体を食べ、その残骸はバクテリアが分解し、川魚の子供たちの餌になるのだそうだ。自然シリーズの映画のようなシーンを生で見られるところで、カナダの子供たちは、ここでアウトドアスクールを体験している。北海道からの何組もの派遣団も同スクールを体験している。その報告によると自然産卵により飼育を行っているが、川床に小石を敷きつめ、水路両岸には樹木を調和よく並べ、日光の当たり方や風通しも具合よく、管理されているほか、岸辺から汚水やゴミが入らないように十分な注意も払われているという。

こういう場所で、自然を学び、また心を養うために子供たちは、やや強制的に合宿生活をさせられる。年間4,000人の子供たちが教育的体験をする。教育の基本的なスタンス、伴う施設、指導者の数、あふれるほどの自然など、正にその名にふさわしい教育を行っている。

カナダのこうした体験的教育場面で、北海道は1歩も2歩も遅れをとっているようにみえるが、州政府の事業として展開されているカナダの実情と、北海道のそれを比較するのは、少々無理がある。がしかし、求めて目指していくべき姿の一つには違いない。

サケの会や友の会が主催した「サケ学習1泊林間学校」や「子供サケ自然保護観察隊」それにクラークライオンズクラブのアクティビティーでの「サケ学習」は、それぞれ、魅力ある独自のアウトドアスクールである。

最初のさっぽろサケの会のジュニア組織「子供サケ自然保護観察隊」(1983年、昭和58年)は「豊平川の水源を遡る＝水を考える学習」を行った。観察隊は「サケの生態」「豊平川の水質検査」「現地サケ観察」など、専門の講師について学び、子供仲間では指導的立場になれるような勉強をしたものである。例えば、札幌の水ガメである豊平峡ダム見学や水道記念館の実験で、水の有用性を知り、水がなかったら人間の暮らしはどうなっているだろう。もし汚れ、サケが来なくなった時、人間も住めなくなるのでは—という論理などを学んだ。

また、夏休みの「1泊林間学校」は北海道青少年会館や豊平川さけ科学館などを舞台に、サケの生態などを本格的に学習。また豊平川岸の植物、川の水生生物などについても、つっこんだ学習をする一方、夜はキャンプファイアーを囲む楽しい集いももたれている。

このほか秋に「豊平川サーモンウォッチング」を友の会とさけ科学館が共催。豊平川を上流から下流に下りながら、のぼってくるサケを実際に観察しようというねらい。科学館の職員が網を入れて捕獲したサケの体長を測り、歯やアブラビレについて解説を受け、サケは川にリリースした。中にはすでに産卵床を守っていた親魚を発見し、その状況を観察している。また産卵前の成熟魚を捕え、科学館の自然産卵池へ放すことを決めたり、川を元気よく泳ぐサケを観察した。科学館の職員への質問も飛び出すなど、生きた体験勉強をした。観察のあとは広い川岸に腰を下ろし弁当を開いて食欲の秋も満喫したが、とにかく豊平川の自然の姿、生きている川の素晴しさを体験したことは、子供たちにとって、生の感動となり、インパクトの強いものになったようだ。札幌のアウトドアスクールは、スクールとはほど遠いかもしれない。しかし豊平川環境社会教育を、様々な形で積み重ねてきているのは事実で、この先もこうした努力が続けられることによって、新たな道が出来あがっていくに違いない。

さて勉強は勉強でも「サケの味」探訪という企画が友の会で実行された。道内初の試みとかで、日本最北端の宗谷岬、神威岬などを観光し、枝幸町でサケ捕獲を視察。さらに大牧場も見学したあと「サケ百科」料理にびっくり。大いに味を楽しんだ。翌日は「カニ缶詰工場」を見学コースに入れ、ここまできたのだから「ぜひサケを買いたい」と、値引してもらい思わずニンマリ。その上に、枝幸町からもサケみやげがあって、参加者一同大いに感謝した。会員中心で総勢15名の旅だったが、このツアー友の会の気境理事、大塚事務局長のアイディアがぴたりと決まった。

人気を集めた「学習の旅」



林間学校に参加した児童たち



「グルメの旅」で皆さん大満足



「グルメの旅」でサケ料理の見学勉強


FRIENDSFRIENDSFRIENDSF

1988
昭和63年

札幌で第4回国際サケ会議

豊平川にサケを！ あれから10年

豊平川にサケを戻そう。カムバックサーモン運動は、この年10周年を迎えた。これを記念するような形で「第4回国際サケ会議」が札幌で開かれた。サケとは直接関係ないがこの年の札幌は国際的な話題が集中した。春に待望の青函トンネルが開業。カナダのエドモントンで「北方圏都市会議」が開かれ、北海道は会議の重要な役割を果した。そして「サケ国際会議」の1週前の「ミス・ユニバース」で札幌の田代絵里さんがみごと日本代表になった。その美しさについてなによりも自然であることが最大の評価であったという。

こうした中で、豊平川のサケも「国際舞台」に登場した。しかし、札幌では実はポストサーモンが話題であり、10年前にはじまった熱気はさめていたのである。「サケの会」も「友の会」と一歩ひいたような名称になっていた。

「友の会」の講演は「カムバックサーモンその運動の理念と発展」というものだったが、その中で一つの本音が次のように語られた。

「サケの会は発足の当初、第一回の回帰を果した時点で解散し、メンバーやスタッフはそれぞれの理念に従って、他の運動に旅立っていこうと考えていた。しかし全国に同じような団体が産声をあげ、それが外国にも広がってとなると、連絡機関の役割を荷わざるを得なくなってしまった。これは、今10年を迎えた歴史の中で、われわれが直面した大きな問題であった。〝サケが戻ったのだからもうこれ以上のイベントはないよ〟の声が、強く胸を打ったものである」

国際会議には、アメリカ、イギリス、カナダの外国の代表。国内は東京にサケを呼ぶ会ををはじめ「川にサケをのぼらせよう」「川の浄化を図ろう」とする全団体が顔をそろえたようなにぎやかさであった。その人たちは、この本音をどう受けとめたかの、改めての取材はなかった。そして今一つは、「サケの会」が実感し、今もそれが継続し、ジレンマになっている日本の事情については、諸外国の代表には、一つの印象を与えたようであった。

カムバックサーモンのジレンマとは何か。日本へのサケ回帰は年々ふえ続けている。その記録更新の中で、「サケよ！帰れ」の運動が発展してきた。人々はサケは帰っても魚は安くならないとの印象は変わらない。そして定置網の漁業者は、御殿をつくるほどうるおっている。このおかしな図式の中で運動がはじまり、発展してきたという現実。知床半島では人も住まない原野を流れる川に、いくつもの砂防ダムがつくられ、遡上性の魚類は消える。そしてまた大規模な砂防ダム計画が生まれる。そこには川にすむ生物の存在などは全くすっぽりと抜けている。道東の大規模牧草地造成でも、淡水魚を絶滅の渕に追いこみ、造成は重油、廃油（重機類による）を川に流しこみ、開発が完成すると、農薬が使われてプランクトンや水中生物が死ぬ。牛が水を飲みやすいようにと、流域の樹木が伐り倒され、昆虫や葉虫がいなくなり魚の餌が底をつくのである。が、サケは大量にふ化され放流され、また大回遊してくる。日本の川は、サケ増殖のために必要な川水だけあればよいのであって、しかもこれが国策なのである。

札幌の女性が日本一になったわけは、「なによりも自然さが最大の魅力」だった。日本のサケと川には、その自然さが欠落している。その中でカムバックサーモンは10年を迎えた。サケの会の講演は、多くのコトを訴えることになった。そしていくつかの自然河川を残そうという運動のはじまりやサケによる教育を、カナダ並みにもっていきたいとする意欲の高まりが、次の10年の運動へのアプローチにしたいと、世界や全国の友に語った。

会議には、太平洋サケ協会会長のジム・マレー氏、バンクーバーのセーブ・ザ・サーモン協会会長ジム・マクドナルド氏、テムズ川TWA広報担当ドロシー・シーリー氏、アメリカのワシントン州水質管理局地域教育指導官のクレア・ダイクマン氏らを筆頭に9氏が参加。札幌のカムバックサーモンに強い関心を示し、数多くの助言と支援を与えてくれた人たちである。彼らを前に「われわれは全世界に広がった、カムバックサーモン運動の仲間たちとの連絡を密にし、われわれが最初から抱いていた理念である、次の世代の人々に、よりよい自然環境と、生命の素晴らしさ感じ取る心を受け継いでもらうために、新たな作業が必要になっている。そして友の会は若くて活発な第2世代の人たちの手によって、それらが切り拓かれていくだろう」と述べ、これは国際会議での日本の決意とも受け止められたが、このことは、会議の参加者全体の理念とも結びつき、改めて「サッポロ」の在り方に拍手が贈られたのである。







①「サケ」「川の浄化」など真剣に話しあうワシントン州の関係者
②B・C州では幼児たちにも楽しいサケ学習が行われている

1989
平成元年

文化や伝統は土着の産業から生まれてくる



「友の会会長」に気境公男氏

気骨の人、気境公男さんを会長に迎えた。北海道にあって多くの仕事にたずさわり、教育長時代の教育行政の主体的確立。北方圏センターでは本道の国際化の基盤を構築した。カタイかと思えば、やわらかいエッセイも書く。

子供に大きな夢と愛を託すという自由人。サケ運動国際化時代にぴったりの会長である。

小渕恵三官房長官（現総理大臣）が「年号は平成」と発表し、新しい時代が幕をあけた。北海道サケ友の会も、気境公男さんが理事会の推薦を受け、新会長に就任した。

それより先の春、気境さんは道内18校の小・中学校で推せんされた子供たちをつれて「第5回カナダ・北米サケ学習派遣団」団長となり、自ら国際友情の輪を広げるため、また北海道より一歩先んじている感のあるカナダなどの、サケ学習と教育について現場を視察し、その学習交流の模様を「北の川」に報告している。カナダで、一行を迎えた金髪の少女は「私たちは思いやりの気持を大切にします。あなた方への友情は、私たちの最大の贈りものです」の言葉に暖い気持ちが伝わった。その少女のいる学校の教室には、160尾の稚魚が元気に泳でおり、北海道からやってくる友だちに会わせて、放流すると決めて待っていたという心づかいに、サケ学習交流の一つの意義を感じ取った。「ロマンに溢れるサケのライフサイクルを学び、思いやりの心を胸に刻み、自分の放流した稚魚が、丸々と太って戻って来るのを夢なみがら、奇麗な川の流れを守る」そういう人に育ってほしいと、気境さんは結んでいる。それは、友の会が始めた学習交流派遣の活動が、未来を生きる子供たちに、必ずプラスするということだろう。

新しい時代の到来「友の会」教育に取組む



北海道に住む全ての人達はサケと深くかかわりあってきた





（上）子供たちの国際交流は全ての場面で得がたい教育になっている。友情が生まれ、互いの国を知ることもまた教育につながることだった（右）

こうして順調な学習実績とは別に、釧路から告発のような厳しい発言があった。その要旨は「稚魚を育ててみようという“稚魚の里親運動”」に対し、ふ化場側からストップをかけられたという現実に対して、現場から「この運動を大切にしたい」とする気持ちを卒直にぶつけてきたものである。

釧路シャケの会は言う。小学校2年生の国語教科書に「サケの話」が8ページにわたって掲載されている。教科書は全国版だから、ひょっとしたら沖縄を含め、全国の小学生がサケを学んでいる。そして小学校5年生の理科で、メダカの飼育観察が載っている。が、釧路にはメダカはいない。だから買ってくる。子供たちの身辺や生活との繋りさえ発見できない学習。生きものと環境の関係や生き物が環境のシンボルであるという重要な事柄や事実とは全く無関係な学習。だから東京の子供は「牛乳はどこでとれるか」と聞かれると「スーパーにあるよ」の答えが返ってくる。ところが釧路の子供も「せいきょうで売っている」と答えたのだそうだ。郊外にある鶴居村は日本一の酪農村だというのに、この答えだった。



河川環境を学習する児童

文化や伝統というものは、その地区特有の土着の産業から生まれ、育つものであろう。産業・文化・教育などが一体となった街づくりを目指さなければならない。だとすれば、漁業の街、釧路の子供たちは、サケを学び、サケを通じて学習しなければならないはずだ。「メダカはすぐに成長しふ化も早いから教材として適当」というような教育指導で、生命の尊さやいじらしさを子供たちは、体験できるのかどうか。まして「サケのふるさとの川を殺してはいけない―という知性を育むことはできまい」というのである。



'89年の第5回「サケ学習交流」は北米シアトルのジャクソン校の全生徒が迎えてくれた「友情の植樹」を行った

豊平川のカムバックサーモンも、3年目で稚魚の提供（貸与）が大幅に減った。増殖河川ではない、教育河川なのだからそれで十分なのかもしれない。しかし、豊平川での自然産卵は確実に増加している。これは例え数が減っても毎年確実に放流してきた現実の成果であり、豊平川にまた新しい生命を与えたという、市民運動の結実の一つと言えるだろう。そういう観点からしても、この年の釧路の発言に気境さんの見たアメリカ・カナダのサケ学習と教育の現状を写しあわせてみると、その食い違う現実に、10有余年の時を経た「友の会」としても、新たな運動の展開を考えざるを得なくなってくる。カムバックサーモンの運動は、もはや全国で市民権を得ており、道内では、地方で様々に自立した運動の展開もみられるようになった。皆でかつぎ出し、威勢よく動くミコシを、どうさばいていくのか、実は友の会は真剣に悩んでいた年でもある。平成元年は「サケ友の会」にとって、次の10年をどうすべきかを決める年でもあった。そして「サケ学習の国際化」と「教育」の路線の拡充と新たな国際交流の道筋をつくることになる。

1990

平成２年

サケがのぼってくる川で邪魔になる倒木を協力し力を出しあって取り除く児童や生徒たち



共同で環境を守る〝地球市民〟

第５回国際サケ会議「子供と環境」

湾岸戦争が人々を驚かせたこの年の２月、第５回国際サケ会議が東京で開催された。東京にサケを呼ぶ会が主催したもので、北海道サケ友の会の気境会長ら多数の理事が参加した。

会議のテーマは「子供と環境」。各国の子供や指導者らが発表し、子供・サケサミットの雰囲気だった。友の会の活動も「サケの教育展開」「川と生活環境づくり」「サケ自然運動の情報センター」などを柱にし、新たなプランニングを構築しはじめていた時だけに、東京国際会議はタイミングのよい会議だった。

活動報告のⅠ「カムバックサーモン運動と学校教育」では、カナダのB・C州バーナビー市サンクレスト小学校教諭のヴァーナル・アンダーソンさんが「私たちの地球は確実に狭くなりつつある。今日の教育上の仕事は、これまでのいずれの世代より以上に、環境保護に関する技術と関心を子供たちに教え、準備をさせることだ。また、国境を越え環境を守るという共通の大目的のために、共同作業をすることにより、自分自身を“地球市民”と見なすことが必要だ」と訴えた。イギリスのバークシャ州レデング市チルターン・エッジ高校のジェラルド・コニグ教諭は「当校ではコンピューターを用いたシュミレーションにより、生徒たちは川での魚の殺害を経験する。彼らはこの出来事の調査を担当する公害係の役人の役割も演じる。子供たちは調査のために、サンプルを採取し、結果を記録するための川のほとりの多くの場所に足を運ぶことになる。そしてこのシュミレーションで重要なことは、魚を殺した汚染の性質と源泉についての情報及び仮説のテストである」「また、昨年（1989年）の秋には、生徒たちの１グループが、学校に隣接する荒廃した土地に保護区域を設け、大きな池を掘り、植物を植え、魚を放ち創造的なすばらしい学習に皆が積極的に参加した」との体験を報告した。アメリカのワシントン州スタンウッド高校からやってきたドン・ベイズ教諭と高校１年のロウリィ・ベイズ君は「①河川を養子にする②河川の改善③魚の学習④インディアン部族たちの研究の手伝い」を要領よくまとめて報告したが、ここの高校ではスティルアグアミッシュ川の大流の水質を研究するために、この川の２カ所とチャーチ川の２カ所、計４カ所から毎月150の水サンプルの採集を続け、分析の手伝いをしていると語っていた。これらの報告は、教育・学習という観点で日本よりかなり前を歩いている印象であった。

活動報告のⅡは「環境活動と行政の役割」という大テーマだった。カナダからセーブ・ザ・サーモン協会ジム・マクドナルド会長が「刑務所にもふ化作業が広がった」と報告し、イギリスからは、おなじみのDSAパブリケーション代表で前テムズ川担当局にいたドローシー・シーリーさんが「さっぽろサケの会は私たちの仕事に対し大変熱意を示してくれた。その上に彼らは外国から来てテムズ川に大量のサケの稚魚を放流した、最初の団体だった」とテムズ川と豊平川の絆を語り「一般大衆にとって、これは何をなすべきか、またそれをするには公共のお金がどの位必要なのかが十分に理解されたとき、行政は真に始まる」「そしてテムズ川はよみがえった」とのことについても外国からの要人や団体を迎え、何が起ったかを説明することは真に快い任務だったと、つけ加えていた。

第Ⅲのテーマは、会議の目玉とも言えるもので「川をきれいにするにはどうしたらいいか」。発言者は小学生から高校生まで全て子供たちだった。また、サケにはこだわらないで、環境問題として川をとらえ、そこでの実体験が示されていたのは、友の会のプランニングの中にも生かされたものと思われる。

オーストリアからウィーン市ドゥヴリング区連邦ハイスクール１年のトーマス・シュトッキンガー君は、オーストリアはドナウ川が中心だが、河口はルーマニアにある。ドナウ川は東オーストリアの主流であり、河岸が原生林で囲まれ、様々な動植物が生息する「アウ」（河川によって形成される森林地帯）の生死を握っている。その「アウ」をおびやかす発電所の建設が、反対グループの活動によって、阻止されたという市民運動の話。そして、リサイクルできる廃棄物の収集から、市の行政へアプローチしたこと。家庭の環境問題を子供たちに伝えていくことで「私たちの世界を人類文明の脅威から守ることができる。現状をみれば、これから先将来は必ず変革が必要である。そして将来は世界の子供たちのもの」と結んだ。カナダのB・C州レイク・カウチン村の小学校６年のミッチェル・スミス君は「レイク・カウチンは、森林地帯で貴重な資源または水だと思う。私たちが大変幸福なことは、湖の水も川の水も飲むことができることだ。しかし消費者と産業が、私たちの水をムダにしている。そして汚染も進んでいる。東部カナダでは14,000の湖が酸性雨で死滅し、西部カナダではいくつもの大きなパルプ工場が水を汚している。これは変化のはじまりだ。しかし他の国はカナダほど幸福ではない。第３世界の国々を苦しめる病気の80％は、水が伝達因子であると信じられている。犠牲者のほとんどが子供だ。その子供たちは世界の未来だ。我々は未来なんだ。だからこれは我々の責務だと思う。子供たちはどのように手伝うのか」と疑問を投げかけた。そしてカウチンの生徒たちは①認識する②我々の環境に精通する③環境を保護する方法を学ぶ④我々の環境を尊重するなど７項目の学習目標をあげている。最後に「我々の河川をきれいに保ちましょう。世界の子供たちが成長して、きれいな河川ときれいな地球を楽しめるようにしましょう」と力強く呼びかけた。

また同じカナダのマントバ州ウィニペグ市ビンセント・マッセイ・カレンジエイト高校１年生リンダ・ハサウトさんは「環境も、予防は治療より容易」という趣旨で自然は万人が共有する財産のすべて「それを守ることは私たちの手に任されている」と語り細かく問題点をあげて説明した。

ソビエトからは駐日ソ連大使館付属学校６年生アレクサンドル・バジェノフ君は「川で分けられた国の子供たちが、川の管理を応援するようになったら素晴しい」と話し、環境保護の児童団体「若き自然愛好家協会」「森林保護協会」「グリーンパトロール隊」「ブルーパトロール隊」などを紹介してくれた。そしてイギリスのチルターン・エッジ高１年生ジョセフ・マンフォード君は「環境を守ること。それは未来の世代のためです」と訴え、アメリカのワシントン州エバレット市ジャクソン小学校５年生のトリシア・ケン君とキンバリイ・トロウブリッジ君の２人は「北海道から22人の児童たちを迎えたこと。その時多くの友情が生まれ、それは両国が理解を深めることへつながっていくだろう」と報告した。

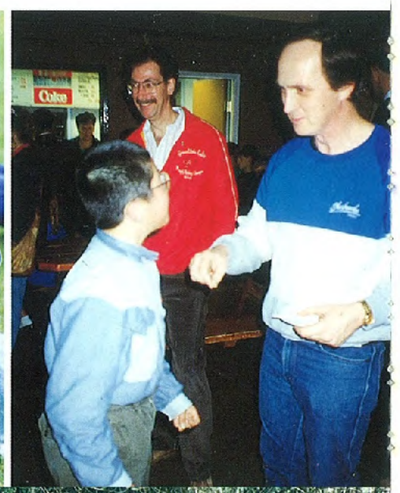
子供たちの発言や訴えは、大人の心にもインパクトを与えサミットは大成功だった。これを機会に、また新たな国際交流の道が切り拓かれていった。

小・中学生が大使役果す

サケ学習国際交流

友の会が提案 カナダと合意







サケ学習の国際化は1985年（昭和60年）だが、電話とか、レターなどによる交流はすでに1980年（昭和55年）からはじまっている。サケの会も1979年（昭和54年）にカナダに招かれており、同じ年カナダからカナダ太平洋サケ・マス資源協会理事長のジム・マレー氏が札幌にやってきた。ここまでの国際化交流は、一方通行のようなもので、交流が双方通行になった現在の姿は、この年に決まったものである。

しかしその原型は、カナダのサケ保護協会が、北バンクーバー地域の小・中学校の200校が、サケを通じて交流したいと言っている学校を紹介してくださいと、北方圏センターと北海道教育委員会へのプロポーズではじまった。北方圏センターはカナダ側の名簿をもとに、実現のために具体的な作業に入った。北海道教育委員会は「北海道・カナダサケ学習交流計画推進要綱」をつくり、その連絡会議で各支庁にも呼びかけていった。こうした下地の上に、いわゆる双方交流の道が拓けてきた。昨年平成2年に、学習交流団の隔年交流について、カナダB・C州政府と交渉をはじめ、この年は同州日本事務所ジェームズ・イェロリーズ氏が来札。気境会長が提案した「サーモン大使の相互隔年交換交流」について、同州の教育大臣が具体的な方向で進めたいとの意向を示したと明言し、実現した。また双方交流だから、カナダからのサケ大使受入れの態勢づくりも進められた。こちらから送りこむ選考委員会が打ち合わせを行い「迎入れの態勢のカリキュラム・スケジュール」等の骨子を固めた。これには道教委生涯学習部が全面協力を約束。また、カナダからのサーモン大使を受入れるホスト・ファミリーの決定や打ち合わせを行い、その第1陣が10月初旬来道した。一行は教諭4名、生徒22名の計24名。大滝温泉、滝野自然公園山の家での自然学習、そして札幌市内の小・中学校での体験学習を行い、ホームステイで異文化の生活にふれ、楽しい想い出を作ってもらい、札幌クラークライオンズクラブも協力した。

1年おき相互に大使を派遣



母川を大切にするカナダのサケ学習を日本の児童たちも学んでいる

こうした動きの中で、在日カナダ大使館（東京）でB・C州政府が「環太平洋教育計画イニシアチブ」を開き、教育・産業・通産の部内でデモンストレーションを行った。友の会から気境会長らが参加した。カナダはこの後、すぐにB・C州のクロフォード国際教育局長を札幌に送りこみ、1回目以降の双方交流について、札幌で友の会、道教委、北方圏センターなどとミーティングを行い「今後のプラン」を決めている。

カナダのサケ増殖は、国策ではあるが、日本のそれとは基本的に異なる。日本は“人工”が国策であるが、カナダは、自然の法則に従うが第1である。従って、サケが住む川やその自然の保全は、極めて重要であり、そのための学習や教育への取り組みも重要視されるわけで、子供たちも実際に行動している。しかも学校やクラス単位の活動をしており、環境保護が生徒たちの日常の思考や行動の一部となるよう、カリキュラムに組みこまれており、このあたり日本との相違や基本的な姿勢の違いを、10日前後の学習で、わかりあえるというのは難しい課題でもある。しかしサケの学習の名のもとに、子供たちがそれぞれが受止める異文化の体験は、先々で、大きな実を結ぶかもしれないという期待は十分にあった。

札幌市立幌南小学校の高野泉さんは1991年(平成3年)の交流学習に参加した。その印象について、やはり体験によるインパクトの強さを「北の川」に書き残している。

第1回「北海道サケ会議」開催

「雄大な自然。学校は休み時間があれば食べものを持ち歩いて構わない。ピアスや指輪をつけていることにびっくりした。ふ化場ではサケに麻酔をかけること。隣のおばあちゃんの誕生日を祝うホームパーティに参加し、近所の人たちの友交を大切にしていると感じたこと」など日本との違いを次々に体験した。高野さんはまた「大きくなったら、もう一度カナダへ来よう。自分の力で—」と心に決めたと結んでいる。

カナダのサケ学習などをつぶさに視察し、体験してきたのはやはり友の会であり、活動プランニングの一つに学習をあげてきた。そしてこの年から「北海道サケ会議」をスタートさせた。第1回は10月14日北方圏センターの国際会議場を舞台に開催「サケ学習のアイディア」をテーマに論議を重ね、また発展させる方向で、友の会の今後の行き方を示した。この会議でつめられたものが、どんな形で学校教育や市民生活にフィードバックさせていくか、大きな課題はあるが、友の会が成すべき事業としてこの「北海道サケ会議」は定着したのである。

カナダなど外国のサケ飼育の考え方に学ぶことが多く、交流による学習効果が期待される

1992
平成4年


産卵床を守ろうとするサケ

テムズの魚道が開通

「川の文化」サケを語る

豊平川は、大都会の中央を格好よく流れていく。河畔は、テニスコートがある。サイクリングロードもある。小公園にベンチ、季節の花が折々に咲き乱れ、奇麗な川になった。吹き抜ける風も、いかにも爽やかである。

幕末の探検家・松浦武四郎が見た豊平川は、ひとクセもふたクセもある野性を秘めた川だった。それは、今は比べものにならない、小汚い川だった。しかし、自然に振るまっていた。大自然に調和した舞台の役者として、その役割を十分に演じていたのである。役者たちの中には、サケ類の魚をはじめ、川岸の動植物も数多く、それぞれに役を演じ切っていた。


札幌市民の憩いの川辺になっている豊平川

豊平川は、開発という新しい演出者の登場で、役の性格を変えた。その表情は、大都会の人々に、水辺のオアシスを与え続ける、やさしさに満ちあふれている。そして昔のようにサケを迎え入れてくれた。が、サケは今のところ、豊平川で生涯を全うすることはできない。アイヌら先住民族のいう「自然は未来の世代からの借り物」は、今や形を変えてしまい、〝借り物〟の姿を失った。

川の文化は、人々の生活と切り離せない。利水や治水がなければならないことは、承知している。が、今少し、自然を活かし、調和のとれた作業が考えられないものだろうか。わずかに残された、川岸の植物群が根こそぎ抜かれてしまい、本当に見通しのきく、裸の川にされてしまった豊平川。いつ起こるかどうか判らない洪水に、危険で邪魔という判断であったという。こんな川に魚を放し、自然に増殖させようとしても、魚が休める木陰とてない。むろん餌もないでは、それは無理な話である。


サケが自然に一生を終えられる川をどう守っていくのだろうか

サケ友の会は、サケの住める豊平川への活動を続けてきた。毎年、魚の住める、やさしい河川にしてほしいと訴え続けてきた。魚道の設置は願いどおりになったが、それでやさしい川になったのかどうか。今年2回目の「北海道サケ会議」のテーマは「川の文化とサケ」だった。大いなる議論を展開し、先を見つめたが、具体的なプランはなく、現実的には負の事業が進められた。友の会としては、川の自然を可能な限り活かした作業を、これからも、事ある毎に訴えていかなければならないことを実感している。

こうした時期に、標津町のサーモン科学館が、カナダのキャピラノふ化場と姉妹提携した。「幾春別川をよくする市民の会」発足の準備を岩見沢市を中心に進めている。そのテーマは「水と緑と文化のプロムナードいわみざわ」というもので、かつて炭鉱によって汚されていた、


幾春別川をよくする市民の会でもサケの稚魚放流を行っている

幾春別川をクリーンアップし、サケを戻す計画でいる。

恵庭市では、市内を流れる漁川を、きれいにし、昔のようにサケがのぼる川にしようという「えにわ市民サケの会」の準備が進んでいる。川の浄化と、自然の回復を通じて、恵庭を見つめなおしたい。サケの飼育を通じて、恵庭の人づくり、まちづくりに貢献する—という大きなテーマをじっくりと温め、それこそふ化の時期を待っているという。岩見沢も、恵庭も来年の春には、具体的に行動を開始する。川の文化を見つめ、サケを育てることで生命の尊さを知るという「サケ教育」は、友の会が、全道に呼びかけているもので、その根が地方にも広がり、がっちりと根づいてくれれば、そこからまたまた新しい文化が生まれてくるに違いない。大いなる期待と夢がふくらむのである。

この年の夏、余市出身の毛利衛さんが宇宙に飛び出し、新たな1ページを、北海道の歴史に刻んだ。「宇宙からみれば国境なんてない」。しかし、自然が自然であることの大切さは、世界共通のテーマである。

1993
平成５年

全道の子供たちと共に





間もなく10年を迎える豊平川さけ科学館

札幌の豊平川さけ科学館は、間もなく開館10年を迎える。カナダやアメリカなど交流のある国の子供たちが、ここで学習し、日本を体験してきた。他の国々の来館者もふえ、単なる施設以上の役割を果たしてきている。

今年で３回目を迎えた北海道サケ会議の席上気境会長が、カナダB・C州とのサケ学習の交互受入れについて新しい提案を行った。新提案は、これまで、来道するカナダの子供たちは、札幌市が中心になって受入れてきたが、その主体を地方の市町村教育委員会に移設しようというもので、次のチャンス（２年後平成７年受入れ）から実施する方針を打ち出した。

この提案があった数日前、隔年相互交流２回目のB・C州の子供たち20名が元気にやってきたが、この時のスケジュールは、千歳、札幌、登別、八雲（遊楽部川の見学）、札幌という移動を10日間でこなし、この間、地方の自然や施設を見学した。これはかなりハードな日程であって、本当の学習になったのか、貴重な体験をじっくりと味わえたのかどうか心配な面もあった。こうした日程も、主体的なペースが地方に置かれることで、もっと意義のあるものに変わってくるだろうし、子供への負担も軽減される。また、集中から分散することで、B・C州がかねてより希望している、隔年から毎年交流への道も開けてくる可能性も出てくる。地方にも、サケをはじめその土地の動植物についての施設もあることでもあり、それらの活動にも拍車がかかることになる。

話はまたさけ科学館に戻るが、右のページにあるようにこれだけの学校や生徒たちが、サケ学習を行っているのだから、同施設の存在は極めて重要になってきた。豊平川サケの受皿というだけの役割を越えざるを得ない節目を背負い、それだけ親しまれる科学館になっている。

道内サケ学習校（幼稚園１校・小学校179校・中学校24校）

（平成10年５月・北海道教育委員会集計資料より）

【石狩管内】
（千歳市立）高台小
祝梅小　北陽小
（恵庭市立）恵庭小
島松小　恵み野小
柏小　恵み野旭小
和光小　若草小
（厚田村立）厚田小
発足小

【渡島管内】
（上磯町立）谷川小
茂辺地小　上磯小
浜分小　久根別小
沖川小　石別小
（大野町立）大野小
（鹿部町立）鹿部小
（戸井町立）日新小
（森町立）姫川小
森小　駒ケ岳小
赤井川小　石倉小
濁川小
（松前町立）松前小
（恵山町立）尻岸内小

【桧山管内】
（熊石町立）関内小
（瀬棚町立）瀬棚小
（厚沢部町立）美和小

【後志管内】
（小樽市立）祝津小
（積丹町立）余別小
余別中

【空知管内】
（岩見沢市立）岩見沢小　志文小　幌向小
朝日小　日の出小
第一小　第二小
東光中　緑中
（美唄市立）東栄小
南美唄小　茶志内小
西美唄小
（三笠市立）三笠小
幌内小　新幌内小
幾春別小　美園小
三笠中央中
（砂川市立）砂川小
中央小
（南幌町立）南幌小
夕張太小
（月形町立）知来乙小
（北村立）北村中

【上川管内】
（旭川市立）大有小
神居小　江丹別小
嵐山小　永山西小
豊岡小　緑が丘小
東光小　愛宕東小
忠和小　西神楽小
共栄小　神居古潭小
末広小　東栄小
旭川第一中
神居古潭中
（士別市立）多寄小
中多寄小
（美瑛町立）旭小
（東神楽町立）東聖小
東神楽小　志比内小
忠栄小　東神楽中
（上川町立）上川小
（東川町立）東川第一小
（中川町立）中央小
佐久小

【留萌管内】
（増毛町立）増毛小
舎熊小
（小平町立）小平小
（苫前町立）力昼小
（天塩町立）振老小
北産土小　啓徳中

【宗谷管内】
（稚内市立）富磯小
（浜頓別町立）斜内小
宇曽丹小
（枝幸町立）問牧小
徳志別小

【網走管内】
（網走市立）西小
（小清水町立）旭野小
（斜里町立）峰浜小
大栄小
（上湧別町立）開盛小
（常呂町立）常呂幼稚園

【胆振管内】
（苫小牧市立）苫小牧西小
（伊達市立）黄金小
長和小
（白老町立）社台小
虎杖小　虎杖中
（穂別町立）和泉小

【日高管内】
（浦河町立）萩伏小
野深小
（えりも町立）庶野小
庶野中

【十勝管内】
（帯広市立）稲田小
大空小　森の里小
啓北小　大正小
第七中　第八中
南町中
（広尾町立）音調津小
（音更町立）昭和小
木野東小　音更中
（士幌町立）下居辺小
（豊頃町立）茂岩小
（本別町立）本別中央小
（幕別町立）幕別小
札内北小
（清水町立）御影中

【釧路管内】
（釧路町立）昆布森小
昆布森中
（厚岸町立）厚静小
（標茶町立）中虹別小
（阿寒町立）布伏内小
（浜中町立）霧多布中

【根室管内】
（根室市立）温根元小
和田小　歯舞中
（別海町立）野付中
（標津町立）標津小
忠類小　薫別小
薫別中　標津中
（羅臼町立）飛仁帯小
知円別小　知円別中
羅臼中

【札幌市内】
東白石小　大倉山小
幌南小　栄町小
中の島小　南の沢小
山の手南小　清田南小　創成小　円山小
西野第二小　太平小
真駒内曙小　西岡小
中央小　藻岩南小
札苗北小　八軒北小
清田緑小　和光小
手稲中央小　平岸西小　厚別西小
富丘小　前田中央小
常盤小　手稲宮丘小
屯田小　山鼻小
福住小　前田小
栄東小　二条小
厚別通小　北園小
発寒小　新陵東小
平岡小　発寒東小
白石小　北野平小
旭小　大谷地東小
開成小　上野幌東小
東園小　星置東小
鴻城小

1994
平成6年

待望の魚道ができた



①最初の魚道は雁来につくられた
②サケのふるさとの一つ琴似の発寒川にも魚道がある。上は旧国道
③待望の魚道はこの年に豊平橋の下流につくられた

「水を治める者は国を治める」の諺がある。人間が住みよいように、川を“開発の名”のもとに変えてしまった歴史をわれわれは見てきた。中でも治水事業は、魚にとって必要な川の形態を大きく変化させる。落差土、砂防ダムなどにより川の流れは、分断される。利水のためのダムも、同じような結果をもたらせる。人間にとって必要な河川事業というものは、全ての川魚類にはマイナスのように思われる。北海道一の暴れ川の名をいただいていた豊平川と北都札幌の関係は、正に川を治める術が先行し、魚類への配慮は全くなかった。まして、沖どりや定置網によるサケ漁が主流で、必要な数の稚魚を必要な川水によって飼育放流するという国策の前に、川でサケを活かす考えなどは、全くナンセンスだったのである。川はどんどん姿を変えていった。そこには川辺に憩う人影などという寒々とした光景だけが残った。

しかしサケはのぼってきた。そしてもっとどんどんのぼらせてやろうじゃないかとの声は日増しに大きくなり、サケの会や友の会が、関係官庁や団体に市民の願いを訴え続けた。そしてチャンスがやってきた。大人のアシストで、子供たちがみごと、ゴールをゲットした。それも時の鈴木善幸総理大臣からお墨付きをいただいたゴールだった。



豊平川に魚道を造ってください。これがお願いだった。

「友の会」社会貢献賞を受賞

自主的な社会奉仕につとめ
環境にやさしい地域づくり



表彰状を受ける気境友の会会長

今、豊平川には、いたるところに魚道がみられる。西の発寒川にもある。魚道にもいろいろ種類があるそうで、中でポピュラーなのが「水路式」。豊平川や発寒川のは皆、この水路式である。

ところで、北海道における魚道の歴史の中で、サケ・マスを対象にした設置構想が生まれたのは、1979年（昭和54年）というから、サケの会が豊平川で第1回稚魚放流壮行会を行った年である。同年から5カ年計画で事業が始まったが、全国100河川のうち本道は71河川で大半を占めた。ところが対象魚はなんとサクラマスだった。54年の計画はサケはずしで始まっていたのである。昭和20年代の後半、アメリカのR・バンクリーブ博士が、日本の魚道について勧告が出された折りに、100%人工増殖に頼り切っていた本道の魚道研究の立ち遅れが、あからさまになったという。まあ、それはそれとして、今は幌平橋下流の難所には魚道ができた。南七条大橋やその下流の橋にも、魚道がつくられた。サケにとっても待望の魚道であろうが、昔のようなサケののぼる豊平川を夢みた人たちにも、やはり待望の魚道であった。

幌平橋下流の魚道付近床止めあたりで、この夏はアユが、友釣りで釣れていた。香魚とも言われるアユが住み、そのアユが好んでなめるコケも床の石について、なめ跡がみられるという。川虫も結構いますよとの話も聞かれた。

サケの一生を4年と割り切ってみると、ことしは第1回豊平っ子から数えて4代目か5代目のサケが帰ってきたことになる。友の会の会員をはじめ札幌市民は、サケがのぼる川を持てることに誇りを持ち、これからも調和のとれた河川開発とその維持に協力し、サケがのぼる生きた川づくりに大きな期待を寄せている。

この年の正月、平成5年度北海道社会貢献賞の表彰式が札幌のグランドホテルで行われ、「北海道サケ友の会」も晴れの知事表彰を受けた。

社会貢献賞は、地域住民の自主的な社会奉仕の精神のもとに、公共財産である道路、河川の維持、保全や災害の防止、また清掃活動などを行ってきた団体に贈られる。友の会は「サケをシンボルにした環境にやさしい川の再生への活動と、地域づくりの努力」が認められたものであった。

友の会の調べで、この年までの道内のカムバックサーモン市民団体は以下のとおりである。



「サケ学習国際交流」パネル巡回展が好評のうちに終了した

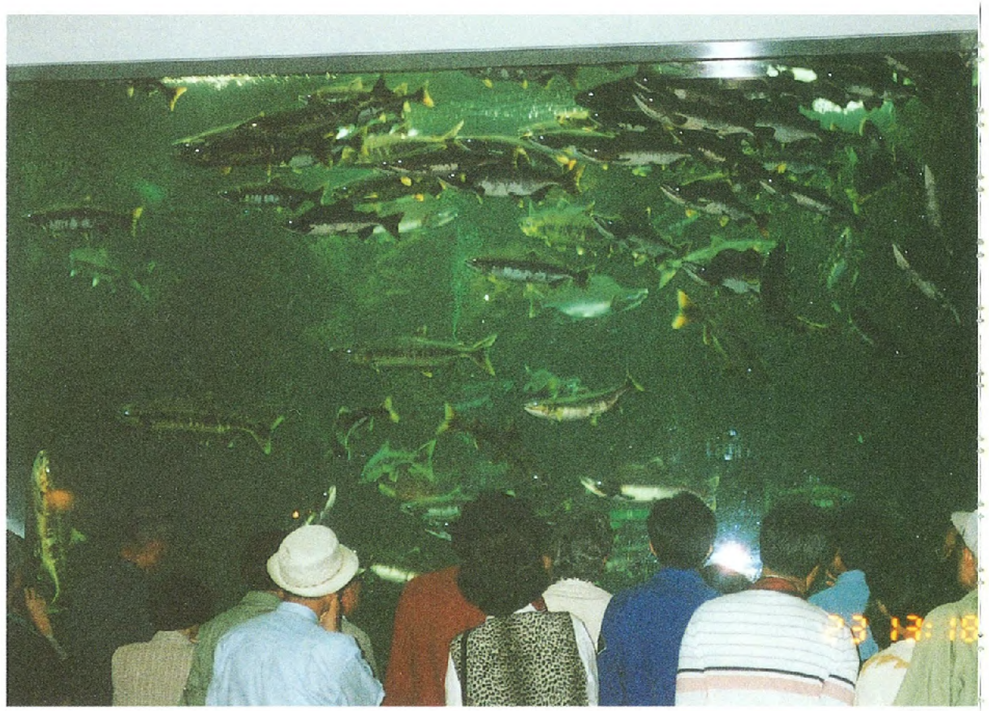
北海道サケ友の会（石狩川水系）札幌クラークライオンズクラブ（豊平川）千歳川とサケの会（千歳川）小樽運河にサケを呼ぶ会（小樽運河）朝里川ふる里の川づくりの会（朝里川）帯広サケの会（十勝川）釧路シャケの会（釧路川）ぴうかサケの会（天塩川）恵庭市民サケの会（漁川）大雪と石狩の自然を守る会（石狩川）旭川河川環境づくり市民運動の会（石狩川）幾春別川をよくする市民の会（幾春別川）利根別川をきれいにする市民の会（利根別川）札幌アイヌ文化協会（石狩川・豊平川）

※ぴうかサケの会のぴうかはアイヌの呼び方で（石の多い所）が語源。地名は美深。



「友の会会長」に植村　敏氏

北海道教育長、食の祭典委員会理事長などを経て、現在は、植崎産業㈱の専務。明るい雰囲気、早い決断で道庁時代は評判の人。友の会では20年目以降の変革を進めるリーダー。自然の環境をどうとらえ、どう守るのか。友の会のテーマはそのサポートする立場を明確にすることだという。音楽大好き。札幌交響楽団副理事長。



千歳のサケのふるさと館の大水槽

サーモンロードをゆく

冒頭にあるように、北海道サケ友の会会長に植村敏さん(副会長)が理事会の推せんを受け、会長に就任した。

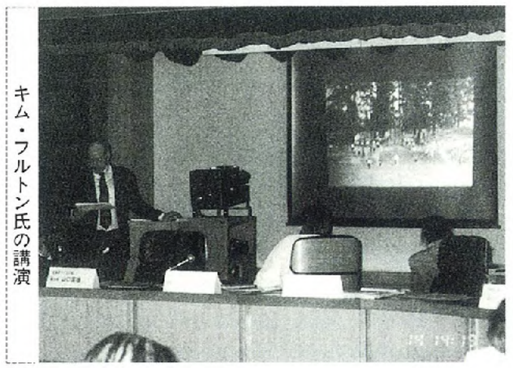
友の会も20年という大きな節目が3年後にやってくる。その活動も、子供たちの学習、教育という手だてで未来に遺産を残すという息が長くて、地味なものになっている。

そんな中で植村会長の提案で、友の会の初の企画で一般会員を対象にしたツアーが組まれた。その名は「サケの生態・施設見学会」(後の“サーモンロードふれあいの旅”)で、サケについて学ぼうという企画。秋まっただ中の支笏湖畔経由で、千歳の水産庁北海道さけますふ化場千歳支場。そして千歳サケのふるさと館を見学するコース。解説はふるさと館の木村義一館長で、みごとな語り口で、参加者はいつの間にかサケの世界に踏みこんだようだ。ふ化場の施設を見学し、ビデオによるふ化放流事業を勉強。またペニザケやサクラマスの成魚の遊泳を観察した。仲々足を運べないふ化場だけに、参加者は貴重な体験となった。昼食の後、全国的に有名になったインディアン水車公園で、また新たな発見をして感嘆しきりだった。大水槽の魚群マルチビジョンによるサケの一生。そしてサケの遡上の観察ができる地下施設。おまけに音楽で踊るサケのダンスなど、参加者一同、この時ばかりは時を忘れたようだった。こうした施設があることそのものを、知ったことも大きな収穫だった。

5回目を迎えた北海道サケ会議は、折から来道中のカナダB・C州サケ学習交流団参加者の同国第21学校区教育長のロナルド・D・サンボスキー氏とキム・フルトン氏が加わり、久しぶりに国際色のある会議となった。テーマは「サケを育む川づくり」で、北海道開発局石狩川開発建設部・村端克巳部長が、魚ののぼりやすい川づくり、北海道土木部・児玉知浩河川課長が「生きている川づくり」など、ハード的な側面から川をとらえた基調講演。また、ソフト的な立場から、標津サーモン科学館の大山米勝館長が「サーモン科学館の啓蒙活動」と題した講演をした。第2部の午後には、現場からの活動報告が中心になった。「都市と河川の変遷」と題した・小樽ふる里の川づくりの会の五味秀勇会長が報告。旭川市から「旭川河川環境づくり市民運動の今昔」を同運動の田口勲議長、道南から「遊楽部ファンクラブの活動」を同クラブ山田治事務局長が、地方における活動と問題点などを報告したが、それぞれが、それぞれの川への想いをこめた内容で、北海道の会議にふさわしい活動の実態が披露されたと好評だった。

同じ報告の中の「豊平川の鮎の会の活動について」豊平川鮎の会山野井英俊会長の報告は、アユの友釣りにかかわるもので、釣り場豊平区への提言としても、関心を持たせる話だった。サケと同じく海から川へのぼる清流を好むアユだけに、話題となった。後に豊平川の幌平橋下で、アユをねらう長ザオが、夏の光景として見られるようになったことは、サケとはまた別な意味で、川の生命の素晴らしさを感じさせてくれた。そして豊平川が市民とふれあう機会がまた増えた。

カナダから参加されたお二人は、「学校のサケ学習活動状況」というくくりの中で、北海道～アームストロング交流委員会のキム・フルトン委員が「B・C州小中学校のサケ学習と河川の浄化」について現場からの報告を行い、北海道から、札幌市立発寒小学校の村田博司教諭、それに岩見沢緑陵高校の高木伸雄教諭がそれぞれ活動ぶりを報告した。



キム・フルトン氏の講演



気境家から友の会に基金の寄贈



海外からも参加した第5回北海道サケ会議

午後のフリートーキングは、わずかな時間しかなかったにもかかわらず、熱心な対話の中に、提言などをおりまぜて、会議を盛りあげる形になった。特にサケを通じて、河川の学習、教育の実践でノウハウを積みあげている、カナダのゲストには、多くの質問や疑問が投げかけられた。これは極めて有意義な時間であり、札幌市教育委員会の大関洋学校教育部長をして「子供たちの教育に果たすサケ学習の位置づけがより鮮明になった」と言わしめる会議だった。同会議を主催した友の会は、北海道サケ会議を重ねてきた努力が、少しずつ稔りはじめ、それがどんな実を結ぶのか。そしてもっと積極的にこんな結実を手にしたい、という想いを、もっと大きくふくらませることになった。



B・C州からの「サケ学習交流」を地方で初めて伊達市が受入れた。札幌もなみ公園では記念植樹を行った

1996
平成8年

市町村に根づく国際交流

サケ学習ひろがる



岩見沢市中井宏教育長（右）「サケ学習交流」の受入れを快諾した（左）は植村会長



岩見沢市についで旭川市も「サケ学習交流」を受入れることになった菅原旭川市長（中央）佐賀友の会副会長（右）と佐々木札幌市議（左）

サケ学習国際交流の受入れの主体を地方に移すという提案（気境会長・故人）は、第3回目（1995年・平成7年）で実現した。伊達市（教育委員会）が受入れたもので、その波紋はやはり大きく広がり、この年第4回目（1997年、平成9年）は、岩見沢市（教育委員会）に。また1999年（平成11年）は旭川市（教育委員会）が受入れることに決めた。岩見沢市については、植村会長が能勢岩見沢市長に要請し、同市が快諾。また旭川市については、友の会の佐賀副会長と佐々木肇友の会会員（札幌市議会議員）が、菅原旭川市長に直接お願いしたところ、これまた心よく引き受けてくれた。両市はサケ学習国際交流の進め方に、深い理解を示し、受入れが実現した。こうしてサケ学習を通じた、国際交流は地方に根づくことになり、当然のことながら地方からの海外派遣も行われ、交流の裾野は、さらに大きく広がっていくことになった。

サケ友の会が、全道のサケ川について、日常的に川の環境づくりを考えてきている。それらは、関係機関へのお願いになったり「北の川」紙上に紹介したり、あるいは、「北海道サケ会議」での論議の中心になることもあった。また、研究者の話を聞くという勉強会になることもある。そうした友の会の活動や運動が、ひとつの実りを獲得した。

友の会が以前から「サケが自然産卵できる場所」の確保を訴え続けていた深川市花園頭首工の改修が決定した。同頭首工は40年余り前、農業用取水堰として作られたものだったが、落差が大きく魚道設置による魚の誘導も難しく、大きな課題になっていた。石狩川上流へのサケ遡上のためには、大きな障害になっているわけで、関係者の間では話題になっていたものである。

石狩川が建設省によって「魚ののぼりやすい川づくりの推進モデル事業」に決まったことや、上流に魚道つきの「北空知頭首工」が設けられていたことから、なんとかして、サケにやさしい川に変えてほしいという熱い希望が、改修に結びつけることになったものである。友の



第6回の北海道サケ会議のテーマは「サケののぼりやすい川づくり」で熱の入った討議を行った

会の普段の地道な活動が実ったのだが、石狩川の流れにそって旭川市内まで、サケがさかのぼっていくことになるかもしれない—そんな夢も育むものだけに、友の会としては大きく胸をはれる結実となった。

友の会の理事は、勉強が必要じゃないかと、第1回目の理事研修会が開催された。北欧で盛んに言われている「森が魚生む」の現実を、ドキュメンタリーにした、北海道テレビ放送の番組「森が歌う日魚が帰る」（ニシンはなぜ消えた）を視聴し、制作プロデューサーの堂前暁氏に話を聞いた。北海道の西海岸では、山の緑にかかわる影響が出ており、魚や海草が育たないという現象がみられる折、この森と魚の関係の勉強は、理事にとって大いなる知的体験となったようだった。特に豊平川は川岸に緑が少ないだけに、グッドタイミングな勉強会と言えるかもしれない。そして今年、第6回目の北海道サケ会議のテーマが「サケと川・そして森」だった。理事研修会の拡大版のようなテーマである。会議の中心議題は、サケを取り巻く環境を考えるで、北海道開発局石狩川開発建設部・高橋繁樹部長が「サケののぼりやすい川づくり」道立水産孵化場資源管理部・河村博主任研究員が「北海道の山地渓流に棲む魚たちの分布と移動、特にサクラ



理事たちも研修をはじめたHTBで「森が歌う日魚が帰る」VTRを視聴

マスとアメマスの関係」。また、大雪森林センター所長・上川町森を育む会一谷源一実行委員長が「上川町森を育む会の活動から」など三つの基調講演。続いて「豊平川ウォッチャーズの活動」（竹中万紀子さん）などの三つの活動報告。さらに千歳サケのふるさと館木村義一館長の「サケ漫歩」と題した講演もあり、内容のある会議になった。全道からおよそ60人が参加したが、1日いっぱい、正に勉強の日だった。

サケ友の会の主催による施設見学ツアーが、今年も企画された。今回は余市を中心の体験見学だったが、余市と言えばニシンと言われるほどだから、見学の内容はニシンにまつわるもので、参加者18人はこの日1日でニシン通になった。余市には、道立中央水産試験場があるが、ここをじっくり見学。最後は余市川のサケ遡上の視察。産卵床づくりと思われるサケの生活活動も観察することができ、有意義なツアーだった。むろん、リンゴとぶどうの町余市の魅力も、十分に体験した。このツアー、年々評判になってきており、この先参加者が増そうな気配になってきた。



サケ友の会の施設見学会は余市へ。ニシンを勉強した

1997

平成9年



豊平川での稚魚放流

'79（第1回）100万尾
'80（第2回）140万尾
'81（第3回）140万2千尾
'82（第4回）30万5千尾
'83（第5回）30万7千尾
'84（第6回）30万尾
'85（第7回）36万4千尾
'86（第8回）42万7千尾
'87（第9回）32万2千尾
'88（第10回）20万4千尾
'89（第11回）20万1千尾
'90（第12回）20万8千尾
'91（第13回）18万9千尾
'92（第14回）18万8千尾
'93（第15回）19万8千尾
'94（第16回）19万5千尾
'95（第17回）19万4千尾
'96（第18回）22万6千尾
'97（第19回）17万尾
'98（第20回）24万1千尾



サケ学習「国際子供サミット」

20年に向け新たな展開

春3月、「サケ学習国際交流カナダ派遣団」26名が出発していった。この事業は、この年10回目を迎えていた。約束どおり岩見沢市からも10名が参加している。「北の川」のライター兼編集主幹の高橋重義氏は、その模様を「出発前の準備といおうか、事前研修とでもいおうか、出発からホストファミリーとの文通とか、旅の研修とかがゆき届いており、一行は極めてリラックスした状態で旅立っていった。10回を教えるノウハウが活かされたようにも思えた」との印象記事を書いている。

仲秋10月、こんどはカナダB・C州アームストロング市の小・中学生25名が北海道にやってきた。受入れは岩見沢市で、街をあげて、この事業に全力を投入していたが、併せて第7回北海道サケ会議も同市で開催、会議は、カナダの子供たちも参加した。同市が誇るマルチメディア・システムを駆使して、カナダと双方向映像通信で、交流しあうという、これまでにない劇的なプログラムを展開した。宇宙ネットワーク時代の日常性を痛感させ、キーボード時代から少々ずれている大人たちを驚愕させるものであった。

サケ会議は「サケと川・環境を考える」がテーマ。北海道開発局石狩川開発建設部・原俊哉課長の「魚に優しい河川環境」標津サーモン科学館大山米勝館長「標津サーモン科学館の一年」北海道教育委員会・小林宏明指導主事が「サケ学習と環境教育」を基調講演。ついでカナダB・C州第83学校区キム・フルトン氏による「カナダのサケ学習と環境教育」の特別講演などがあり、活動報告では、常呂川、幾春別川をそれぞれ守っている会の現況、岩見沢市から「サケ学習」について発表があった。

会場は自治体ネットワークセンターホール。初使用のテレビ会議システムの全活用で、前述したように、カナダに同時中継された。会議はカナダの子供たちの他、地元の岩見沢市、札幌市、三笠市、北村などから70人も参加した。日本時間午前10時。カナダでは夜のゴーデンタイム（午後7時過ぎ）に、北海道からの映像が写し出された。はるか離れた岩見沢市から送られてきた映像の中に、元気なわが子を発見したカナダのご両親も居た。圧巻は日本とカナダの子供たちの代表による意見交換。いわばサミットで、議長は以前派遣団の1人としてカナダに行っている、新川勝久氏（幾春別川をよくする市民の会）。サミットの内容は同時通訳という気くばりで、お陰で地球がいかに狭くなったかを実感し、地球人は正に皆家族の印象を強くした。サミットの共同宣言は「サケ学習を通じて、もっと交流していきます」だった。

時代は変化している。その一つが岩見沢サミットだったが、友の会は来年創立20年を迎えるに当たり、変革の道を探り出そうとしている。さっぽろサケ会から二つの脱皮を行ない、20年の大節目にきている。この年は5月の友の会通常総会で諮り「プロジェクトチーム」が編成された。大きく二つに分け①20周年記念事業推進プロジェクト（会の歴史、足跡の確認、記念事業）②組織活性化プロジェクト（組織の充実、強化、今後の方向づけ）であったが、5月会議だったので、前述した10月の第7回北海道サケ会議や、カナダからの派遣団受入れなどもプロジェクトの中に入れて議論された。しかし、なんと言っても20年目の記念イベントの構築、予算の規模、道民をどのように巻きこんでいくのかが、最大のテーマで



友の会創立20周年に向けプロジェクトチームのスタートなど討議を行った通常総会



石狩沖のサケ網漁



潮風で冷えた身を番屋の湯で温めた参加者たち

石狩でサケ網漁を実体験

「サーモンロード・ふれあいの旅」

ある。これら20年のメモリアル・イベントの在りようによって、21世紀に向けた、友の会の進み方も自ら見えてくる。それだけに、植村会長を筆頭に各理事の英智を集め総力を結集し、プロジェクト・チームは、スピードをあげて具体的な形づくりに入っていった。

さて、毎年評判になっている見学ツアー「サーモンロード・ふれあいの旅」は、今年なんと海にくり出し、サケ定置網の実況をつぶさに視察するという、友の会らしい本格的ツアーになった。ツアーのひとつの決まりである日帰り一ということで近淵の石狩川沖をターゲットに45人が参加した。9月27日雨にもかかわらず、企画のよさのせいか、家族づれが多く、また千葉からやってきた人も参加。町から市になったばかりの石狩新港から、4隻で出船。わずか数分の沖あいでの劇的な網起しに参加者は、声をのみ、そしてどんと水揚げされたサケの山に拍手をおくっていた。定置網のたぐりは、結構力が入る。一行は3カ統の網おこしを見せてもらい、大いに満足したようだった。雨にたたかれ、潮のしぶきで冷えた身体は、評判の石狩温泉・番屋の湯につかって温めるという番外飛び入りイベントもあり「よかった」「よかった」であった。

1998
平成10年

さっぽろサケの会
Come Back Salmon
北海道サケ友の会

水と緑のコンサート

サケをシンボルとして「きれいな地球を21世紀に残そう」。北海道サケ友の会は不変のテーマをかかげ、その実現に向けて様々な事業を継続、今年創立20年を迎えた。1978年(昭和53年)誕生した、豊平川にサケを戻そうの市民運動からの大きな節目である。この間、豊平川に放流した稚魚は、770万尾にのぼる。そして1981年の第１回回帰以来、サケは毎年回帰し、初志のカムバックサーモンの願いは成就した。しかし、これは市民運動の一つの通過点である。豊平川に代表される自然環境の保全をどうするのか、運動最大の目標であった、テムズ川浄化の証しは、サケの住める川であるのと同じように、豊平川がサケの住める川になり、人も川のほとりに安心して住める街さっぽろを実現し、未来へつなげていく。これが20年一貫したテーマである。

20年史も発刊



治水や利水は、われわれ人間には必要な施策である。しかし一方では、あるがままの自然も、なくてはならない。次の世代を荷う子供たちに、自然の様々な姿を知ってもらうための教育。川とサケという共通の世界を持っている、アメリカやカナダの子供たちとの交流。子供たちの数は、日本側の205人、カナダなど外国側は、相互交流以降だけでも80人に達している。これら一連の事業を、

20周年のプロジェクト動く







(上)音楽祭が開かれた札幌コンサートホール(Kitara)
(右)札幌市立手稲東中学校



札幌市立美しが丘小学校
北星学園女子高等学校
北海道大学合唱団



札幌市立東白石小学校
札幌旭丘高等学校
コーラスにれの会

地道に継続していくことで、新しい地球人が生まれてくる。そんな希望と、期待を持ちつづけてきている。

今年の秋、北海道新聞の投書欄に、小学校６年生が投書した「豊平川の草刈るな」が掲載された。豊平川河畔に住んで以来、毎年決まったように、草を刈る。するとキリギリスやコウロギの鳴き声が、途絶えてしまう。北海道には、自然がいっぱいと、全国に言っているが、どこに自然はあるのですか。むやみに草を刈らないでください。という訴えであった。こうした気持ちを大切にする人を育てたい。今、友の会が真剣に取り組んでいる課題である。

さて、20年という歴史は、やはり膨大で重さがある。カムバックサーモンを知らない成人がたくさんいる。なんでサケなんだよ！と疑問を持つ高校生もいる。友の会は20年の歩みを総括し、その歴史を形に残し、活動の趣旨をここで明確にし、改めて、その歩みを知ってもらわなければならない。そのうえで、次の世代に向けて、新たな活動の幕開けをしたい。全道、全国そしてアメリカ、カナダ、イギリスとの連携もある。このベースを大切にしながら先に進んでいきたい。

20周年記念事業の意義を、次のように決めた。
①カムバックサーモン運動の足跡と現状を収録し、後世に伝える②会の活動を活性化し、21世紀につなぐ未来志向の場に活用する③これらの実現のため、会員及び一般対象に「出版物」の発行と「集い」を実施する。

事業は、20周年記念誌「碧」の発行。サケの「まめ本」発行。友の会が主催する音楽祭「水と緑のコンサート」(生命(いのち)はぐくむもの)の開催。また記念植樹を実施する。などである。コンサートは、次の世紀の主役になるはず

多彩な行事で道民を高揚

の小・中・高・大学そして一般から７団体が参加し、11月14日札幌コンサートホール(Kitara)で行われた。手づくり、自然のぬくもりを感じさせる素晴らしい音楽祭との評価を得た。また記念誌は、ビジュアルな構成。まめ本はサケに迫るユニークな語り口で、それぞれ話題になった。特に記念誌掲載のポスト・カムバック20年の座談会は、会の進路を示唆する内容で注目される。

また20年の歴史の中で、その種子ともなった、初代サケの会代表吉崎昌一氏と、マスコミを代表し、常に会の活動に、おしみなく力量を投入した、菅原安信氏を、コンサートの席上、友の会が記念品を贈り、その功績を讃えた。

今年の理事会研修会は、昨年12月にNHK第１放送から放送された「秋味サーモントキシラズ」。出演者の１人、木村義一理事の解説で、テープで放送を再現した。番組にはサケ友の会の小本毅事務局長も出演した。内容は、司会者の質問に答えるもので、サケに関しては専門家の木村氏が、また会の活動の分野では小本氏が、それぞれ答えるという進行だった。テープを聞きながら、出演者が目の前で放送の内容を補足したり、新しい話を展開するなど、ユニークな研修会となった。

サケ学習国際交流が縁となり、札幌と岩見沢の高校生が、カナダ留学している。くわしくは「北の川」に紹介されているが、こうした交流の新しい展開も、友の会が考えてきた活動の一つであり、それらが花をつけ、結実してほしい、と願い続けているものである。

サケの詩がたくさん生まれました

鮭

―雪の祭のうべないに―

原子　修

冬が
空からもぎとった青の火を
雪の地平にどもしてまわる祭りの
日……

凍てる川の
ざれ石のかげで
ちいさな命の球玉が
赤の火りんりんもやし

いつしか
鱗にシルバーの思慕はげしく焚く
シャケとなって

はるか北……ベーリング海への
けわしい歴程のはじまりを
じっとまつ

その
しゅん烈な鼓動の番が
きこえるか

（日本現代詩人会員）
昭和54年1月創作

SALMON BABY

ふるさと遠く離れても
忘れられないことがある
雪どけ水の冷たさと
母のやさしい子守唄
ひとりで生きて行くんだと
気づいた後の淋しさは
逆まく海の激しさに
忘れてしまえる時が来る

※
サーモンベイビー　旅立ちの時
サーモンベイビー　勇気を出して
サーモンベイビー　振りかえらずに
サーモンベイビー　海をめざせよ
限りある青春に悔いを残すな
大人になったら戻って来ておくれ

季節はめぐる豊平に
水面に映る白樺よ
春には燃ゆる若草も
秋に枯葉の音をきく

サーモンベイビー　時は流れて
サーモンベイビー　旅の終りに
サーモンベイビー　銀のウロコで
サーモンベイビー　戻っておいで

母なる川の流れは変わらぬ
大人になったら戻って来ておくれ
※くりかえし

昭和54年3月稚魚放流日に発表

水の匂い　嗅ぎ分け
故郷の河を　さかのぼる雌雄の
鮭たち

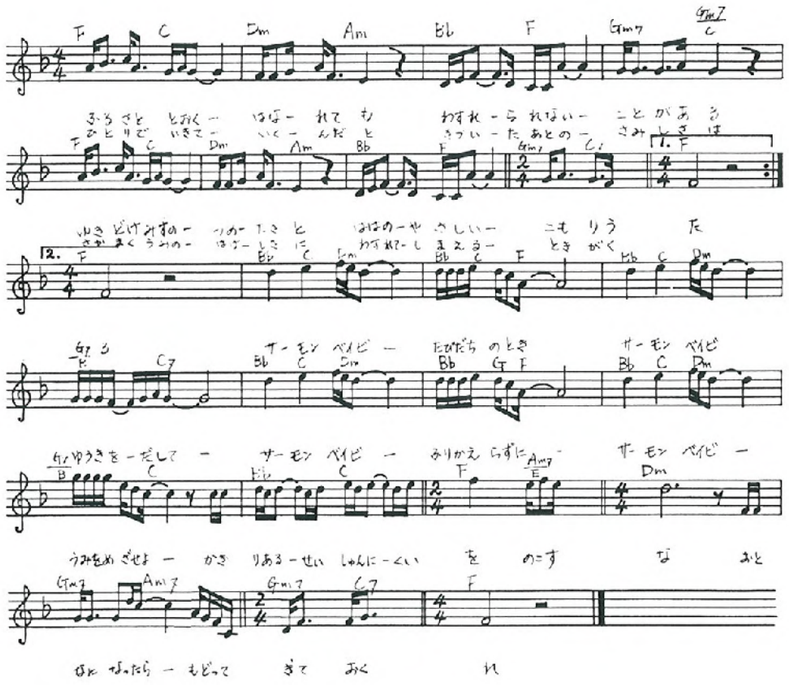
代赭色の朝　鮭肉色のタベ
季節は
空を累代の血の色に染めながら
祈目正しく過ぎてゆく
鮭の回帰性は
　特性ではなく
　水の属性だという
だから鮭の紅い肉は水の分身
いまは
たどる水脈の途すじに
ひたむきに行為しつくした
生きる哲理を曝すように
身を　白くとけこませ
水に還っていく

物質の岸辺に巣喰う盲鳥
非望の河岸に群れる古代の鳥よ
清水に沈む　彼の鮭たちの
真摯な生命の玉を
ついばむな

昭和54年1月創作

カムバックサーモン キャンペーン ソング SALMON BABY

企画・菅原 安信　作詞・作曲 佐藤三樹夫　編曲・木田高介　唄・小出 正則



雌雄の鮭旅

瀬尾明彦

―あれは幻視だったろうか

冬近い早朝の
冷たい水面下の遡上する
番の鮭

ぴったり寄りそい
堰をこえ
浅瀬を　のぼりつめていく
すでに鱗は黒ずみ
尾ビレは失われて

アリューシャンの水に揉まれ
北太平洋の
酷寒の海で育まれた
帰巣の自然智
ひたすら
生まれた場所の

シャケよ、

原子　修

シャケよ、
ふるさと〝サッポロ〟の川は
光でいっぱいだから
もどってこいよ
銀いろの笛でもふいてくらそうや

（日本現代詩人会員）
昭和57年8月創作

アシリチェプ・ノミ　ありがとう

原子　修

いまはトヨヒラ川で
むかしはサツポロペツのこの川に
ずっとむかしからいて、いまもいる
神さまたちに

ずっとむかしからいていまもいる
アイヌの人々が
アシリチェプあたらしい鮭のくる秋

ヌサをつくってイナウを捧げ
魚の肉や皮をどっさりお土産に背負った
いつくしみ深いアシリチェプの神が
たのしくこの川をのぼれるようにと

川口の神　渚の神　川下の神
川上の神　水の神らに
身をきよめ　心から祈ってくれるので

いまサッポロにいるわたしたちも
ずっとむかしからいていまもいる
銀色のうつくしい鮭を

ずっとむかしから流れていていまも流れつづける
この川に
よろこんでお迎えできるのです

アシリチェプノミ　ありがとう
アイヌの人々　ありがとう

（日本現代詩人会員）
昭和58年9月創作

さけを励ます歌

札幌市立東白石小学校児童

小さな小さなサケの子よ
ほうらこれから君たちの　はるかな旅に出るんだよ
広い広い海に出て
つらい悲しいいやなこと　いろんなことに出会うけど
元気に負けずに乗りこえて
戻っておいで待っている
きみのふるさとの　この川へ

大きくなったねサケの子よ
ほうらもうすぐきみたちのふるさとの近くに帰れるよ
きれいな川が待っている
楽しい海のお話を皆に聞かせてくださいね
元気に負けずに乗りこえて
戻っておいで待っている
きみのふるさとの　この川へ

昭和55年春創作

NHK「みんなの歌」

約束

宮沢章二　作詞
中田喜直　作曲

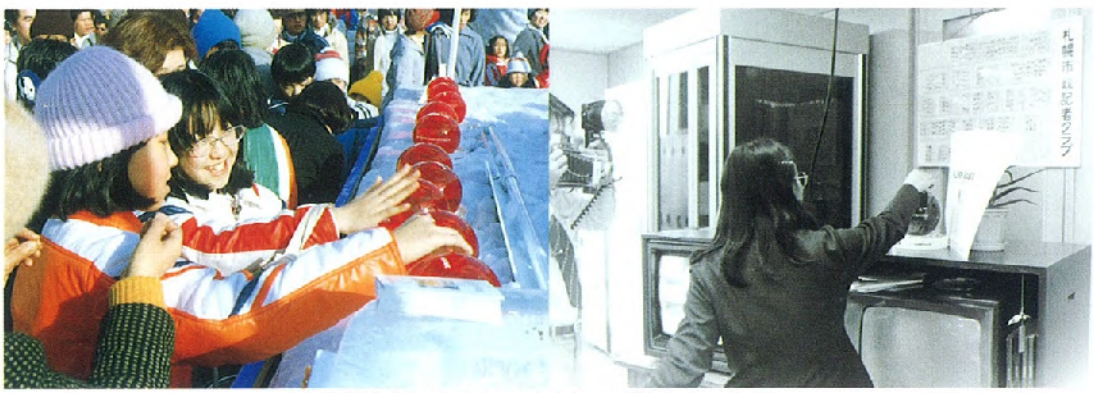
海で育った　サケたちは
冷たい流れを　さかのぼる
約束守って　北国の
生まれた川へ　帰ってきたんだね
川の小石も　水ごけも
やさしく輝く　ふるさと
サケよ荒波にもまれて幾年か
おまえが守った　約束は
いのちがけのものなんだ

豊平川カムバックサーモンは多くの人のお世話になりました

（企業・個人とも　あいうえお順）

サケ稚魚放流基金は、道民１人10円の愛の募金から企業による何千万円まで、様々な形で数多くの人たちからの寄付金とご支援によってつくられたものです。ある時は雪まつりの会場で、またある時はスーパーや個人商店に置かれたイクラ募金箱に、そして幼稚園や小学校の児童たちによる募金も含まれています。こうしてご協力いただいた皆様をここにご紹介したいのですが、紙幅がつきるために、代表の形で以下の個人・団体・企業・学校を掲載させていただきました。

朝日新聞社
石狩川振興財団
石原裕次郎
石原プロモーション
河川環境管理財団
気境公男
希望ケ丘育英文化財団
ケンアートセンター
国際ソロプチミスト札幌中央
小林幸雄
小比賀秋嶺
札幌アカシヤライオンズクラブ
札幌クラークライオンズクラブ
札幌国際プラザ
札幌市
札幌市中島地区振興会
札幌自動車学園
札幌生花商業協同組合
札幌東白石小学校全校児童
札幌円山ライオンズクラブ
札幌輪の会
札幌中央水産
佐藤水産
JTB
全国朝日放送
そうご電器
高橋水産
宝酒造
東急ストア市内各店
トリコロール
長尾正蔵
ナラサキサービス
楢崎産業
日本旅行
藤井ビル
藤田嘉代
部落解放同盟
北洋銀行
北海道開発協会
北海道科学文化財団
北海道河川防災研究センター
北海道環境財団
北海道機関紙印刷所
北海道教育庁
北海道教職員厚生会
北海道自然体験学習財団
北海道新聞社
北海道生活文化課
北海道青少年科学財団
北海道テレビ放送（HTB）
北海道電力
北海道土木協会
北方圏交流基金
北方圏センター
堀松建設工業
本間水産
松山額縁店
丸高水産
三ツ輪航空サービス
友和会
豊建設工業
吉崎昌一
吉野賢二



イクラ募金箱にも多くの人たちのご協力をいただいた

偉大なる井戸を掘っ

科学とロマンの結合

吉崎　昌一



吉崎　昌一氏

経歴　明治大学（考古学）卒業。米国ウィスコンシン大学客員研究員などを経て、北大文学部教授。札幌国際大学教授。
さっぽろサケの会発起人。同会代表。サケ友の会会長を歴任。北海道サケ友の会顧問。
市民運動カムバックサーモンのリーダーとして、国際的に活動した。考古学者として、特に日本の稲作づくり研究者として世界的に知られる。　67歳

数多くの友人達とともに走ったカムバックサーモン運動には、いくつかの特徴があったと思う。まず、これを旗揚げした当時、社会的に自然保護を考える風潮が盛り上がっていた。「生きた河川を復活させたい、どぶ川や放水路はもう沢山だ」と考え始めた多数の市民におされてこの運動が始まった。その逆ではない。いつのまにか、自然や社会を考えるいろいろな分野の人々が集まり、市民の代表としてのカムバックサーモン運動が生まれたのである。

法律に反することを知りながら、他の河川からサケ稚魚を採集して豊平川に運び、こっそり放流していた帯連「サケ・ジャック」の釣り人達、市内を流れる河川を自然公園化し教育の一助に出来ないか検討していた市民グループなどなど、多くの人たちの知恵が結集されて、科学とロマンの結合という運動目標が達成されたのである。

一方、事務局ではプラン作りの名手、吉岡道夫さんが人脈結集と作戦を練り、HTBのスタッフでロマンの塊のような菅原安信さん（私は尊敬を込めて菅原不安信さんとよぶ）がサインをだす。行政には多少きつく？、かつソフトな市民運動はこうして進められた。



渡辺美智雄農水大臣（中央・故人）に陳情する吉崎氏（右）

ていただきありがとう

サケからの贈り物

菅原　安信

菅原　安信氏

経歴　明治大学法学部卒業。
北海道放送（ＨＢＣ）アナウンサー。
北海道テレビ（ＨＴＢ）に移籍。
アナウンス課長、編成部長、制作部長、報道制作局次長等歴任。
さっぽろサケの会発起人。数々のアイディアで市民運動をもりあげた。ニュースキャスター初登場の日、豊平川にサケが戻る。
現在バンクーバーに移住、国際文化交流協会理事　66歳



カナダの地で、過ぎたこの運動を振り返り、ひそかに考えていることがある。私にとって、あれは《奇跡》としか考えられない。

1981年10月５日、カムバックサーモン・キャンペーンを始めて３年目の秋だった。ニュースキャスターとしてデビューの日、私は緊張のうちにその日を迎えていた。メインに据える材料を慎重に検討、自分が手掛けて来た環境問題にしぼった。そこで、サケが戻るであろう豊平川の堰堤でのレポートを設定、カメラと現場に向かった。南九条の堰堤に一人の男の人が川を見ていた。そして無言で堰堤下をユビ指している。私は息を呑んだ。四、五十尾のサケの群舞である。それがあの言葉が声にならない実況となった。

「サケが戻りました。ごらんください。目の前で撥ねています。元気に帰ってきました。ご苦労さん！皆さん、夢ではありません！夢ではありません。これは現実です！」

サケは私のデビューを飾ってくれたのだ。本当にありがとう。



雪まつりステージのカムバックサーモン
イベントに参加する菅原氏（右）

石原裕次郎さん・渡哲也さん　らがひと役

西部警察「北都の叫び！　カムバックサーモン」

全国放送で高視聴率
28.6%



平岸高台公園に石原・大門軍団が勢ぞろい。多くのファンが公園を埋めつくした。ステージの「豊平川にサケを呼び戻そう」がひときわ目立った。

豊平川で100年ぶりにアイヌのサケ迎え儀式が復活した1982年秋、「清流・清湖」の願いが、人気ドラマのテーマになった。石原裕次郎、渡哲也、舘ひろしらが日曜夜のお茶の間に派手に飛びこむ「西部警察」がカムバックサーモンにひと役買おうとやってきた。28本の特別番組、豊平川マラソンやフォトコンテストの開催などサケ・キャンペーンに力をいれていたHTB（北海道テレビ放送）を応援しようと、小樽にゆかりの裕ちゃんが手を差しのべてくれたもので、裕ちゃんからポンと100万円をサケ基金にと寄贈した。

人気の石原・大門軍団来たる—というのでファンは大騒ぎ。豊平川河畔や札幌市内の各所でロケ撮影が行われるたびに黒山の人だかりとなった。西部警察「北都の叫びカムバックサーモン」はテレビ朝日系列で全国放送された。その視聴率は日曜夜8時の激戦区でなんと28.6%を獲得し圧勝した。カムバックサーモンはこれでまた評判となった。







①今は亡きボス・石原裕次郎と（右から3人目）を囲む大門軍団
②カムバックサーモンについてインタビューを受ける元気な姿の裕ちゃん
③札幌市内の大通公園で石原裕次郎と渡哲也（手前の二人（左）が裕ちゃん）右後方に峰竜太や舘ひろし



豊平川はサケを育む源川だった

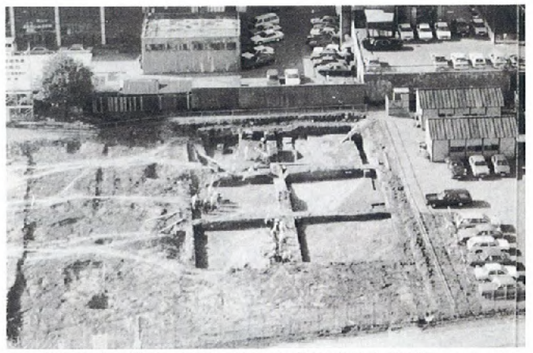
豊平川は、大都市を流れる河川の中では、急流の１つと言ってよいだろう。その急流が長い年月にわたって土砂を運び続けてつくりあげたのが扇状地で、その上に生まれたのが札幌である。札幌市街は、豊平川のほか、今でも速い流れを見ることができる、琴似発寒川がつくった発寒扇状地や、手稲星置川による星置扇状地など、いくつもの扇状地の上に開け、発展した。

豊平川をはじめ急流が運び続けた粗い砂礫層は、雨水が浸透しやすく、伏流水（地下水）は豊富であった。この伏流水が地表面に出たのが湧水であり、そこから数多くの小川が生まれた。湧水は地下水利用の増大に伴い、水位が急激に低下し、そのほとんどは枯渇していった。その中で、比較的最近まで湧水の名残をとどめていたのが、北海道庁、北海道大学付属植物園、北海道知事公館、伊藤義郎邸、北大構内などの池である。北大農学部前、クラーク博士像の後ろ側のクボ地は小川が流れ、ヒタヒタときれいな水が適当な深さで満ちていたことを覚えている人は多いと思う。昭和20年代、この池で蛙の卵を採集したことを思い出す人もいるに違いない。水が温むとこんどは小魚をすくった。

石狩街道がほとんど舗装されていない頃、北26条東６丁目あたりに北大の職員住宅ができた。道の側溝には水が流れ小さい魚が泳ぎ、夏の夜には、ホタルが美しい残像の絵を描いていた。この光景も昭和20年代のことだった。札幌は水に恵まれたいたのである。

吉崎昌一氏（さっぽろサケの会代表・前北大教授）によれば、昭和25年、サケが農学部につながる小川をのぼってきた。これがこの小川をのぼった最後のサケとなったという。明治時代、農学部の学生は、小川をのぼってくるサケを棒で頭を叩いて獲っていたという記録もあるのだそうだ。

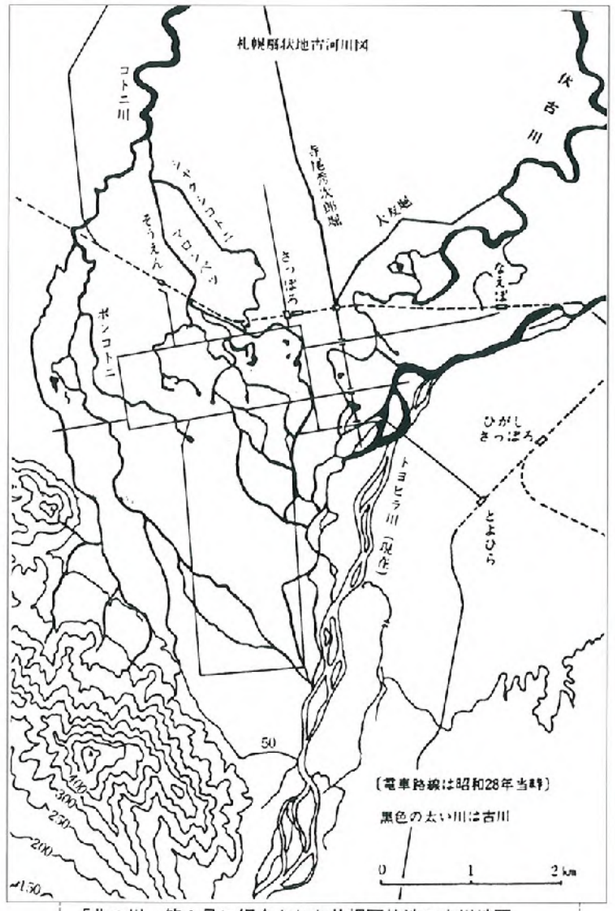
これら多くの小川に沿うように、遺跡が発掘されたのはよく知られており、川筋にはいくつもの集落が在ったことも分かっている。遺跡からは、川魚の骨が出土しているが、とりわけサケの骨が多く発掘されている。



札幌駅北側で遺跡の発掘が行われ住居や焚火跡が見つかっている（北の川８号から）

「北の川」８号によれば1985年（昭和60年）現在はすっかり整備された札幌駅北口一帯で遺跡の発掘が行われた。この発掘調査でサケの骨が出土している。これより３年前の1982年（昭和57年）には、北大構内でも遺跡を発掘。吉崎会長は研究者として参加した。この遺跡は９世紀のもので、地表では全く認められない川が流れていた跡や、流域には集落があり、遡河性の魚類をとっていたことがつきとめられたという。数多く出土した魚の骨片はサケの他、ウグイ、キュウリ、ニシンなどであったが、ほとんどはサケ科の魚のもので、川のそばに人が住み、サケなどを捕って生活していた様子を推定できた。こうした状況は１万年から３万年前から続いていたのではないかとみられているそうで、水の流れは旧琴似川ということもわかった。

札幌駅北口は、北大とは目とハナの距離である。やはり旧琴似川の流域ではないかと思われたという。時代的には３、５世紀のもので本州の時代と合わせてみると弥生時代の末期から古墳時代初期の時期に相当し、北大の遺跡（擦文期）よりは400～500年古いと言われた。遺跡は北大のと類似、やはり小川の流れに沿って人々が集まり、サケ科のサケを捕って生活していたようで、遺跡からは焚火跡とその周辺の土層から沢山の魚の骨が見つか



「北の川」第８号に紹介された札幌扇状地の古川地図

った。骨は極めて膨大で、焚火跡の上が真っ白になっていた個所もあったという。また小川については、開発によって水脈が寸断されてしまった後なので、はっきりはしないが、札幌扇状地の末端に、東西方向に位置する豊平川の伏流水を源とした「湧泉列」の一つがまた源になっている流れであろうとの結論を出している。この水脈は北大植物園、知事公館などにもこん跡を残している。サケは湧水地を産卵床とするから、これらの小川と湧水群は産卵地として絶好の場所だった。人々がサケを捕える場所は、産卵床に近い上流の川幅が狭くなっているあたりで、簡単にしかも大量にサケを捕らえていたと想像できる。サケは簡単に手に入る重要なタンパク源で、しかも捕えることができる季節が決まっていたことは、人々にとってはありがたい恵みであった。

サケを加工し交易を行っていたのでは……

豊平川は、その昔「あばれ川」の名のとおり、水流は早く、また水量も多かった。従って川を横断するようにしてウライを作り、サケをとるというような漁は、おそらく不可能であったはずである。危険をおかさずともやさしくサケを捕えることができる川幅が狭く、流れもゆっくりとした場所が随所にあった。

北大と札幌駅北口の遺跡は、ひとつ異なったものが発見されている。それは住居跡が札幌駅の方は、いわば掘立小屋ふうの簡単なものでしかも何回も建て代えられたと推測されている。また焚火跡が非常に多く、さらに人々が生活したと思われる土層が幾重に重なっているのは、何回もの大洪水に見舞われ、堆積されたからだろうと推定された。これらいくつかのデータからみて、駅付近は、安心して永く住むような場所ではなく、ある季節のみ、人々が集まり、そこでサケを大量にとっていたのではないか。つまり漁場ではなかったか—という見方が有力になったのだそうだ。焚火跡の多いのは、ひょっとして、そこでサケを加工したのではないか、それは交易の品物になっていたのではないかなど、当時の人々の生活ぶりが浮かびあがってくる。交易のあかしと思われる、小さなガラス玉や管玉、さらに糸を紡ぐ紡錘車とか、アメリカ型名やじりなども出土している。これらは弥生式土器の完成品だったそうで、東北地方と交流があり、それも相当盛んに行われていたという証拠になった。また、道東北部のオホーツク文化特有の角柱状石斧やオホーツク式土器の破片も発見されていることは、北方との交流もあったのだろう。こうして様々に推測してみると、サケを中心にした人々の生活が見えてくるような気がするが、札幌市の他の発掘と合わせて総合的に見ると、1,500年前ころからはじまる続縄文時代以降、人々の生活の中心は、札幌駅周辺の丘陵地帯から、現在の札幌の都心部へ移動し、サケ漁に依存した生活スタイルを定着させたのではないかという推測が成り立つ。後に、炭鉱鉄道会社の施設を作るために何本かの溝を掘ったら、三つの層（６～７寸、２尺、３尺５寸）から遺物が出たことを高畑宣一氏が詳しく記述し残しているが、これは札幌の中心地に遺跡があったことの証拠になっている。そこにもサケが居たのだろう。

吉崎氏の話によると、縄文時代以来、豊平川には毎年沢山のサケがのぼり、扇状地のあるあちこちの支流が産卵床になっていたところで、人々はそこでサケを捕え、食糧にし、あるいは交易品にしたのだろう。人々は20～30人が集団をつくり小高い土地で生活していた。付近には植物群があり、農耕をし、時期になるとサケを捕えていた。川を下って交易を行っていた。広い交流があったとのイメージを持っている。

ステーションは人々が集まる場所である。その昔のずっと昔、そのステーションの場所に人々が集まり、サケを捕っていた。それぱかりか人々は札幌特有の扇状地に沿い札幌のいたるところで、サケを捕っていたことだろう。サケと人と札幌—長い歴史のひと幕をカムバックサーモン運動が垣間見せてくれた。



札幌の湧水によって生まれた小川には写真のようにサケが遊泳していた



先住者アイヌはその小川でサケを自然からの贈物として漁を行った（アシリ　チェプ・ノミから）

「サケ学習国際交流」参加校一覧

参加校	第一回 1985	第二回 1986	第三回 1987	第四回 1988	第五回 1989	第六回 1990	第七回 1991	第八回 1993	第九回 1995	第十回 1997	計
(石狩) 千歳市立千歳第２小学校		1									1
恵庭市立恵庭小学校									1		1
江別市立大麻東中学校					1						1
石狩南高等学校		1									1
(渡島) 八雲町立大関小学校						1					1
函館市立亀尾中学校		1									1
(檜山) 熊石町立関内小学校		1									1
(後志) 蘭越町立湯里小学校			2	3	1						6
(空知) 長沼町立南長沼小学校				1							1
美唄市立東栄小学校										1	1
三笠市立幾春別小学校										1	1
岩見沢市立岩見沢小学校										1	1
中央小学校										3	3
東光中学校										1	1
明成中学校										2	2
光陵中学校										3	3
(上川) 教育大付属小学校								2			2
美深町立美深小学校									1		1
旭川市立永山南中学校										1	1
(留萌) 増毛町立舎熊小学校			1		1						2
(宗谷) 枝幸町立岬志別小学校			1		3						4
稚内市立富磯小学校									1		1
(網走) 網走市立網走小学校	1										1
(胆振) 伊達市立伊達小学校									5		5
東小学校									1		1
伊達西小学校									1		1
稀府小学校									1		1
有珠小学校									1		1
長和小学校									1		1
黄金小学校								1			1
(十勝) 幕別町立相川小学校							6	1			7
札内南小学校		1	7	5	5	9					27
札内北小学校								2			2
帯広市立愛の里小学校										1	1
(釧路) 標茶町立中虹別小学校		1								1	1
釧路市立駒場小学校											1
(根室) 標津町立薫別小学校					1	2					3
忠類小学校					2	1					3
根室市立温根元小学校				1	1	2	1				5
標津町立薫別中学校		1		1	1	1					4
標津中学校										1	1
根室市立啓舞中学校			1	1			1	1			4
(札幌) 札幌市立大倉山小学校						7					7
山の手南小学校							1				1
東白石小学校	3							2		1	6
幌南小学校		1					1				2
真駒内曙小学校		2		2	2	3	1	2	1	1	14
清田緑小学校			1	2	1						4
山鼻小学校								1			1
栄町小学校		1			1	1	1				4
創成小学校	1					1				1	3
福住小学校	1						1			1	3
中の島小学校					1	1	1	2	2		7
円山小学校	1										1
常盤小学校							1				1
藻岩南小学校			1		1		1				3
発寒東小学校								1			1
手稲宮丘小学校						7	2				9
栄東小学校							1				1
真駒内小学校	1							1			2
琴似小学校				2							2
八軒北小学校			3				1				4
石山小学校								1			1
札苗北小学校									1		1
平岡小学校					1						1
西小学校						1					1
北の沢小学校						1					1
藤野小学校									1		1
盤渓小学校									1		1
札幌市立福井野中学校								1			1
東手稲中学校	1										1
琴似中学校		1									1
宮の森中学校						1					1
羊丘中学校					1						1
真栄中学校									1		1
教育大付属中学校	1										1
小計	10	12	17	18	24	39	20	18	20	20	198
教員 伊達市立伊達小学校									1		1
黄金小学校								1			1
幕別町立相川小学校							1				1
札幌市立東白石小学校					1						1
中の島小学校					1		1	1	1		4
山の手南小学校							1				1
八軒北小学校							1				1
常盤小学校						1					1
福住小学校										1	1
真駒内曙小学校										1	1
小計					2	1	4	2	2	2	13
合計	10	12	17	18	26	40	24	20	22	22	211

忘れられない ひとコマです



鮨屋さんから募金を受ける大塚元事務局長

サケに負けるな豊平川マラソン



「日本サケ会議」で全国の「サケの会」が札幌に集合

横路知事にサケ学習の募金二千万円を贈った宝酒造の木田稔社長（右）

カナダと「サケ学習交流」はじまる

豊平川でサケを捕獲し「さけ科学館」へ



鼓笛隊が放流壮行会の話題に



サケ学習国際交流で仲よくなった児童たち「別れは」やはり悲しい

豊平川のサケモニュメントは名の知らぬ芸術家の作品



ホームステイで楽しい思い出ができたサケ学習国際交流



豊平河畔に設けられた「サケを守ろう」の看板



日本の文化を学んだ「サケ学習国際交流」の子供たち（カナダ）

参議院予算委員会でサケ問答

サケ・マス魚類は、国が管理している経済魚である。200カイリ問題にも密着しており、カムバックサーモンの市民運動の推進展開には、数多くのハードルがあった。サケ行政上の関連団体が集まり「連絡協議会」というクッションをつくって、市民運動に応えたが、やはり限界があり、さっぽろサケの会は、折りにふれて、水産庁や開発庁に運動支援の陳情を行った。こうした事情の中で、標題のように、国会での討議が行われ、後には松野北海道開発庁長官が札幌市立東白石小学校のミニふ化場を訪問。またサーモンスクールの子供たちが、サカナ大臣と言われた鈴木善幸総理大臣に会い、サケののぼる"魚道"建設の確約を得たのである。それは、この予算委員会から3年後のことであった。国を動かした市民運動は、これが初めてではないだろうか。

第87回国会 参議院予算委員会第4分科会（警察庁、北海道開発庁、環境庁、文部省、厚生省、労働省及び自治省所管）会議録第3号

〔関係分のみ抜粋〕

昭和五十四年三月三十日（金曜日）

午後一時三十一分開会

分科会担当委員の異動

三月三十日

辞任	補欠選任
矢原　秀男君	相沢　武彦君
下田　京子君	沓脱タケ子君

出席者は右のとおり。

主　査	嶋崎　　均君
副主査	太田　淳夫君
分科会担当委員	
	上田　　稔君
	田代由紀夫君
	鍋島　直紹君
	秦野　　章君
	田中寿美子君
	相沢　武彦君
	沓脱タケ子君
	柄谷　道一君

国務大臣	
自　治　大　臣	
国　務　大　臣	
（国家公安委員会委員長）	
（北海道開発庁長官）	渋谷　直蔵君
政府委員	
警察庁長官官房庁	山田　英雄君
警察庁長官官房会計課長	城内　康光君
警察庁刑事局長	小林　　朴君
警察庁刑事局保安部長	塩飽　得郎君
北海道開発庁総務監理官	吉岡　孝行君
北海道開発庁予算課長	岩瀬多喜造君
自治大臣官房長	石見　隆三君
自治大臣官房会計課長	大嶋　　孝君
自治省行政局長	柳沢　長治君
自治省行政局選挙部長	大橋茂二郎君
自治省財政局長	森岡　　敞君
説明員	
科学技術庁研究調整局海洋開発課長	島田　　仁君
水産庁振興部長	矢崎　市郎君

○相沢武彦君　昨年の10月28日に札幌市を窓口にしまして、札幌の母なる川、豊平川にサケの稚魚を放流して、再びこのサケを回帰する川にしようという目的で「さっぽろサケの会」というのが発足いたしております。水質汚染の影響でこの豊平川からサケが幻の魚になって久しいわけですけれども、ここ数年前からサケが遡上しているという目撃者も出てきておりまして、水産専門家の調査でも、豊平川はよみがえってきた、そしてサケの遡上は可能だと、こういうふうに保証をされております。そういうことで、札幌在住の学者、文化人の方たちが中心になって会を発足させまして、ことし３月８日の日に第１回目のサケの稚魚放流が行われたわけでございます。128万の札幌市民の注目を集めたんですが、私も豊平川をサケの自然増殖地にすることによって市民の自然保護の精神の高揚をもたらす効果があると思うし、市民運動として大都市でのサケ遡上の意味はまことに大きいものがあって、イギリスのテムズ川の例を引くまでもなく、一つのロマンの実現でもあり、自然と人間の共存をシンボライズするというところにも大きな意義と効用を持つと思うわけでございます。「サケの会」の趣旨に賛同共



第１回稚魚放流壮行会を成功させた「さっぽろサケの会」のリーダーたち

鳴している立場から、私もぜひこの事業を成功させるために尽力したいと願っておるわけでございます。

さて、過日、「さっぽろサケの会」が豊平川に稚魚放流百万尾の募金キャンペーンを行った際、協力メンバーに水産庁と北海道開発庁が名を連ねております。これがそのポスターでございますが、「SALMON BABY　私はサケです―大きくなる力を与えてください!!」一粒のサケの卵が載っている、余白の美を生かした鮮やかなポスターでした。この下のところに、「協力水産庁・北海道開発庁」とございますが、この放流に当たって協力というのはどういう意味合いを持っているのか。また、どんな点で今後協力されようと思っているのか。それぞれ御答弁いただきたいと思います。

○国務大臣（渋谷直蔵君）　この間、その何の会というんですかね。

○相沢武彦君　「さっぽろサケの会」。

○国務大臣（渋谷直蔵君）　「サケの会」ですか。その会長の方が私のところにお見えになりまして、その説明を承わりました。そしてそこに書いてあるシンボルも私一ついただきまして、私は話を承って、まことに結構なことだと。いまロマンの実現という言葉がございましたが、まさにそんな感じするんですよね。ですから、これはひとつ、せっかくそういった会も発足したことでございますから、関係者がひとつ力を合わせて、その仕事が成功するように私どもとしても私どもの立場でできることは御協力をしていきたい、こういうふうに考えます。

それで恐らく、開発庁がその協力の中にメンバーとして名を連ねたという意味は、川の管理者が開発局でございますから、そういう立場で川の管理者の理解と協力なしにこれはやれるわけありませんから、そういうことで名を連ねたんだろうと思いますけれども、基本的には私はもう賛成でございますから、できるだけ協力をしていきたい、このように考えます。

○説明員（矢崎市郎君）　北海道におきますサケ・マスのふ化放流事業につきましては、従来から水産庁の組織であります北海道さけ・ますふ化場が第一次的に当たっておりまして、豊平川におきましてもその遡上を図っていく、よみがえらせていくということになりますと、もちろんそのためのふ化放流、当分はふ化放流用の卵を河川からあるいは他のふ化場から移殖し、さらにいろいろとここに技術も集めてその推進を図っていくということになりますので、そういう面から、専門の立場からふ化場が果たす役割りというのは非常に重要だという意識のもとに参画いたしておりまして、そのため全面的な御協力をする、こういうつもりでおります。

○相沢武彦君　過去において豊平川でサケの捕獲事業が

雁木付近で行われたんですが、それは一体何年ごろまでやったのか、伺いたいと思います。

○説明員（矢崎市郎君）　豊平川におきましてサケの新魚の捕獲は昭和28年ごろまで、いまお話の雁木橋付近で実施しておったようでございます。29年くらいからは新魚の捕獲はなくなっているのが現状でございます。

○相沢武彦君　遡上しなくなった主な原因は、昭和22年で豊平川のサケの稚魚の放流事業を中止したという記録が発見されているんですが、そのせいじゃないかと言われておりますが、なぜ放流事業を中止をされたのか。また雁木にあった捕獲施設は現在どうなっているんでしょうか。

○説明員（矢崎市郎君）　お話のとおり、当時、この豊平川はサケの遡上河川ということで放流事業がずっと行われておったわけですが、都市開発の影響で水質が著しく悪化したというふうなことで、昭和23年の放流を最後に事業を中止しているわけでございます。そういうこともございまして、昭和29年ころからは遡上がなくなったというふうに私どもも見ております。

それから、その次の御質問の捕獲施設でございますが、28年までは捕獲をしておったわけでございますが、当時の捕獲の方法としましては網ウライを使って、網を使って捕獲をいたしておったようでございます。そこで、事業中止に伴いましてこれは撤去いたしておりまして、現在はもうその施設は残っておりません。

○相沢武彦君　そうしますと、現在この豊平川はサケ増殖のための事業河川に承認されているんですか。それとも、されていないんでしょうか。

○説明員（矢崎市郎君）　その後、29年以降はいま申し上げたような状況のもとで遡上がございませんでしたので、私どもの方では、これにつきましては事業河川ということではなく、事業河川の扱いはいたしておりませんが、ただ、最近これは非常にまた水質が逐次良化してきたということで、その可能性も大いにあるということで、私どもはいわば調査河川、そのための試験実施といいますか、一つの前段階の調査河川扱いとして、先ほど話のあったようなふ化放流事業も実施しようということで現在いたしておるわけでございます。

○相沢武彦君　サケの遡上の可能性は、過去の実績から見ても十分期待できると思うわけでして、今回放流した稚魚は千歳のふ化場から供給してもらったわけですが、今後毎年継続的にサケの稚魚を放流し回帰させるためには、稚魚にするための専門ふ化場を豊平川に設置するこ



①


②


③

①キャンペーンソング「サーモンベイビー」も生まれた
②豊平川浄化はまず清掃からとゴミを回収するボーイスカウト
③松野開発庁長官にサケについて訴えた札幌市立東白石小学校の児童たち

との方が理想だと思うんですが、水産庁としてはこの設置のお考えがあるのかどうかをお伺いしたいと思います。

○説明員（矢崎市郎君）　最近豊平川は増殖河川としての役割り、可能性というものが非常に強くなってまいっておりまして私ども石狩川水系の中で千歳川だけをふ化放流していくということになりますと、どうしても過密放流というおそれも出てまいりますし、できるだけ分散放流をしていこうという趣旨からも、この豊平川を今後育てていく一つの河川ということで考えておくのが望ましいというふうに思っておるわけでございます。

そこで現在は試験実施、この期間は恐らく今後４、５年は当分そういう形で実施していくことが必要だと思いますが、この期間中は、幸い千歳ふ化場が一時間ほどのところでございますので、そこから移殖をしてやっておりますが、将来これが事業河川として定着し、恒常的にそういうことが可能になるという段階を迎えましたときには、そのための専門的なふ化場を整備していくということも十分に私どもは検討する必要があるというふうに考えております。

○相沢武彦君　将来恒常的にこの放流事業、ふ化事業が可能ならば十分検討に値する、というわけですね。

そこで、提案なんですが、豊平川をサケ増殖のための事業河川として捕獲、採卵、ふ化場施設をつくると同時に、「サケの会」の趣旨をも生かして、サケの遡上を市民の目に触れさせ、楽しませるというこの二つの目的を同時に満足させる法の運用というものができるのかどうか、この点法制上どういうふうになっているのか、御説明いただきたいと思います。

○説明員（矢崎市郎君）　水産庁としては、私どもはやはりあくまでもサケ・マスの資源をふやして、それの安定供給を図っていくという趣旨でやっておりますが、それがいわば一つの情操教育的な役割りも果たしてくるということは、これはなお非常に望ましいことだというふうに考えておるわけです。そういうことで第一次的に教育的目的でということではございませんけれども、私どもが考えておるようなサケ・マス振興というものが、またそういった役割りも果たすことは大いに期待をいたしておるところでございます。

○相沢武彦君　たとえば従来あった雁木橋付近に再び捕獲場をつくって、親魚の雌だけ捕獲して採卵、ふ化させる、雄の親魚だけは上流に遡上させて市民の目を楽しませるというふうにすれば、水産庁の資源増殖の目的と「サケの会」の趣旨、これを同時に満足させる妙案になると思うんですが、作業的に、専門的に、技術的に、そういうことが可能なのかどうか、その辺はどうなんでしょう。

○説明員（矢崎市郎君）　技術的には可能だというふうに思っております。

○相沢武彦君　ああそうですか。

さらに、現在の豊平川の河川の実態から考えますと、サケの遡上の際障害になる点がちょっと私ども素人にも幾つか考えられるわけなんですが、それは、一つは川の性状ですし、それからまた川底の深みのことらしいんですけど、みお筋というんですか、この点なんです。現在豊平川には雁木橋付近から幌平橋付近に至る流域には七つの堰堤が設置されておりますけれども、この七つとも魚道はつくられていないわけです。サケの遡上には工作物の高さの２倍の深さを持った川底―河床ですね、河床を工作物のすぐ下流につくってやらないと、その工作物を越えることはできないんだと、こう言われております。そこで、この七つの堰堤に魚道と深みをつくってやる必要があると思われます。それからまた９月以降の、秋のサケ遡上時期の水量が問題なんですが、豊平川のこの堰堤は七ヶ所とも河床の工事か行われていて、コンクリートで平らになっている。水量の調整は上流のダムの放流等である程度はできるようなんですが、水量自体少ないことは否めないわけです。そこで、河床の平たん化による水深の浅い状態からサケが十分に遡上できるだけの河川にしてやる必要があるんじゃないかと思います。それを解決するためにこの河川の流れに沿ってみお筋と呼ばれる深みをつくってやる必要があると思うんですが、これらの改善を勘案した工作物改修事業、これができるのかどうか。これは開発庁の仕事になると思いますが、これはいかがでしょう。

○政府委員（吉岡孝行君）　豊平川にサケを放流しまして、それを遡上させることにつきましては、現在の河川の状況でも不可能ではないように聞いておりますが、新たに魚道など、施設をすることが必要というようになれば、先ほど水産庁の方からもお話がありましたが、それぞれの事業目的に従って、それぞれの事業主体において

いろいろ計画されることと思うわけですが、われわれの方としましては、ですから、河川管理の立場から支障のない範囲で、先ほど長官がおっしゃいましたように、そういう事業者と十分連携をとって協力してまいりたい、こういうふうに考えております。

○相沢武彦君　水産庁としては、この堰堤部分でサケが上流へ行く方法としてどんな方法を検討してましょうか。

○説明員（矢崎市郎君）　豊平川におきましては幌平橋、そこからの下流から石狩川の合流点までの間で、お話にも出ましたように、六ヶ所の堰堤がございます。特にそのうち、最も下流にあります雁来堰堤というのが落差が1.6メーターぐらいあるようでございしまて、遡上はこれでも可能かと思いますが、よく調査はしてみないと何とも申せませんけれども、やや困難な問題があるとすれば、やはりこの辺のところが一つの魚道と申しますか、またいまお話しのように、堰堤に付帯するコンクリート張りのところにおきますみお筋と申しますか、そういうふうな整備がありませんと、十分にそれを越えて遡上していくということにはややどうも困難性があるのではないかというふうに私ども見ておるわけです。ただ、再生産確保するという見地から申しますと、従来もそうであったわけですが、雁来堰堤のところで捕獲をしていくということで十分用が実は足りるわけでございまして、特にそれから上流に遡上を図っていくという必要性は必ずしもない。そういうことから言いますと、当面は雁来堰堤のところで捕獲をしていくことが必要だというふうに思います。ただ、別の視点と申しますか、特に教育上の目的等でさらにこれを上流まで伸ばしていくということになりますと、この辺のところはよく私どもも調査してみませんと、果たして現状でいいのかどうか。いま言ったような問題点もございますので、そういう点はよく調べてみないと何も申せないというふうに思います。

○相沢武彦君　堰堤を越える方法として魚道をつくる考えのようなんですが、開発庁としては技術的にどのようなお考えを持っているんですか。

○政府委員（吉岡孝行君）　魚道をつくる必要があるかどうかというのを、われわれ聞いている話では現状でも不可能ではないというように聞いておりますが、さらにそれらの魚道をつくる必要があるとした場合、それから先ほどお話がありましたように、床どめの下に深みをつくってジャンプしやすくするとか、いろいろ方法があるようでございますが、その辺につきましては、いろいろ河川の実情により、そういう堰堤なり床どめ形態というのもいろいろ違うようです。それから水量によってもいろいろ違いがあるようでございます。その点いろいろケース・バイ・ケースで問題を検討してまいりたい、こう考えているところでございます。

○相沢武彦君　この点は、豊平川の場合は洪水等の防災の役割りを大いに持っているわけなんでして、関係官庁でしっかりと煮詰められて、将来市民に迷惑の起きない方法で、しかもサケ遡上に効果のあるような方法をひとつ考え出して実施していただきたいと思います。

最後に、この問題で長官にお尋ねしますが、先ほど最初におっしゃられたように、「サケの会」のメンバーともお会いになったそうで、大変皆さん方も長官にご理解いただいたと言って喜んでおられるようです。そこで、豊平川にサケの稚魚を放流すれば順調にいけば4年くらいですか、戻ってくるんですが、このサケの遡上に今後障害が出るおそれのある場合、関係省庁に有効な施設をつくる、あるいはつくりかえることについて、開発庁長官としてその労力をとっていただきたいと思うんですけれども、お考えいかがでしょう。

○国務大臣（渋谷直蔵君）　先ほどお答えしましたように、私も基本的に賛成ですから、ですから、それを今後具体化していく際に私どもの立場でできることがあれば喜んで協力をいたします。



国も積極的に動きはじめ床止めの実態と魚道設置について研究を開始した



豊平川でサケ回遊を調査する

サケの回帰と河川の浄化

全国で運動ひろがる

北半球でのサケの存在を確認し、彼らと共生するため自然を守っていきたいからと、全国各地で「サケの会」が生まれ、豊かな活動がみられた。札幌から全国へそして世界へと、「カムバックサーモン」の波紋が広がっていった。

東京にサケを呼ぶ会

首都東京にサケを戻す発端は、ロンドンテムズ川のサケ回帰だった。北里大学水産学部の調査研究の支援などを仰いだ結果、緯度、水温、東京湾内外の海流など総合的な判断の結果、多摩川をサケがのぼれる川に決定。1981年（昭和56年）多摩川の支流の野川でサケをふ化・飼育をはじめている。第1回のサケ卵は福岡県の泉川漁業組合から32万粒を購入した。ふ化・飼育の作業は、東京水産大学の学生や「東京にサケを呼ぶ会」の会員約4,000人の代表者たちが交代で行い、翌1982年の2月28日に多摩川の中流域の二子多摩川に放流。稚魚には“東京っ子サケ”と名づけられた。またサーモンスクールも開校した。

野川のある世田谷区の明星小学校、砧中学で観察が行われ、その稚魚も放流された。これが第1回の放流だったが、引き続き2、3回と放流を行い、1984年（昭和59年）の9月17～18日にサケの成魚3尾が、東京湾で捕獲された。同じサケの群れと思われる回遊が漁民によって確認され、うち1尾が会に送られてきた。また、千葉県富津海岸や東京湾の人工渚でサケ捕獲の知らせもあった。さらに河口から15キロ上流の狛江市の多摩川べりで、釣りにきていた中学生4人が抱卵サケを発見、捕えている。東京っ子サケの回帰が公認第1号だったという。

その後、田園調布の丸子橋の下流、多摩水道橋付近、

さっぽろ「サケ」の憲章

治水によって豊平川は、市民の生存を約し、
利水によって豊平川は、市民の利益を守った。
しかし私達は、生存と利益の代償として、
いま「母なる川」から、自然を失おうとしている。
私達は、豊平川にサケを呼び戻すことによって
再び美しい四季の清流を蘇らせ、
人間と自然との、新たな邂逅を実現する。

一、豊平川にのぼるサケは　市民の心に「自然」を贈ります
一、豊平川にのぼるサケは　資源の可能性を　教えます
一、豊平川にのぼるサケは　美しい環境を　つくります
一、豊平川にのぼるサケは　新しい市民意識を　育てます
一、豊平川にのぼるサケは　明るい未来を　招きます

江戸川河口などでの発見や捕えた事実があり、東京にサケを呼ぶ会の願いと夢が現実のものになった。

同サケの会のねらいは、首都圏の人口集中、産業の増大・集中によって心配される河川の汚濁を、なんとか食い止めなければならない、その浄化活動の一環としてサケの遡上に結びつけている。多摩川は1970年以降、少しずつ浄化されているといわれていたが、シンボルのサケ回帰は浄化運動に拍車をかけることになり、小・中学生の学習にも大きな効果をもたらせた。都会サバクにサケ回帰のインパクトは、札幌以上だったという。

会は平成6年に解散。その後同7年、世田谷区教育委員会教育センターに事務局を置く「多摩川サケの会」がその流れを引き継いだ。

多摩川サケの会

「東京にサケを呼ぶ会」の事業を引き継ぐ形で平成7年に会を結成し、東京都世田谷区教育委員会教育センター内に事務局を置いた。代表は倉橋良雄氏。ところで、「東京にサケを呼ぶ会」の第1回放流は、1981年（昭和56年）。川は二子玉川で8,000尾を放流。その後ピーク時には30万尾に達した。東京－多摩川の放流は、来年で通算19回目。「東京にサケを呼ぶ会」同様に川の浄化運動を展開、そのシンボルがサケである。放流活動を通して子供たちに自然回帰や自然の生態を学習してもらい、大都会を流れる川をできるだけ汚さないという心を育てていくのを目的の一つにしている。ただ、近年は戻って来るサケの数が減っているそうだ。

多摩川にサケを放流する会

人口14万900人（当時）の日野市にある会。多摩川河口42キロ上流の地点にある同市は、20年間に人口が2倍になり、国内有数の電機、自動車、時計、産業ロボット等の工場がふえ、伴って自然の破壊、河川の汚濁が始まり、開発中心の街づくりの問題がクローズアップされていた。1970年代の前半に、市の行政施策は身の回りを見なおすことに移り、ひとつの目標として、緑と清流を取り戻すことをスローガンにした。1979年、市が農業用用水路にコイの稚魚を放流した。これは市民の自然に対する関心を高め、また子供たちに自然に親しむ機会を多くつくるという二重のプラス効果を生じた。その延長上に「サケを放流する会」が誕生した。サケ稚魚のふ化・飼育は、埼玉の荒川にサケを放す会と連帯し、約1年の準備期間を儲け、1981年の豊平川にサケ戻るのニュースに勇気づけられながら市民の家庭や商店の一角でふ化飼育を行い放流にこぎつけた。東京都の水産試験場との意見交換、研究などの活動も展開した。また、多摩川にサケを放流する会、渡良瀬川、荒川、入間川、利根川など関東のサケ放流5団体が連帯し、川のふ化のシンポジウムなどを開き河川と人間生活の関係、生命の導きなどを学んでいる。



利根川にサケを呼び戻す会

サケの南限は利根川とする説がある。利根川は群馬、埼玉、栃木、茨城、千葉の5県を流れ、30年くらい前までは流域の前橋市内でもサケが数多く獲れた。また自然回帰もみられた。しかし砂利採掘、ダム建設、東京都飲



料水取水のための灌漑用水路建設などによる汚れのため、サケの自然回帰は激減し、全滅かとみられている。

札幌や荒川の活動に刺激され、サケを呼び戻してみようということになり、河川ふ化、サケが戻れるような環境づくり、それにサケの神秘的な生命力を知ることで、市民が夢とロマンを持てたらという期待を実現すべく、活動が開始されたという。1981年（昭和56年）年末に会が発足した。利根川は都の飲料水や電力を提供していることから、行政レベルの解決が必要で、関係団体の協力を得ている。会は前橋市の青年会議所、前橋市青少年団体協議会、群馬県漁業協同組合連合会が推進母体となり、会員は一般父兄子供たちを含め1,200人前後で、第1回放流は1982年に前橋市県庁裏の利根川に20万尾を放流している。その後の放流では3,000人が参加するなど市民の関心は高まったほか、魚道改修など利根川だけが持っている課題に取り組んでいる。むろんサケは戻った。

利根川にサケを放す会

その昔、高浜虚子が埼玉県の妻沼という町で、歌会を開きサケ料理を楽しんだという記録がある。東京都の飲料水を提供し、三郷市には都の浄水場があった。

埼玉県は「緑と清流の埼玉をつくろう」を行政のスローガンにかかげている。しかし人口の急増、産業の進出による排水汚染、水田の宅地化による用水路の寸断などで自然環境が変化し、住民生活が脅かされることになった。流域には、前述の三郷市のほか越谷市、行田市、羽生市などがある。「荒川にサケを放す会」の勝山義弘氏らと1970年代末に、緑と清流を取り戻す運動をはじめ、1982年春「サケを放す会」が誕生した。発会の主旨は、「文明の発展が自然の法則を壊わし、特に人間の手によって大事な水が汚されていく現実をサケの放流で告発していく」であり、さらに「自分たちの手でサケをふ化・飼育し、ゆくゆくは利根川をサケの銀鱗で色どりたい」とする大きなロマンを持たせている。また子供たちが、命の尊さを学ぶという教育的見地からも、会の活動を大切にしてきた。

第1回放流は1982年（昭和57年）2月。それまでに稚魚は、家庭や学校、病院などで飼育されたが、病院ではサケの一生のパンフレットを配布し評判になった。県も行政施策に、利根川の利根大堰に魚道設置を盛りこむなど積極的な姿勢でアプローチ、市民の関心の高まりや運動の広がりに応えてきている。

入間川にサケを放す会

東京都と埼玉の人口合わせて1,500万人の飲み水の源が入間川と荒川。二つの川にシアン化ソーダが流れこみ、大量の魚が死んだのが発見された。つり人の情報によるもので、機械がしばしば故障し、警報を出すはずだったが、役に立たず、飲み水の安全保証にならなかった。魚の大量死によって魚の遊泳が、飲み水の安全の保証になっていることを知ったという。河川に清流をとり戻し、魚が群れ遊ぶ時に、人々の命が守られるという結論を実体験したことで、飲み水である河川での魚の遊泳を大切にすることになった。

1981年（昭和56年）自ら考案した環境ろ過水槽で、サケの受精卵をふ化し稚魚の飼育に成功し、荒川に２万尾の稚魚を放流した勝山義弘氏（荒川にサケを放流する会会長）に出会い、入間川のカムバックサーモンが始まっている。

放流は1982年春。渡良瀬川で２回、入間川でも行われた。その後は荒川、多摩川、渡良瀬川、入間川、利根川の５連合体で活動の輪を広げている。

荒川にサケを放す会

埼玉県のサケ運動のリーダーシップをとっている会。サケ卵のふ化、飼育の技術的な器具の開発が、関東の運動に大きな役割を果した。勝山義弘氏が自宅で循環ろ過式ふ化水槽を開発し、イワナ属の魚類、ニジマス属、サケ属の魚類を次々にふ化、飼育した。こうした実績をバックに1970年代後半からサケの飼育研究をはじめている。勝山氏は建築士で木材の水槽などを製作するのに都合がよかったと話しているが、外国や本道から資料を取り寄せて研究を続け、誰でも１万～２万粒のふ化可能な装置を開発した。このふ化・飼育槽装置を利用し、関東一円でサケを放す活動が続けられてきている。その延長でコップの中に発眼卵を入れ、子供たちにふ化させる方法なども実際に行われた。

荒川は2,000メートル級の秩父山系から流れ出る水を集めた川。数多くのダム、砂利の洗浄、工場廃水、生活排水などによる汚染を食い止めるために「サケを放す会」は国や自治体に働きかける一方で、電力会社に常時流水を訴えるなどきめ細やかな活動を展開。清流を取り戻して水質保全をはかることを大きな目標にしている。またサケのふ化・飼育を子供たちの手で行わせることを大切にしており会員は学生が主力。「サケマス飼育研究会」「循環式ろ過・ふ化飼育槽開発普及」などの活動は活発。第１回放流は1980年（昭和55年）。1984年の放流は海外18カ国へ報道された。現在も多摩川、利根川、入間川、荒川、渡良瀬川の５河川連合会をまとめてきている。また、東京、千葉、埼玉の小学校の先生(主に２年、５年担当)をネットワーク化し支部を結成している。

最近の放流は各市町村ごとに卵を取りにきてもらい飼育を任せているという。学校の場合１クラス50尾。個人だと５尾というように細分化した計画も持っている。毎年「お別れ会」を開き絵日記を発表、それに参加する子には放流証書を渡している。参加者は約2,500名になるという。そのほか知事宛てに「川をきれいにして下さい」の要望書をハガキで20年間も継続している。来年は21回目の放流を迎える。息の長い運動を続けている代表的な会になっている。

由良川サケの会

1981年（昭和56年）に会を結成。東京、滋賀、福井の境にある三国岳に源を発し、京都府北部を抜けて舞鶴湾に注ぐのが由良川。府水産課はふ化場をつくりサケの増殖に力を入れている。さっぽろサケの会の代表らが第１回放流（56年）に参加した。放流を続け、サケの回帰の数も年々増加している。

由良川流域や舞鶴湾沿岸でも関心が高まり、福知山市や綾部市でも放流が行われている。

ところで由良川の実際の放流は、サケの会結成２年前の1979年(昭和54年)。地元の漁業組合が北海道からサケの卵をもらい地元でふ化し約90万尾を放流した。言わば国策による放流だがその実態はよく判っていないという。

由良川は、地元の人には大変悪いイメージがある。最近は浄化が進み、洪水、氾濫も完全に押えられているが、昔からのイメージは簡単にぬぐい切れるものでもなく、サケをシンボルにしてイメージの良化向上を願っている。



由良川の放流式に参加した菅原友の会総務

特に子供たちにサケと川と水のことを勉強してもらうことを、運動の中心に置いており、由良川流域の98小学校に由良川のパンフレットやカムイチェプ物語を贈っているほか、由良川列車、由良川サケの会列車ゼミナールなどの活動を行ってきている。また稚魚の放流とは言わず"放生"と表現している。放して生かすの意味で、宗教言葉の引用なのだそうだ。但し現在は活動を停止している。

矢田川にサケを呼び戻す会

兵庫県豊岡市を流れる円山川は稚魚の放流が行われているが、近くの城崎郡香住町で、街づくりにカムバックサーモン運動をと若者たちが中心になって1983年（昭和58年）春、「矢田川にサケを呼び戻す会」が生まれた。矢田川は、1970年代後半からサケが戻ってきており、川の浄化や川の保全が進んでいる。その実体をさらに　拡大、増幅していく願いを持っている。すでに回帰の実績があるだけに、放流の成果が表われていると言えるだろう。

これらの川の他、明治の初めまでサケが河口の特産品だったという利根川支流の渡良瀬川でも「サケを放す会」が1982年稚魚を放流した。ここは上流の足尾銅山の鉱毒でサケが全滅したという経緯があるが同川の支流の思川にはサケがのぼっており、放流の成果が出ている。サケ神社で有名な九州福岡の遠賀川でも、川にサケを戻す運動が起ったし、岐阜県の最北端、鉱山の街神岡町でも、暖流の底魚カジカが、川から姿を消したことから、川の浄化をはじめており、そのきっかけが札幌のカムバックサーモン運動だった。また、全国各地で展開されている「川にサケを戻す」会の運動だったという。

こうして一つひとつ、市民運動が広く広く輪を広げ、それぞれの川に新たな生命のいぶきを吹きこんでいる。

世界にも波紋

水と魚を通じ、広く世界と手を結び、地球の平和で豊かな環境と資源を未来に伝えよう―1982年（昭和57年）札幌で開かれた「日本サケ会議」で採択された宣言の一節だが、アメリカ、イギリスでも、札幌のカムバックサーモン運動と同じ時期に、川の浄化、サケ資源の増殖などの活動が一段と活発になった。従って、札幌への関心も強めており、サケを通じ新たな交流もはじまっている。

アメリカ・ワシントン州

アメリカのワシントン州にあるスノホミッシでは、10年間で人口が27%増加した。さらに2000年までに65%増加すると見通している。その結果、河川の汚染が長旅のサケを苦しめるからと、1982年１月に自治体の手で５ヵ年の事業計画を立て、汚染対策を講ずる決定をした。議会では「河川は家族の一員であると考える」ようにと住民に訴えた。市民は、それぞれの地区で、川へ流入する排水問題を解決したり、河床の改善、河岸の草木の植え込み、泥が沈殿した産卵床の清掃などを行ってきた。高校生が川の水質調査を行い、ふ化槽を製作。また別の地区では、小学校が近くに流れる川の支流にふ化槽を設置し、サケ放流までの学習を行っている。科学と野外教育を提唱している指導者は「子供たちに魚がどこへ行き、どんな困難に出会うのかということを学んでもらう」と説明している。川の役割は数多くあるが、河畔の木ややぶは影をつくり、魚の住みよい水温を保つことになるし、木々が倒れて川底に沈み、そこに生える草がしのぎやすい安息所となったり、餌になったりすると教えている。

都市化と雨水の関係についても、本来土中にしみこんでいくはずなのに、路面が固められた結果、雨水は速度の早い流れとなって走り、川に流れ込んで底をえぐり、掘り下げていき、魚の生息地は大きなダメージを受けることになる。こうした状況をガードするために、いくつかのガイドライン（DO・DO NOT・WHY）を示し協力を求めているし、都市河川を考えるために、次のようにアンケートを行った。①サケ河川に及ぼす脅威とは②河川を守るために我々はなにができるか③実際的管理と



キングサーモンのキャンペーンも行っている

して何ができるか④管理面同様、経済面で何ができるか⑤私的、公的（行政）で変革すべき点は—といったアンケートで、ワシントン州は札幌の運動から学ぶことが多々あるとして、情報や資料の交換、交流を求めたことがあり、さっぽろの活動組織もそれに応えてきている。

カナダのSAVE THE SALMON

バンクーバーは一時期、サケの資源細りに見舞われたことがある。地元の新聞社「バンクーバーサン」は長年にわたってサケ資源を守る活動を続け、好意的な援助金も贈られている。

サケ・マス保護の重要性が力説されたのは1880年代の初期で、当時100万尾単位の稚魚が飼育されていたという。しかし1920年代の後半にふ化場に対する批判的意見が出され、経済的な不安と誤解が増えた結果ふ化場を廃止した。しかし1950年以降には、サケ・マス資源にとっては、環境保全と適切な漁獲方法が最も重要であると、再度改善が行われた。正にサケを救うであった。

サケ・マス類資源増大計画（SEP）は、政府が本腰を入れて、積極的にサケ・マス資源の開発に取り組まなければ、B・C州のサケ・マス資源を維持増大することはできないとする事実を元に、施策が進められた。この計画の最終目標は、カナダ太平洋岸の大部分の沿岸と内陸の川の流域を含み、海洋牧場と国際的漁業管理も含むものであった。さっぽろのカムバックサーモンの活動がカナダでも大きな話題になったのは当然であった。

カナダの活動は国をあげてということで、大衆参加が積極的に組織化されている。例えば6万人の高校生が組織の一員として、ふ化、飼育の観察を手伝っている。また、刑務所をふ化事業に参加させ、およそ2,000人の服役者がサケの捕獲・ふ化を行っているが、ふ化場の製作も積極的に行い、それらの費用は政府が支援しているほか、企業が資金を提供。大衆参加の進め方については、札幌からも学ぶ点が多いとしている。教育の一環にサケ学習を加え、4単位に分割したカリキュラムで徹底した指導を行い、バンクーバー島の東岸では98%の公立校で魚類と漁業規則に関する教育が実施されている。学生のほか幼稚園から中学校までの先生を対象にした教育と指導用の教科書があり、その内容は、日本の大学の教養課程における生物学にさえのっていないかなり高度なもので、サケを通じた魚類保護法の勉強が基本であるという。教育の重要性を高めてきている札幌の小・中学校と交流を希望する学校も多く、そこから生まれた両国のサケ学習国際交流が、子供たちに有益な体験を残してきている。またサケ捕食にかかわる土着民族との間でも、川の浄化、サケ資源増殖への参加を呼びかけ、施策も実行されている。この点でアイヌ文化を持つ、北海道は学ぶものがあるはずである。



B・C州バンクーバーではアウトドアスクールで自然のサケや河畔の環境を学ばせるようにしているし行政もそのために力を入れている

ロンドン テムズ川 TWAの河川浄化作戦

ロンドンのテムズ川は、1982年（昭和57年）7月末、サケ20尾が捕獲された。それまでの数年間、発電所入口、堰堤などにサケの死体は発見されていたが、生きたサケを大量に捕獲したのは160年ぶりのことだった。産業の振興に伴う汚染は、テムズ川を死の川に追いつめ、19世紀中期以降サケどころか、あらゆる魚類が姿を消してしまった。事態に対し、様々な施策がとられたが、最も効率があがったのはTWA（THAMES WATER AUTHORITY＝テムズ水系管理局）の登場だった。役割は、テムズ川とその支流々域13,000平方キロと、12,000人の住民の水に関する全ての分野を扱っている。汚染防止の動く実験室といわれる独自の船を持ち、川をパトロールするなど徹底した体制で、国の予算も膨大であるという。TWAが川の浄化のシンボルに選んだのがサケで、サケの住める川づくりが彼らの使命だった。1976年（昭和51年）第1回のサケ放流が行われた。2年後の放流には、さっぽろサケの会会員や市民代表が参加し、札幌—ロンドンの連帯の絆をより太く強いものにしたが、1982年の決定的なサケ回帰によって、TWAの成功が世界に伝えられ、同年札幌で開催された「日本サケ会議」に招かれたTWA広報部ドロシー・シーリー夫人は「私たち同様、会議に出席された皆様の活動も成功されるよう望みます」と胸を張った。ロンドンと札幌はその後もサケの連帯を続け、ロンドンのサケ放流募金を全道で支援してきた。サケの回帰という点では札幌はロンドンをしのいではいるが、約2世紀にわたって汚れ放しだった川の浄化に手をつけ、そのシンボルであるサケ回帰にこぎつけたロンドンの努力に敬服しなければならない。その快挙は、世界の未来につながる大きなステップと言えるからだ。


ドロシー・シーリー夫人と語りあう吉崎氏


ロンドンのサケ放流にひと役かって出た札幌サケの会のメンバー

サケを通じ広く世界と手を結んでいく札幌の運動が今、ひとつの節目を迎える。これからどんな活動を見せてくれるのか、多くの国や関係者が注目していることは言うまでもない。札幌の新しい活動が、これまでの運動とその成果のように世界に響くのかどうか、われわれもまた世界の国々のことをもっと知らなければならないだろう。

北海道サケ友の会創立20年特集

座談会

野性のサケを通じて学ぶ教育

豊平川にサケのぼる これは「大事件」だった





出席者(敬称略)

植村　敏
(北海道サケ友の会会長)

木村　義一
(前千歳サケのふるさと館館長・友の会理事)

吉崎　昌一
(さっぽろサケの会初代代表)

森脇　香
(札幌市立中の島小学校教諭)

司会　高橋　重義
(北海道サケ友の会理事)

20周年記念誌の編集に当り、カムバックサーモン運動の創始に関わった人びとと、実際にその後の事業に参画した方がたの中から、4人の方にお願いして座談会を持ち、「ナマの声」を本誌に集録した。

会の創立にまつわる苦労話（昭和53年秋）や、同56年初のサケ遡上を目のあたりにした歓喜と感動。一般市民を巻きこんだカムバックサーモン運動の今日までの成果等をふり返えり、次なる10周年に向けて、運動の方向を模索するねらいで各氏に自由にそして気軽にお話ししていただいた。



司会　高橋　重義氏

司会　お忙しいなかお集りいただきましてありがとうございました。

北海道サケ友の会は本年20周年を迎え、これを記念して20年の歩みを編集しているところです。

まず、前段ではこの会の起源を掘り起こしてみたい。そしてこの20年の反省の上に立って後段の「次なる10年」をどう描くか、事業の見直しの有無、課題またはビジョン等についてフリートーキング形式で話を進めていきたいと考えております。

私は忘れられないのは「さっぽろサケの会」の幹部でHTBのニュースキャスターだった菅原安信氏が、キャスターとしてデビューした日（昭和56年10月5日）彼は豊平川に中継をセッティング、そして目の前に、サケが上ってきた実況をやったんです。

「サケが戻りました。ごらんください目の前で撥ねています。皆さん夢ではありません。」と絶叫に近かった。「夢ではありません」と2度も言ってました。

当時のカムバックサーモンの市民運動の先頭に立っておられた吉崎先生（当時北大助教授）は、著書「サケよ、豊平川をのぼれ」の中で、「……彼の口から飛び出した一声は、冷静であるべきニュースキャスターにはあるまじき絶叫であった」と書いておられる。

では、吉崎先生、歴史の証人として当時の様子を話してくださいませんか。

吉崎　菅原さんは私の大学の後輩で、そもそもの話は環境問題でHTBの何周年記念か何かで川べりでイベントをやることになったので、何をやるのと聞いたところ、河畔でマラソン大会でも…というので「そんな俗っぽいことだから日本の文化は低迷するんだ」と一喝くらわして「実は…」となってサケの運動のことを言ったら、菅原さんは「それはいける」ということになったんです。

植村　果たして、我々が放流すれば必ず戻るんだという確信はおありでしたか。

吉崎　これはずい分悩みましたね。専門家でもこれを科学的に結論づけるのに時間がかかりました。結局、これは間違いないと考えてよいとのことでホッとしました。

司会　もう一つ分らないことがあるんですが、生中継を予定したら、そこへサケが上ってきたというのは話がうますぎると思うのですが。

吉崎　ほんとにそう思うでしょう。全く偶然なんですよ。期待はしていたが、こううまく行くとは思いもしなかったですよ。だからヒット中のヒットですよ。これは…

司会　こんな話もめったにはありませんよね。あのサケフィーバーは、この時点から起点と考えてよいのですか？

吉崎　言ってみれば、マスコミが起こしたフィーバーでしょう。当時サケが戻ったということは大事件でした。

司会　ところで植村会長は子供のころ、サケの密猟を見たことありましたか？

植村　ないですよ。昔は豊平川に遡上していたという話は聞いていましたが…。

吉崎　いやあ豊平川ばかりではなく、あちこちサケが上っていましたよ。

木村　桑園から伊藤亀太郎さんの所にかけて湧水があってサケが上っていたと聞いています。

吉崎　北海学園大学の森本理事長が子供の頃、自分の家までサケが上ってきたと言っていました。それから北大の構内を流れている川で昭和26年にサケが上ってきたのでつかまえて食べた話。北大構内を流れている川に定年近い事務官が昭和26年にサケが上ってきて、つかまえ食べたとの話。そしてそれが最後だったということ。

また、クラークの時期にはサケがいっぱい上ってきて学生たちが鍋にして食べたという記録が残っています。

司会　いまは北大の川は水がありませんが。

吉崎　今の川は道庁が汲み上げて空調に使いその水を流しているから、水源が枯れてしまった。さらに札幌駅の地下を造ったとたんに水脈を切られ、それが水枯れの最大の原因。でなければ自然の川はまだ少し残っていたと思います。



吉崎　昌一氏

北大構内にサケ回遊 学生が〝ナベ〟にした

木村　私は伊藤邸の近くに住んでいたので、植物園近くの伊藤さんの川が湧きつぼだったことを知っており、子供の頃、栗を拾いタライを浮べて邸の中へ他の男の子や女の子たちと遊びに入りこんで、叱られたことがありました。一週間ほど前、千歳でのパーティで伊藤義郎さんとご一緒して、この話が出たとき、「あのときの子供さんは貴方でしたか」となり二人で大笑いとなりました。（笑い）

植村　豊平川は戦前までは水産庁が人工ふ化放流をやっていたんですね。それほど水がきれいだったということですか。

木村　ずーっとやっていました。

植村　昭和22年遊泳禁止令が出てということは、戦後水が汚れたということになりますね。

木村　それで昭和50年くらいまで約30年間放流は時どき人工ふ化のみで事業はとびとびでした。これは千歳でとれたら豊平川はいらないと、つまり現今のような系統群を養成する必要がなかったということでしょう。

吉崎　もっと古い時期にサケに対し人間が関与しなかった時代があった。ブラキストン（1832～1891、英国人動物学者）の日本人妻の日記に、ブラキストンと北海道の御用役人（外国人）と二人で釣りをしていた。もちろん獲物はサケで日本最古のフライフィッシングです。明治のはじめ頃でしょう。その頃は相当にきれいな川なんだ。

司会　それでは話題を変えてみましょう。汚れた川をきれいにすれば、放流した魚は必ず戻ってくるという方程式は成り立つんですか。炭じんで真っ黒な幾春別川を閉山を機にきれいにしたら魚がもどってきた。これ、方程式と考えてよいのかな。



サケの神秘は、生まれた川に戻ってくることだが、しかし汚れていては帰ってこない

川をきれいにすればサケは戻る？

木村　そうですね。基本的にはそう理解してよいのだろうと思いますが、長年事業をとおしてみますと、それだけではどうも完全に説明がつかないということが、よくあるんです。



植村　敏氏

たとえば、十勝のサケは大きくて早く帰る。網走のサケは小さくておそく帰る。それで大きい魚がほしいというので、十勝から網走に運んで放流したら四年後には大きい魚が網走に帰ってきた。そこで大きい魚からの卵を春に放流したら、一匹も帰ってこない。

ということで、きちんとした結論は出ていないので、何とも言えないが可能性としては一度は帰ってくるんです。しかし、その系統群の魚は（例えば十勝の魚）別のところ（網走）で授精させたのは帰って来れないのではという感じを私は強く持っています。

ですから、随分飛んだ話になるのですが、「命を伝える」という意味での「遺伝子」はどこでも出来ると思うんです。例えば、人工ふ化の受け渡ししたカナダの卵と精子を持ってきて北海道で授精させると稚魚になります。でも命の伝達はできても自分の母川を認識するというような個有のものや、種族的に経験したことが「遺伝子」に受けつがれていることは、命と別に伝達されているのではと空想しているんです。自分の習慣とか場所認知などは、本来母川でなければうまく行ってないのではと。だからこそ97％もの確率で母川にこだわっている理由があるんですね。つまり幾春別の鮭も実は豊平川の鮭でしたというのであれば、豊平川はいらないのであって他に川があれば用は足りてしまう。にもかかわらず97～98％の確率で自分の川にしか帰って来ないという性質を残しているということは、やっぱりその場所での遺伝子の受け渡しの必要な条件がどうしてもあるのではと空想しているわけです。そうでも考えないと97％という正常な感覚機能があれば100％とみてもいいでしょう。たまに個体別に感覚の悪いヤツもいるわけですから、そうであれば100％帰ってくるわけですよ。簡単には他の川を母川に代えられない。その可能性を強く感じます。

植村　自然の産卵だと母川ということもあるけど、人工ふ化の場合でも母川ですか？そこらが難しい。最初いろいろな川からとった卵を全道にバラまいていたのでしょう。

木村　いいえ、大体その川でとったヤツをその川で収容し、そして放したというのが大筋です。

植村　ああ、それで今の話があってきます。

木村　伊藤一隆が人工ふ化の先鞭をつけたわけですが、人工ふ化したものを一カ所に集めて飼育してから各ふ化場にバラまこうと考えたようですが、もし実践していたらうまくいかなかったろうと思います。そして雨後の筍のごとくふ化場ができて、それぞれのふ化場で卵をとって育て放して成功をみているのです。

植村　遡上してきた鮭が覚えているその母川の認識が卵に伝わるということですね。つまり放された川でなく上ってきた川に放流すればそれが母川ということで母川に帰ったということができるわけですね。

放流すれば回帰する確信していた市民運動



木村　義一氏

木村　ええ、そういうことですよ。

吉崎　それにも誤差がありましてね。植村さんのように自分の家に帰る道をまちがえて（笑い）そういうのがないと広がりがない。数は少ないけどね。

木村　自分の種族を繁栄させるために適応性を広める。そのために進化するんですよ。

百万年前に氷河期があってサケはそこから進化したと考えられている。それ以前、サケは真水で産卵して海に出ていった。ところが豊平川や千歳川があったわけではないので、別の形で真水が供与された時代があったのだろうと思います。それが、たかだか百万年の間に分化してそれぞれの川に帰属して母川としている。これが不思議でならない。



稚魚の放流に参加した札幌の市民

森脇　母川についてですが、石狩川がありますね。豊平川がそれに注ぎますね。さらに豊平川の支流に真駒内川や山鼻川がある。そこで放流したサケがその川まで帰ってくる。こうなると母川がどれなのか分からないですね。

木村　19世紀から20世紀にかけてアメリカで50年間にわけて色々な卵を世界各国に移植して拡大を計っているのですが、ナリも成功したというがそれは定かではない。確認できるのはニュージーランドのマスノスケだけです。そういう面から簡単には他人の川を母川にする魚ではない。ただ身近な豊平川で、これだけ帰ってきたのは何なのか、始めは千歳の卵でしたから。

私のような考え方ですと豊平川のサケとは何だということになる。

近年は本州でもどんどん北海道の卵を送って移植の効果が上った実例もあるが、北海道の卵が本当に増えたのかと疑問が強いのです。

種属を維持するには卵はある程度密度がないと生きてゆけませんから、そういう中で北海道の卵をいっしょに放してやることで本来の魚が守られて、密度が保たれるのであって、豊平川の場合もたまたま豊平川と千歳の魚のカギがあって、子孫に残ったのが増えてきたと思います。

吉崎　僕も木村さんもヤクザですから話している言葉はヤクザ言葉でなかなか理解できない。生物の個体を一定の数で割ると急激に減少する。豊平川には明治時代に確実にサケが上った証拠がある。戦後、米軍キャンプが撤収されたら豊平川にサケが目撃されている。ハッキリしないが、わずか戻ってきた可能性。それは自然産卵があった。水の条件が良くなってきたので定着しようと思ったのに他の魚に卵は食われるし、魚も食われる、そこへ栄養のいい千歳のサケが、他の魚を食う。それで土着の豊平川のサケは増え、安泰なのが数年続いたので千歳川のサケを持ってこなくてもよくなった。そういうことでしょう。

これは複雑でしょう。これは一般の人に分かるように解説するのはたいへんでしょう。

木村　ただこれは仮定の現象であって当を得たものでなく、こだわることはないのですが、それを考えておかないと単純にAの川からBの川に持っていったのではサケは可愛そう。

司会　昭和53年秋、者どもが集まって、運動を始めましたね。その頃の川はきれいだったのか、それとも浄化運動をしたので3年後にサケが戻ったということなのか。

植村　この前資料を見たら水質汚濁防止法が昭和47年にできて、下水がかなり普及して50年代の豊平川は魚が生息可能の状態だった。

吉崎　当時、川の水は仲間がつねにチェックしていたし釣り仲間の情報も集った中で、われわれの間では「放流すれば戻る」との確信はあった。放流するには、どうするかの方法論だけだった。われわれは水産庁のエラ方にも直談判した。それに乗ったエラ方が札幌市民の数(140万）だけ放せと号令をかけたりもして、木村さんはじめ水産庁の方々は大変な困りようだった。札幌市の何とか委員会の席上でも、テーブルを叩いてどなったこともありましたよ。

また、川の水は札幌に重工業地帯がないから、金属構成物質がほとんど出てこないし、生活雑排水は下水で処理されるし、米軍キャンプからの廃棄物も取り除かれ、急激に良くなったんですね。諸々の条件が重なったのだと思う。問題は重なった偶然をちゃんと認識している「さむらい」が沢山いて、これならいける（放流）という市民運動としては例をみない感情的ではない点で、本当にうまくいったと言える。それこそ植村さんの所へ行ったりして、ゆすったり色々なことがありました。(笑い)

植村　ところで、吉崎先生、カムバックサーモンて言葉は最初からあったの？それとさっぽろサケの会ができるとき、「さっぽろサケの憲章」が作られましたが、あれを読んで20年前とも思えない今に通ずることだと感動しました。今の人に聞かせたいね。

吉崎　カムバックサーモンは皆で呑んでいるとき、誰かがある名画「シェーン」の終りの場面に出てくる「カムバック・シェーン、カムバック」を口に出したので、ああこれがいいと菅原さんが真先にOKしたとか。さらにもうひとつサーモン・ベビーですよ。歌にもなりました。それからシンボルマークが生まれた…。

植村　カムバックサーモンはわかり易い。仲間から「あんた何やってるの」といわれて「カムバックサーモンだよ」と言うと「ああそうか」と簡単に通じるんだ。

司会　もうひとつ、吉崎先生にお聞きしたい。それは菅原安信さんの文章かな？これ…。

「昭和58年には、さっぽろサケの会は当初の予定通り解散。メンバーOBを中心に“サケ友の会”として再出発……中略……」この解散ですが、それは目的は達成されたという潔い解散と見てよいのですか？

吉崎　実は潔くないんですよ（笑い）。サケが定着してそのまま組織運営していくと、どうしてもお金が足りない。そういう時にHTBに年間１千万も出すかと聞いたら、それは無理だという。そんなみじめな思いをしては市民運動の幕引きを汚すもの、だからやめようと強行に主張したのは私です。そのかわりこの組織を生かして名前を変えて走ろうという工作をしたのです。

司会　さっぽろサケの会が５年間、次のサケ友の会から５年間合わせて10周年。例の10年の懐古文の終りの３行ですが、「この次の十年間は、我々よりももっと科学的な自然観を持ち、若くて活発なサーモン第二世代の人々が中心になって新たな地平が切り拓かれているに違いない」これですがね、どうも皮肉に聞こえるんですよ（笑い）

吉崎　これは僕の発言だと思いませんか？こういう言い方は普通の人はなかなかやらない。我々よりもっと科学的な自然観を持ち若くて活発なサーモン第二世代の人が表面化しなければ困る。これは私が10周年の挨拶で言った言葉です。我々老人はもうひっこんでいればよい。これを受けついでいくのは若い世代だ。もっと自然科学的な生態学的な実力のある人たちが表面に立つべきである。決して感傷でこの運動やったわけではない。市民運動としての限界を知ってきちんと幕引きをすべきだ。と言う気持があの発言となったのです。

森脇　それで漠然としていたものが見えてきましたね。



森脇　香さん

植村　その時さ、気境さん（前友の会会長）とどんな話になったんですか。そのあたりが分からない。昭和58年の秋、吉崎先生が僕の所へ来て宝焼酎から幕引きのため、金を戴いてきた。これをしかるべき所で預かってくれ…ということでしたね。

吉崎　気境先生に膝詰め談判で会長就任を依頼（平成２年）そして北海道の名が冠せられ北海道サケ友の会となった。

実は北大当時はよくクレームをつけられました。自分の仕事の延長（北太平洋の民族研究）だと説明しても分ってもらえず、嫌気がさしておりました。

植村　いや、よく分かりました。

司会　気境さんに代わってから、北海道サケ友の会は、

J・マレー氏と意気投合 カナダとの交流生まれる

カムバックサーモンの使命は達成されたのだから、友の会として何をやったらよいのか、やるべきなのか、今日我々の目に写っているのは環境教育、情操教育といった面で、卵から稚魚にそして放流壮行会、１年おきの海外派遣と相互交流、これは大事業ですが、しっかりと定着しています。そのほかにも年間事業も結構あって１年間をすきまなく走らされておりますが、どうも当初のカムバックサーモンを掲げて走った当時と方向性において違うことになってしまっているのではないか。

吉崎　カムバックサーモンの運動を豊平川ではじめたとき、ちょうどすすきののグリーンホテルにカナダのジム・マレー氏（当時太平洋サケ協会会長）が泊まっていた。誰かがジム・マレー氏はカナダの水産関係者にパワーがあるから会ってみたらどうか、と言われてノコノコ会いに行ってきました。意気投合しまして、「お前さん、そういう運動しているのならカナダでもやる。両方で手を結んでやろう」という話になった。

カナダの方では政府の支援で一般の人たちに、たとえばサケを大切にしようとか、産卵床をきちんと残すということに関しては、実は外部団体にいたジム・マレー氏が絶大な威力を発揮しているんです。もう一つ彼は日本のマンガに登場しているんです。これが有名な釣キチ三平というマンガでして、釣キチ三平がバンクーバーにサーモンダービーに行くシーンがあるんです。その時に日本の三平を迎えてダービーに参加するシーンがある。それで、来道したとき彼を小学校に連れていくと、５年から６年生の教室だと半分以上がジム・マレー氏の名を知っているんですよ。



ジム・マレー氏と豊平川の川岸で握手する吉崎氏

司会　なるほど、先鞭をつけたのが我が方なんですか。

吉崎　両方ですね（笑い）。先鞭をつけたというのではなくて一般の人たちが、大体そのレベルまできていて、ちょっと刺激を与えれば走れた、そういう状態だったんですね。ある意味では自然保護運動という形をとった。それで一応サケ大使などの問題もね。僕は大人はダメだと会議で言ったことがあるんですよ。大人はいくら教育してもゴルフに夢中になるだけで（笑い）、自然環境とか生態環境を守るということにはならない。それで大人はやめて、できれば子供たちにカナダに行ってもらって、木のすごく生えている、サケがいっぱい戻ってくる川を見せる。そのほうが子供たちにとってはプラスで生態学の勉強にもなると感じさせることは、子供たちが大人になったとき、本当に北海道に良い状況の河川が生まれたり、トータルで見る生態学が生まれる。

だから、やろうと全員の中から話が出てきて、推進する委員会ができて走るようになったんです。

司会　良く分りました。やっぱり「サケ学習国際交流」の派遣事業は良いことにつながるから、来年も再来年もやろうということになる。子供たちにとっては得がたい機会ですね。これが縁で留学生が出たりしてね。

森脇先生、カナダに行ったことがきっかけで、また行ってきたそうですね。

森脇　三年前の春、友の会の事業で行きまして、ホストファミリーがすごくケアしてくれたので、感激して夏にカナダ旅行を計画したんです。

その家にどうしても泊まりたかったので、ツアーでは行けないので自分で航空券を手配して、東海岸からカナダ横断しまして、その家にもステイして帰ってくるということにしたんですけど、それ以来やみつきになって今でも夏冬必ず海外に出かけます。

司会　自信を持ったんですね。

森脇　おかげで英語はほとんど困らない程度です。

サケ友の会のリーダーでカナダに行った時、着いた最初の日にすぐに子供たちが時差とかホームシックとかで

具合が悪くなって、その夜にホストマザーの家から電話がかかってきて、全然御飯も食べないしおなかを痛がっているんですが、と言われ私が車でいっしょに行ってどうしたんだと聞かれ、英語得意でなかったのですが、とにかく具合のわるい日本の子供がいて、心配している。カナダのファミリーがその間に立って何とかしなくてはいけないと、身ぶり手ぶりしているうちに三日目くらいからすんなり英語が入ってくるようになって非常に良い経験となりました。

司会　この話は団長で行った植村会長から聞かされて、すっかり森脇ファンになったんですが、いい話ですね。

そう言えば連れていったメンバーの伊藤チエさんという人がカナダの高校で留学中ですよ。

吉崎　北海道のどこにもない自然がカナダにはある。それを大切にしているということを分からせる必要がある。北海道の自然は二次植生ですからね。北海道にはほんものの自然なんか残っていませんよ。

司会　森脇先生、いま何年生の担任ですか？

森脇　1年生です。

司会　教科書にサケの一生が出てきますよね。

森脇　2年生の国語です。

司会　理科かなんかでは5年生くらいに出てくるのかな。

森脇　2001年～2年に大幅に指導要領が変わって環境教育がとり上げられまして、きっとどこの学校でも環境教育と言っても何をしようかと研究しているところです。

植村　環境教育という言葉は学校に馴染んでいますか。

森脇　今はまだです。これからくるのはカリキュラムとして数年後になるでしょう。今はまだ、国語とか、算数、理科などにチラホラ。それがとり除かれて国語とか算数に縛られないもので、国際理解教育とかボランティアとかで、何年か後に出てくると思うのですが、サケのことについてもそっちの方に目を向けて自分たちの地域の川、札幌ならば豊平川を調べてみようという学校も増えてくるのではないかと思います。

司会　もう一つ伺いたいのですが、三年前の派遣の時、中の島小の児童はいたんですか。

森脇　二人いました。

司会　その子たちのその後の生活態度や学習の上で何か変化が見られましたか。

森脇　ただ、英語を頑張ろうとしているようで、二人共特に英語にふれたことで中学に行ってからもがんばって今でもファミリーと文通しているようです。

司会　それがきっかけで雄飛した人もいれば、近い将来に向けて研修している人もいるんですね。

吉崎　石狩市にも高校でサケの関係でカナダに行った人が向うの大学に入ったという例がいくつかあるようですよ。

司会　ではこのあたりで後段に入りたいと思います。

現在の当会の事業内容をおおざっぱにながめてみて、この上に、真新しい事業があるとしたらどのようなものか、また、こういう点は見直した方がよいとか、会員がだまっていても増えていくような画期的な事業と言えば思いつくのはこんな事とか、吉崎先生の本によれば、さっぽろサケの会の解散当時は150名余りだったと言うのに、今や全道に及ぶ会員数が900名にも達しているということになると、これがそのまま続いてゆくだろうかという心配もある。そういう観点から木村先生何か名案はありませんか。

サケの会「卵をください」ふ化場側「それはムリだ」「では貸与しましょう」苦労した稚魚の確保

木村　そうですね。系統的な考えは持っていませんが、ただ、カムバックサーモン運動の始まったときに、大きな障害となっていたことは卵を手に入れるということで実はかくされたご苦労があったわけで、語ればキリがないのですが、私は反対側の役所にいた方なんで、そっちの方の事情から申しますと、北海道のサケは明治時代どんどん減って80年間くらい増やすことができなかったんですね。しかも、ふ化事業の基盤になっているのが資源保護法という法律だったんです。根拠は漁業法であってその中にあって水産資源を維持するために設けられたもの、増やそうとする行為も水産業の育成のためという目的がはっきりしているわけです。

こういう中で法律面でいえば、市民運動を育成しなければならないというのはない。また、教育に使うことだって、これは当時にすれば違和感があった。実際的に採卵は80年間増えなくて漸く増えはじめたというのは昭和47年からなんです。それは確然として増えはじめたのです。それまでは卵が確保できないということが一番ふ化事業の障害だったんですね。ですからサケを増殖する上においては卵というのは非常に貴重なものだった。



最初の放流にあたって、結局卵は「貸与」ということで稚魚がサケの会の手にわたった。卵は今でも国の財産。

そういう中でサケの会が「おい、卵を出せ」と来られたわけですから議論をする前に「それは困る」と(笑い)。ようやく卵が増えはじめて卵の確保が何とかなるかなという時代ですからね、今でしたらこうすると確保できるとはっきりしてますから、いいですよと数の上でもできたかもしれません。当時としてはそういう基本的認識がひとつあるうえにもってきて卵はたいへんだということが身にしみついていました。

私なんか昭和30年ふ化事業に入って、やったことは密猟の取締りだったんですからね。そしておどされて漸く卵を確保してきたという歴史の中で育ってきましたから卵を外に流用することに拒絶反応を示しました。ようやくサケが増え、私だけでなく組織全体がそんな時代だったんです。それだけに「卵をくれ」といった吉崎先生の方では大変だったろうと思います。まず、その牙城を崩さないことには一粒だって流れませんでしたから。

司会　このお話は前段、つまりカムバックサーモンの放流にかかわるお話としても重要な意味がありますが、運動に必要なお金とは卵の分もですか？

吉崎　運動全体ですよ。HTBが資金的にサポートしてくれてる部分があって、そんなに極端に予算が少ないということはないんです。

ただ、問題は運動以外にサケの稚魚とか卵をどうするかということが一番ひっかかったんです。どこへ行って話しても水産庁の人に会って話しても、それは良いことだというんですが、法律上どうにもならないと言う。表面上ではそう言う。夜にこっそり会ってみると、あれは法律上だめだけどちょっと鈴木善幸氏に圧力をかけたらとか色々な話が出てくる。だから地下水脈でつながって応援してくれた。

木村　組織全体としては、先ほど申し上げたようなことで、運動の趣旨はいま、吉崎先生がおっしゃったようにこれは誰が考えても意義があるわけで、そっちの方の考えを持った少数派は吉崎先生といろいろ話していたというわけなんですね。それが今言った内情なんです。

司会　お二人（吉崎先生と木村さん）は当時、立場上面白い関係でしたね。

吉崎　参加したり手伝ったりした人は、あの運動は反対だとか、あの運動はよくないという人は誰もいない。皆なんとかしてやろうと、これも稀有なんですよ。アイツの言ってることは信用できないなんていうのでなく一丸となって、表面上はどなりあいながらも、ちゃんとつながっていった。生態学的運動とかサケの運動とかとは別に実は市民運動として非常にうまくいったと思っている。

司会　鈴木善幸さんの所に児童が直訴しに行ったそうですね。

吉崎　あれは菅原安信氏の案なんです。どうも色々調べたら鈴木善幸さんに子供から手紙を出すのはどうか、それはいいではないか、ということになった。それを取り次いだのがニューヨーク・ワシントン支局長の手島君（NHK）で、彼は当時、政界の中枢部にいまして、こういう話を考えているんだが…といったらすぐ連絡とってくれまして善幸さんの所へ子供達が手紙を持って行った。マスコミで包囲してというのが真相です。だからみんなが一丸となって戦ったんだという感じがする。しか

もその時、鈴木善幸氏は総理大臣で全国サケ・マス協会の会長だったんです。

植村　その時、何を陳情したの。

吉崎　魚道を作ってサケが遡上しやすくしてということだった。今いくつかあるでしょう。

植村　卵の問題でね、気境前会長から聞いた話では、最終的には卵は国有財産だから、これは貸与する。だから道教育長から文書を出す。それを見ると「教育の材料としてサケ学習に卵を使う場合には、校長がその旨を言ってきた時は水産庁が卵を貸与する。借りたものだから、これを子供たちが学校でふ化して川に放流する。借りたものは川に放して返す。自然に返す。

だから、校長が職員会議でサケ学習をやると決めたら水産庁に行けばその時代と違って素直に貸与してくれる。そうなっているんです。

吉崎　それは役人の知恵ですよ。(笑い)

植村　そうだね、戴くんではない、もらってくるのではないんだ。借りてくるんですよ。あれは傑作だと思う。(笑い)

木村　やってることは共鳴できても法律でみると根拠がない。だから公文書で出されると困るんですよ。(笑い)

つまり法律的な背景は今も変わらないんですが、認識としては随分変わったと思いますよ。しかし、一時的な方便でもいいのですが、運動を正当化するためにも、そういった法律面でも見直しということも一つの課題になるのでは…と思いますね。これからはサケを守るのは水産庁が中心でなくて市民が中心で市民が守るんですよという意識を芽生えさせる時代ではないかと思う。それともう一つ、特に教育についてですが、サケを使えば多様なことを教える教材になり得る。

現状では単に飼育して放流して「帰っておいでよ」で止まっている。このことは全く一部分でしかない。あるいは考えようによっては、もしそれだけで子供たちにサケの認識を植えつけたら、こうして育っていった子供たちはサケが食べられなくなるのでは。“かわいいから食べる”とは結びつかない。あるいは自分たちが金魚鉢で育てたことでサケが帰ってくるんだと認識してしまうと、自然保護を目的としたサケ運動がとぎれるわけですね。自然なんて要らないのではないか、金魚鉢だけあればよいのではないかと間違ったとらえ方をするのではないか。もう少し金魚鉢で育てたものを一つの手法なのだということにして学習の中だけにとどめておく。いま、それがサケ学習のすべてみたいですよね。

植村　木村さんのおっしゃる通り、僕も数年前から情操教育と称して、もらってきた、イヤ借りてきた（笑い）卵を飼育し、そして元気に帰ってこいよで、きれいな部分で終わっている。教育というのはね、人工ふ化以外に自然産卵して生んだら死んでゆく、それが沈んだり食べられたりして、プランクトンやコケになって、水をまた川に住むものたちの関わり合いで豊かなきれいな川になってゆく、そこまで到達しなけりゃね。

単に「飼育と放流」だけでは野性のサケを認識できない



サケの腹をさいて採卵する児童たち　貴重な学習の一つだ

情操教育という面だけ強調すると、きれいな所だけとって死んで汚い部分は教育にならない。

サケは死んだら川を汚す、いまだにそう思っている人がいっぱいいる。我々もそう思っていた。教育の素材に不適だとの思いは捨てるべきで、命の大切さや、なぜ生まれた川に戻るのかという神秘性、そういう教育の部分がある。きれいな所だけではだめだと思います。

木村　サケというものを今までは人工ふ化が自然に置き換えて技術でカバーしようとしてきましたが、このような問題を考えますと、サケというのは「野生動物」なんだという“意識”をとり戻して「野生動物」をどう扱うべきか子供たちに教える、そういう発想になってくると、簡単に金魚鉢で飼うということは出てこないはずなんです。

森脇　カナダに行ったときにハチリの研究所での所長さんが熱く語っていました。要するに我々がやっていることはウソなんだ。今は自然のヘルプをしているが、本来こういう姿はあるべきではない。だから我々の手が入りすぎると自然は変わってしまうし、今は手伝いをしないと戻ってこれないから少し手伝いをしてるだけなんだ。我々の役目がなくなる日が本当の自然が戻る日なんだよ。と熱っぽく語っていたのが印象的でした。

植村　僕もいっしょに行ったんですが、ハチリで子供たちにナイフを持たせてマスを分解するんです。自ら。日本ではナイフを持って魚を切れなんて大変ですよ。なかなか現場で指導できないと思う。

僕はああいうのを見て教育って先生方も幅の広いものを持ってて先住民族に対する勉強、魚ばかりでなく木の勉強もしている。僕はだんだん考えが変わってきて、この友の会にも魚の勉強ばかりでなく木の専門家とか、いずれ色々な人々が集って、たとえば環境というテーマで集まるときにはその道その道のタテ割りの分化した専門家集団の提言、意見が総合的に語れる場、そんな場が持たれるような会に近づけて行ったらよいのでは…と、漠然と考えているんですが。

木村　そうですね。私もこれからやることではないかと思っているんですが、教育の分野もこうした流れの中の一つではないか。それではどうすればよいのか。そこがサケの会が活動の場として残されているように思います。

植村　さっき森脇さんが言ったのは非常に大事な点で、自分が今、どういう位置にいて、この仕事をしているかスタンスがはっきりしているんですね。子供にも分かるし自分がサポートしていると。

我々もサケ友の会という立場で何をする、教育機関はこういうことを、何団体はこう、大学の先生はこういうことを研究する……と。

今はジェンダー21ということで国から市町村に至るまで環境時代ですよね。我々実際に市民として何を行動したらよいのか。サケ友の会はこういうことをやって先導的にちょっと飛び出したことをやってみたり、あるいはサポートする、または裏から支えるなど、教育が真正面からできないことを支えてやる位置づけと立場を明確にする。そうやってゆけば、この会もだんだん少しずつ成長していくのではないかという気がする。

感傷的な運動ではダメ 人工から自然直視へ

昨年岩見沢で相互交流した時、市長が情報通信に熱心でキーステーションを作った。その初使用でカナダと同時テレビ会議をやったんです。カナダから派遣されてきている子供たちがここにいてカナダ側には両親や先生方がいる。同時時間でテレビ会議、子供たちだけで質問させた。

僕は非常に印象的だったのは、日本の子供が「川をきれいにするにはどうしたらいいんだ」と質問した。カナダの子供が即座に「木を植えればよい」と答えた。その早さ。日本の子供がそんなに早く「木を植える」などという答えは出ないと思う。

また一行の副校長キム・フルトン氏は、教育者であって学者とまではいかないにしても、担当は自然環境の指導者としての素地を持っているね。我々の子供たちが行ったときにハチリへ連れていった。フルトン氏は川のほとりに柳の木を植えたり魚の腹をさいたり、いろいろなことをして教えてくれる。

さらに女の先生（スミスさん）がこれまたパッとうまいこと、子供たちが納得するような答えをする。日本の場合は、よく大人が困ってごまかして子供に教えるような時があるでしょう。それがない、全く感心するよ。

木村　さっぽろサケの会を通して環境を整備しようと、そういうことを求めていこうとしているんですが、今の段階では、教育で使われている実体から見ますと、環境



稚魚はかわいい　しかしペットのように接していては「野生動物」サケはわからない



カムバックサーモン、第二、第三世代の子供たちはカナダの友だちと輪を広げている

まで突き抜けてないんですね。サケを触る所で止まってるんですよ。つきぬけていなんですよ。その点カナダの子供たちは環境問題を目ざしてサケを媒体にしているんですよね。日本の子供たちはサケを育てることだけで終っているんです。かわいいから帰っておいでと。ところが金魚鉢で育てた魚を放していたら他の魚のエサになっているんですよ。先生方はごまかして帰ってくるんだよと言ってるわけですね。

極端な話、今のやり方でやってるのは先生方のいう蛙のお腹をさくのと同じレベルで養ってるというならよいでしょう。何のためにと先生方にたずねると、命の大切さを教えるためという。それは間違いでしょうと。

吉崎　そこのところはなかなか分かってもらえない。

木村　教育に少しこだわってますけど本当に言いたいことは、サケそのものをどうする、こうするではなく、サケを通して子供たちに自然を呼び戻させるというのが目的ではないか。それが止まってしまっている。サケは野生動物なんだからペットにしてはいけないというところから始まらないとなかなか理解してもらえないのではないか。

司会　吉崎先生のこの本でも子供たちにホッチャレを見せるのは残酷かって悩んでますね。17年前の本にですよ。

吉崎　ただね、僕はこれからの10年というのは生態環境を表面に出しながら子供たちに、自分の身のまわりの自然をどういうふうに認識させるのかということに全力をあげるべきだと思うんです。ひとつ踏みあやまるとヤバイと思うことがあるんです。

それはサケだけじゃなく、自然というものは遷移するものなんです。自然というものは巨視的に見れば永久不変ではない。徐々に環境条件によって変わってゆくんです。ところが今の自然保護運動は「こういう状況が残ってもらわなければ困る」という運動です。

自然が変わってゆくというのを認識したうえでサケの会のプログラムを進めていくというきちんと基本的な姿勢を持ってないと、どっかで破綻する。例えば、いつまでたっても北大にエルムがあってね、エルムが大変だとテレビで流れてたけど、エルムが北海道と思っているけれど、あれは地下水面が高くないと生育しないんです。風が吹くとバンバン折れてゆく、地下水をあれだけ使ってしまったということもあるが、自然の状態でも生える木があるんですね。他の木がどんどん生えていく、エルムなんて生えない、そういうのを分かっていて自然保護をやるのと、分からないで感情的にエルムに抱きついて涙こぼしている（笑い）自然保護をしようとするのとは、全然レベルが違うんです。その点見定めて運動に入る必要がある。

だから僕は最初から感情的（エモーショナル）な環境教育はやらない方がよい。その点カナダの連中はよく見ている。だから子供たちをカナダに連れていってインパクトを受けさせるのも効果的だと思う。

司会　森脇先生ね、自然産卵を終わった後の死屍累々のサケの墓場のような光景を見たことがありますか。

森脇　カナダで初めてみました。

司会　豊平川で見れますよ。水穂大橋の上からサーモンウォッチングでね。これはショックでした。特に情操教育の面でいいと思いました。このことが10何年も前に吉崎先生が本に書いておられる。

木村　かつて何校かに2年生の教科書に載っているものですから、それに関連して話をしてくれという時に必ず死んだ鮭を持ってゆくんです。子供の前でお腹をさくんですね。始めのうちは、初めてのことですから目をおおいますが、もちろん話しながら、45分話しているうちに、皆分けてくれ持って帰って食べるというんです。その主軸になっていることは、かわいそうだけど生きるということは他の動物の命をもらうということだよ。いい教材としてアイヌは殺したものを感謝して丁寧に食べるんだ。と話すと2年生の子供に分かるんです。最後は切身の取り合いですよ。持っていって食べるからくれくれと。

こういうことを通じて教える教え方によっては食べ物に対する感謝の気持ちが芽生えるのではないだろうか。残酷だという怖れよりもそういった効果の方が子供たちのためになることだ。残酷となれば、どうしても残酷なんですよ。しかし残酷を容認したら人間は生きていけないですよ。その矛盾も小学校2～3年になったら、うすうす分かってくると思います。そういうのを避けないで教える。このためにはサケだったらよい教材ですよ。

植村　サケられない（大爆笑）

森脇　2年生の教科書、国語にですが、サケのことが出てまいります。

尾びれで穴を掘ります（産卵床）。サケの説明に出てくる1メートルあまりの大きさのサケの模型を作って、穴も黒板に教科書の文章から拾って、1メートル余りの自分の体より大きい穴を書いて、みんなすごく感動するんです。それぞれボロボロになって死んでゆくという所を読んで感動するんです。

植村　今日はとても有意義なお話を沢山聞かせてもらいました。ご出席の皆様に感謝申しあげます。中でも自然というものは生きており、只ただ保全するだけでは自然生態を守ることにはならないというお話やら、サケは野性の動物であることを忘れてはならないとのご指摘など、友の会の一員として心に残るものでした。

友の会の活動は、この先いろいろ課題もありますが、この座談会で語られた事柄を参考に致しながら、様々な場面でサポーターの役割りを果たしていきたい、そんなふうに考えております。どうぞ今後共ご指導いただきますようにお願い致します。

司会　いやあ、本日は会長の言われたとおり貴重なお話を沢山お聞かせいただき、20年誌を飾るにふさわしい座談会になりました。何といっても和やかなふんいきの中で終始できたことを心から感謝申し上げ、この座談会を閉じることにいたします。どうもありがとうございました。


「サケ学習の国際交流」は友の会の大切な事業の一つで、これからも回を重ね充実していく計画を立てている

〃教育〃はカナダが先輩
意義のある学習交流

サケを通した「教育と学習」
自然は永久不変ではない
友の会の役割はサポートだ

『北海道サケ友の会』会則

昭和60年４月１日制定
平成４年５月13日改定

第１条　この会は『北海道サケ友の会』といい、事務局を札幌市豊平川さけ科学館「さかな館」内に置く。
2　英文の会名は、Hokkaido Salmon Associationとする。

第２条　この会は、サケの生態系の回復、河川環境の保全などの意識を普及するとともに、特に、青少年がこれらについての知識および情操を養うための国際交流などを支援するほか、サケの自然産卵保護などに関し必要な活動を行うことを目的とする。

第３条　この会は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。
1　会誌「北の川」の発行
2　関係分野についての研究、調査、講演会、各種啓発活動
3　学校の「サケ学習」の普及促進
4　共通の目的を有する行政、諸団体との提携
5　海外の行政、諸団体との交流による青少年の学習派遣および受け入れ
6　公立さけ科学館の実施する活動への協力
7　その他、必要と認める事業

第４条　会員は、この会の目的および事業に賛同する法人・団体並びに個人をもって構成し、その種類を正会員および準会員とする。

第５条　正会員は、法人・団体、または個人とし、入会申込書を提出し、会費を納入した者とする。

第６条　準会員は、生徒、児童であって、入会申込書を提出し、年額500円の会費を納めた者とする。

第７条　正会員は、次の年会費を納める。
1　個人　１口2,000円　１口以上
2　法人　１口5,000円　１口以上
3　個人会員であって、一時に２万円以上を納めた者は終身会員とする

第８条　この会に、次の役員を置く。
1　会　　長　　1　名
2　副 会 長　　若干名
3　専務理事　　1　名
4　常務理事　　1　名
5　理　　事　　20名以上35名以内
6　監　　事　　2　名

第９条　理事および監事は、会員の中から総会において選任するものとし、会長、副会長、専務理事、常務理事は、理事の互選によって決める。

第10条　会長は、この会を代表し、会務を統括する。
2　副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときはその職務を代行する。
3　専務理事は、会務を掌理する。
4　常務理事は、会務を分掌する。
5　監事は、会の会計並びに会務について監査する。

第11条　役員の任期は２年とし、再任を妨げない。

第12条　この会に顧問を置くことができる。

第13条　この会の会議は、総会および理事会とし、総会は通常総会および臨時総会とする。

第14条　総会は、次の事項を審議する。
1　予算および決算並びに財産目録に関すること
2　事業計画および事業報告に関すること
3　役員の選任に関すること
4　会則の変更に関すること
5　その他、会の運営に関する重要事項

第15条　理事会は、次の事項を審議する。
1　総会に決議した事項の執行に関すること
2　総会に付議すべき事項

第16条　会議は会長が招集し、議長は会長があたる。

第17条　通常総会は毎年１回開催する。ただし、会長が必要と認めたとき、または会員の３分の１以上の請求があったときは、臨時総会を開催する。
2　理事会は、会長が必要と認めたとき、または理事の３分の１以上から請求があったとき開催する。

第18条　この会の会計は、会費、寄付金およびその他の収入をもってあてる。
2　会計年度は、毎年５月１日に始まり、翌年４月30日に終わる。

第19条　この会に事務局長を置く。
2　事務局長は、会長が委嘱する。

『北海道サケ友の会』役員名簿

平成10年５月１日現在

会長	植村　敏	植鈎産業㈱専務取締役
副会長	江利川　喜一	㈱北海道河川防災研究センター理事長
専務理事	小本　毅	北海道サケ友の会事務局長
理事	稲垣　篤	札幌市立福住小学校長
理事	石塚　喜代子	㈱雪の五輪代表取締役社長
理事	大塚　誠次	元さっぽろサケの会事務局長
理事	長内　稔	元札幌市豊平川さけ科学館館長
理事	鍛治　英介	㈱北海道スポーツフィッシング協会理事 相談役
理事	金田　寿夫	前札幌市豊平川さけ科学館館長
理事	木村　義一	前千歳サケのふるさと館館長
理事	木村　正宏	宝酒造㈱札幌支社長
理事	栗林　正明	三ツ輪航空サービス㈱社長
理事	工藤　哲朗	前道立社会教育総合センター所長
理事	幸谷　照三	北海道教友会副会長
理事	佐藤　直一	元㈱北方圏センター理事　事務局長
理事	佐藤　信子	国際ソロプチミスト札幌中央会長エレクト
理事	高橋　重義	北海道青年大学同窓会代表
理事	高橋　壽一	北海道女子大学短期大学部教授・秘書室長
理事	高畑　一夫	北海道テレビ放送㈱常勤監査役
理事	高野　義昭	㈱ホクスイ設計コンサル代表取締役
理事	竹田　正之	北海道内水面漁場管理委員会会長
理事	泊出　光一	菱中建設㈱常務取締役
理事	富本　荘一	トミヤ商事㈱代表取締役
理事	和田　芳治	札幌クラークライオンズクラブ会長
理事	長尾　正蔵	長尾工業㈱会長
理事	長谷川　圭佑	北海道カナダ協会事務局長
理事	藤井　英勝	㈱藤井ビル代表取締役
理事	三谷　吉男	前初山別村教育長
理事	中村　炎	札幌クラークライオンズクラブ幹事
理事	和田　節子	国際ソロプチミスト札幌中央会長
理事	宮崎　徹	元東京教育研究所北海道分室顧問
理事	村端　克巳	㈶石狩川振興財団専務理事
理事	山口　富雄	山口木材㈱社長
理事	油津　雄夫	㈱エコニクス取締役 技術顧問 技術士(林業部門)
理事	横山　憲治	北海道テレビ放送㈱経営企画室長兼メディア企画室長
理事	吉岡　哲	北海道工業大学教授
監事	瀧澤　嘉一	北洋銀行取締役業務推進部長
監事	武部　保男	前㈱北海道土木協会相談役

会　員　の　現　況

平成10年５月１日現在

会員別	９．５．１現在	新規加入	退会等	現在数
終身会員	93	5	7	91
法人会員	165	3	7	161
個人会員	590	14	74	530
準会員	64		5	59
計	912	22	93	841

「北海道サケ友の会」20年史年表

1978　（昭和53年）

10・28　豊平川にサケを呼びもどそう「さっぽろサケの会」発足　代表・吉崎昌一氏（北大人類学助教授）第1回記者会見　活動スタート「来春サケ稚魚放流」きめる

11・3　HTB週刊ミレ紙上でキャンペーン開始

・17　豊平川とその支流河川のサケ遡上実態調査データ収集のため市民から遡上目撃情報の協力を求める

12・20　第2回記者会見　サケ放流資金1,500万円目標ポスターできるキャッチコピーは『SALMON BABY　私はサケです―大きくなる力を与えてください!!』5,000枚つくる
募金カプセルできる　直径15cmイクラを模したもの　イクラのシンボル・バッジもできる
募金キャンペーンがスタート　市民1人10円目標　年末までに募金も順調に推移した　会代表の吉崎昌一氏が自ら30万円を贈った

・22　豊平川サケ連絡協議会スタート　河川の視察を実施　協議会のメンバーは石狩川開発建設部　水産庁さけますふ化場　北海道庁水産部　北海道警察本部　北海道サケマス増殖事業協会　札幌市の代表が出席
さっぽろ「サケ」の憲章できる

1979　（昭和54年）

1・20　募金活動は順調に推移し　HTBは50万円を贈った　同局は以後寄付金の協力を続けた

・21　テムズ川のサケ資料届く　情報交換
第3回記者会見

2・1　氷のイクラを雪まつり会場に展示　雪まつり国際コンクールに参加した香港チームの香港観光協会部員のダナ・チャン嬢と同協会日本支局ペティ・ユエン嬢が同協会荒川日本局長とともに　サケ基金に5万円を寄付　札幌自動車学園理事長の長尾正蔵氏が200万円寄付　札幌パークホテルの調理師ら5万円寄付

・2　連絡協議会第2回会合ひらく　サケ稚魚放流日を決定（3月8日）水産庁は豊平川を調査河川に指定

・16　小学生のサケにおくることば募集

3・3　この日現在募金(イクラ・カプセル)は102件で金額3,178,270円

・7　第4回記者会見

・8　初のサケ稚魚20万尾放流　壮行会行う　豊平橋上流に市民500人が参加　アメリカ有数の地理月刊誌ナショナルジオグラフィックが取材

・10　テーマソング「SALMON BABY」を披露
『「サケ」の講演と映画会』講師・国立さけますふ化場長西野一彦氏　北大助教授吉崎昌一氏　鍛治英介氏(魚類研究家)

中旬　ロンドン市のテムズ川浄化の実情を視察　吉崎代表　札幌市立伏見中学校平山満教諭　主婦の浜久子さん　山崎翠さん

4・10　会への寄付金に宝酒造が250万円を贈った　他に北海道電力札幌市立東白石小児童　札幌輪の会　吉崎代表　藤田嘉代氏らが協力した　宝酒造は以降'83年まで寄付を続けた

・11　第5回記者会見

・12　この年2回目の稚魚放流　80万尾
連絡協議会第3回会合

6・18　キャンペーン・ソング「SALMON BABY」全国で発売（フォーライフ）

・25　東京晴海国際見本市でキャンペーン　皇太子殿下ご臨席　宝酒造参加　サケの会に32万円寄贈

・30　千歳北陽高校で新しい市民運動として「カムバックサーモン」を社会科授業でとりあげ1学年全員で研究発表
札幌円山ライオンズクラブ　札幌ロータリークラブ　北海道マネージメントクラブで　さっぽろサケの会がそれぞれ講演
札幌西区民センター主催による子供フェスティバルで映画「カナダのサケ」と講演

・下旬　宝酒造カムバックサーモン記念ボトル『純』発売

9・上旬　豊平川の外　札幌市内河川の発寒川　厚別川　新川などに昭和50年産稚魚が成魚となり回帰した　サケは戻ることが実証された

・24　カナダのB・C州のサケ資源倍増計画を視察　吉崎代表　西田良子市民代表（道教育大学札幌校講師）

10・2　B・C州視察一行帰札　札幌市民およびサケの会で報告会

・9　旭川JCの依頼で講演

11・3　石狩川水銀をなくす会会員が来訪　旭川でも同運動を展開したい旨協力要請をうけた

・6　連絡協議会第4回会合　カナダ太平洋サケ・マス資源協会理事ジム・マレー氏来札　AP通信が取材

12・15　札幌市立東白石小学校で全校サケ学習　講師派遣

・27　この年の募金トータルは669万円になった

1980　（昭和55年）

2・1　札幌雪まつり大通り8丁目会場で「北太平洋のサーモン・ベイビーに手紙を書こう」企画実施2,600通集まる

・2　TV番組「雪まつり・ワイドスペシャル」(HTB午後2：00～4：00放送）でキャンペーン・ショーを生中継

・5　札幌～バンクーバーを電話で結ぶ「ちびっこサーモン・ホットライン」を電電公社とKDDの協力で実施し成功（札幌市立東白石小～シアトル小）

・28　札幌市立伏見中学校の美術の授業で放流の際に飾る「さけのぼり」を製作

3・15　ロンドン・テムズ川サケ稚魚放流式にサケの会吉崎代表、菅原安信総務　乳井洋一広報ほか札幌市民代表3名計6名が参加　西田良子さんは自費参加　TWA（テムズ水系管理局）視察　24日に帰札

4・15　キャンペーンソングの第2弾「ガンバレ！サーモンベイビー」「サーモンマーチ」ビクターから発売

5・1　第2回豊平川サケ稚魚壮行会　140万尾放流

・8　豊平橋郵便局にキャンペーン・スタンプ設置

6・8　環境週間　豊平川クリーン作戦展開（札幌青少年連合　道潜水スポーツ協会などが共催）

7・18　カナダ太平洋サケ資源協会理事ジム・マレー氏来札

・20　カナダ　シシエルト小学校から雪まつり企画「札幌～バンクバー　サーモンホットライン」の録画VTRが到着

8・1　カナダへ親子サケ学習4組が出発（北方圏センターの基金援助とフレーザー教育財団の協力による）

9・5　札幌市内の白石神社境内に　ミニふ化場設置のプランを東白石小学校から相談があり　水産庁で現地調査したところ水質量ともに合格　協力を約束した　およそ稚魚2,000尾を飼育

・5～27　キャンペーン強化月間　札幌市内区民センター　児童会館で「サケの話しと映画の会」を開催　およそ1,600名が参加
北区では高齢者の集いがあり　秋葉鉄之会委員（水産庁企画課長）の講演に200名が聞き入った

・18　ロンドン　テムズ川に1978年放流のサケが回帰　祝電を送る

・19　市内新川でサケ目撃の通報　魚影の確認はできず

・中旬　5回にわたって　豊平川下流　雁木付近で川底調査写真撮影

・20　河岸クリーン作戦は22条橋左岸　ボーイスカウト第27団

・30　札幌鮮魚小売業組合青年部（友和会80名）サケ研修会　吉崎代表講演　テーマ「サケと川と人間」

10・4　札幌市北13条橋下で昭和55年のサケ目撃の情報が寄せられた

・10　河床クリーン作戦　道潜水スポーツクラブ

・15　カナダ　フレーザー財団創始者ジェームズ・マッキントッシュ氏視察のため来札

11・8　白石神社子供ミニふ化場オープン　発眼卵到着「稚魚歓迎会」ひらく

・22　北海道サケ会議開催（石狩町主催）吉崎代表記念講演　鍛治英介会委員「運動の経過」報告

12・25　寄付金のトータルは431万円　札幌自動車学園　宝酒造　札幌アカシヤライオンズクラブ　ボーイスカウト第27団　アラスカ・キングサーモン村　札幌生花商業協同組合　ケンアートセンター　ボールルーム円山　友和会　誉鮨　鮨清心会などが協力金を贈った

1981　（昭和56年）

2・3～8　雪まつり期間中「北太平洋のサーモンベイビーに手紙を書こう」実施（札幌円山・アカシヤライオンズクラブ協力）
返事発信のアラスカ・ブリストルベイライオンズ会長レン・マンダフル氏来札　キャンペーンに貢献

・6　中国黒竜江省旅行遊覧管理局訪日団　子供ミニふ化場視察　子供たちと交流

・8　日本列島ちびっ子サケ会議を雪まつり大通り8丁目会場で開催　石狩　千歳　池田のほか電話で　津軽石　千葉　山形　飯山　福岡が参加

・11　太平洋サケ会議（カナダB・C州提唱　カナダ航空協賛）準備会に吉崎代表出席

・28　カナダB・C州環境大臣ステファン・ロジャーズ氏来札　チリ国水産技官マリオ・ウンベルト・プチ氏さっぽろサケの会代表らと交流　今後の協力を約束

3・1　札幌広告代理店会議で運動の趣旨を説明　吉崎代表が講演

・27　京都府由良川サケ稚魚放流式に市民代表の小学生2名参加

4・23　さっぽろサケの会総会開催（北大クラーク会館）

・24　豊平川サケ連絡協議会開催

5・2　豊平川サケ稚魚放流壮行会　140万2,000尾を放流　2,000尾は札幌市立東白石小学校で飼育されたもの　市民4,500名が参加

6・21　さっぽろサケの会ロンドン事務局開設

・30　さっぽろサケの会「北の川刊行会」発行による季刊誌「北の川」を創刊　「北の川」とは「サケ科の魚類がのぼる川」と読み替えてもらい　全国の北の川に参加いただきたいと呼び掛けた　札幌市長の板垣武四氏が「思いでの豊平川」のエッセイを寄せた　同誌表題は札幌市在住の書家　島田無響氏の筆による

8・29　市民サケセミナー「講演と映画の会」（道新ホール）東海大学海洋学部教授　市原忠義氏の講演など市民350名参加

9・6　子供サケ自然保護観察隊結成　隊長・札幌天使女子短大教授渡辺進氏が就任　小学生75名　中学生17名　高校生2名　計94名が入団　室内外の学習会を4回開催
以降、1985年（昭和60年）まで実施　豊平川の環境見学　林間学校　豊平川クリーン作戦など

・15　放流3年魚回帰1号発見　札幌市南区の真駒内川で発見

・16　回帰サケの観察のためキャンピングカーを豊平川と厚別川の合流点に設置　札幌大学フィッシングクラブの協力で観察を行った

・30　「北の川」2号発行　札幌グランドホテル　札幌パークホテルなど市内有名ホテル　また市各区役所ほか同中央・南・豊平区民センター　自治会館　北海道電力本店エレナードなどで無料配布

10・5　豊平川にサケ戻る　カムバック・サーモンが成功した

・8　カナダ連邦水産高官来札　H・D・ジョンストン氏　N・W・フォークナー氏ら4名で　白石神社ミニふ化場　サケ観察キャンピングカー　石狩町サケ漁など視察

・18　豊平川クリーン・キャンペーン実施　道潜水スポーツ協会豊平地区ボーイスカウト第27団　同区市民らが参加　河岸と川底を清掃した

・24　サケ目撃マップを地下街オーロラタウンの電電サービスセンターに設置　市民にサケ回帰情報を提供

12・14　松野北海道開発庁長官が来道　これを機に豊平川がサケののぼる川になるようにと陳情を行った　札幌市立東白石小学校児童も実情を報告した

・25　この年の寄付金は784万円　HTB　宝酒造などの継続企業の他アカシヤ　札幌　円山の札幌の各ライオンズクラブ　中島地区振興会が協力した

・26　カムバックサーモン・キャンペーン協力者を表彰　サケ情報を提供した市民10名と5団体に感謝状を贈呈　目撃談を報告してもらった

＊　56年秋豊平川へのサケ回帰数は各種データとリサーチの結果1,500尾と推定された

1982　（昭和57年）

1・8　鈴木善幸総理大臣が札幌市立東白石小学校の児童を官邸に招待し学校で学んだサケの話を親しく聞きその席で豊平川に「魚道」の設置を約束した　これは異例のことと話題に

・15　「北の川」3号発刊　特集「ようこそ豊平1期生」

・25　サケの会研修会「河川工学上からみた豊平川の諸問題」講師岸力会委員（北大教授）

2・2～7　雪まつり会場でのキャンペーン「サーモン水族館」実施　小樽水族館から銀ザケ20尾を借りて円形大水槽に放流し観察させた

・12　豊平川幌平橋下で越冬サケを発見

3・1～7　カナダ・サケ増殖計画委員会技術メンバー　サンディー・マックローレン氏を迎え視察してもらった　また両国のサケ思想について交流を図った　6日には子供観察隊とサンディー氏との交流会も開催した

・31　「北の川」4号発行　特集「豊平川にサケを迎える」

4・5　豊平川での自然ふ化稚魚の健在を確認（北13条橋付近で道栽培漁業開発公社調査）

・10　新潟三面川の稚魚放流式に出席

5・1　第4回豊平川サケ稚魚放流壮行会　稚魚30万尾を放流　東白石小学校飼育稚魚5,000尾も旅だち

・7～8　さっぽろサケの会と北方圏センターの共催で「カナダのカムバックサーモン運動」「カナダインディアンとサケ」の演題で吉崎代表　萱野茂氏（二風谷アイヌ文化資料館長）が講演を行った　会場は北方圏センター

・19　バンクーバーに「サケ学習ふ化場」オープン　吉崎代表　萱野茂氏（二風谷アイヌ文化資料館長）招待される

6・00　雁来床止めに魚道完成

8・22　「豊平川母と子の自然教室」をHTBと共催

・31　「北の川」5号発行　「北の川刊行会」を廃止　さっぽろサケの会の1組織として「北の川」編集部を包含　同誌の発行も年2回に決めた

・下旬　「Come Back Salmon　'82キャンペーン　フォトコンテスト」11月までHTB共催

9・15　アイヌアシリ　チェプ・ノミ「新しいサケの復活を祈願」を100年ぶりに豊平川で行う

・19　「豊平川マラソン大会」HTB共催　豊平川をのぼるサケのように元気に走ろうというレース

・22　サケ観察広場オープン

10・15　「1982日本サケ会議」開催　さっぽろサケの会北方圏センター共催　会議にアメリカ　カナダ　イギリスからも参加50名に及ぶ会議となった　会議は運動報告　情報交換　今後の活動について討議を行い「日本サケ会議宣言」を採択した　17日まで

12・25　寄付金トータルは881万円　日本サケ会議への協賛金も含む　吉野賢二氏　佐藤水産　市内ホテル9社が新しく協力した

1983　（昭和58年）

4・30　第5回豊平川サケ壮行会　札幌市　札幌クラークライオンズクラブ　さっぽろサケの会共催
板垣札幌市長　横路北海道知事がそろって出席した　稚魚30万尾のほか札幌市立東白石小学校飼育稚魚5,000尾　市内8小学校飼育の稚魚　HTB飼育稚魚など2,000尾　この年は豊平川に遡上したサケから採卵　受精　ふ化　飼育（千歳ふ化場）した稚魚が主役で多数参加した市民の声援を受け北の海へ旅だった

5・10　ノース・バンクーバーに札幌に続けと「サケ学習ふ化場」オープン　吉崎代表出席

・14　さっぽろサケの会定期総会

7・31　「子供サケ学習ツアー」開催　56年（1981）結成以来活動を続けている子供サケ観察隊員およびその父兄を加え　水質を検査しながらサケが遡上する豊平川について学習した

9・15　第2回アシリ　チェップ・ノミ開催（豊平川河畔）札幌アイヌ文化協会　さっぽろサケの会共催

10・15　「北の川」6号発行　特集「カナダに見る市民運動の原点」

・30　カナダ　サケ学習視察団出発　カナダのバンクーバーと北海道のサケ学習交流を促進するため　カナダ側から招待を受けた　気境公男北方圏センター副会長をはじめ　道水産部　道教育庁　札幌市立東白石小学校各代表がバンクーバー周辺のサケ事情などを視察し11月6日帰札した　さっぽろサケの会から菅原総務が同行

12・25　寄付金のトータル額は463万円　本間水産　丸高水産　札幌クラークライオンズクラブ　小比賀永嶺氏らの協力を得た

1984　（昭和59年）

2・1～5　雪まつり大通り8丁目会場（HTB広場）に5メートルの「ジャンプするマンモス　サケ少年」の氷像を展示し話題を呼んだ　氷柱35本を使用し　札幌氷彫刻会が制作した

・4～5　同上会場で　子供のたちの夢を育むカムバックサーモン運動の一環として「北太平洋のサケに手紙を書こう」キャンペーンを展開　ハガキ2,600枚に及ぶ応募があり成功裡に終わった　札幌アカシヤライオンズクラブの協力を得た

4・26　さっぽろサケの会定期総会（HTB会議室）

・下旬　さけ科学館建設着工　総工費1億6,000万円あまり　10月6日オープン

・28　第6回豊平川サケ稚魚壮行会開催　市民2,000名が参加　稚魚30万尾を放流した

5・15　「北の川」7号発行「サケ学習を実践している道内の小中高校における飼育・観察記録」などを特集

7・15　サケ学習「小樽バスツアー」実施　小樽水族館で魚の飼育学習（同館研究員が説明）折りから開催中の小樽博覧会を見学

8・3　豊平川サケ回帰キャンペーン応援の宝酒造株式会社から2,000万円の寄金があった　同社久木田社長が横路道知事を訪問し道内の児童生徒のためのカナダサケ学習の交流基金として財団法人北方圏センターに寄贈された

9・15　第3回アシリ　チェプ・ノミを札幌アイヌ文化協会と共催（豊平川河畔）

・16　第6回豊平川マラソン大会を共催（HTBとさっぽろサケの会）親子で走るので評判に

10・6　豊平川さけ科学館のオープンセレモニー　サケの会は当日午後2時から5時まで次の記念行事を行った「札幌南月寒小学校音楽同好会とサーモンベイビーバンドによる演奏会」「ジム・マレー　サケおじさんによるキャスティング　コンペティション」「カナダ　アウトドアスクール体験入学派遣グランプリ抽選会」（当選者4名をカナダのアウトドアスクールに体験入学させる）

・10　カムバックサーモン書展を開催　同書展実行委員会とさっぽろサケの会の共催で　豊平川さけ科学館の完成を記念して実施したもの　出品点数3,470点　北海道知事賞受賞者1名はカナダさけ学習派遣団に参加

12・25　宝酒造の大口寄付金の他　1,114万円の協賛助金があった　石原裕次郎氏と石原プロモーション　定山渓観光協会　国際ソロプチミスト札幌　藤祐介氏（歌手）　小林幸雄氏　札幌市　北海道青少年科学財団　北方圏センター　札幌中央水産　高野観光開発　朝日新聞などが協力してくれた　寄付金の中にはアシリ　チェプ・ノミへの協賛金を含む

1985　（昭和60年）

3・23　第1回カナダサケ学習派遣団出発　豊平川さけ科学館オープン記念抽選会当選者4名　カムバックサーモン書展知事賞受賞者1名　宝酒造（株）基金によるもの2名　自費参加2名計9名これに団長札幌医大高橋長雄教授　さけ科学館小宮山英重職員　サケの会菅原総務　書家の小比賀和子氏ら19名　また網走から32名も合流計51名の大派遣団になった　多大な成果を得て4月1日帰札

・31　さっぽろサケの会解散

4・1　サケ友の会設立へ

・10　HTB会議室において「サケ友の会」の設立総会開催　サケ友の会会則など審議成立　次いで会則に基づき　理事　常任理事および監事を選出した　引き続き理事の互選により会長に吉崎昌一氏　副会長に渡辺進氏（道女子短大教授）由良隆光氏（北産通商社長）
なお　さっぽろサケの会の財産はサケ友の会に引き継がれた

・13　第1回カナダサケ学習派遣団帰国報告会と反省会をHTB会議室で開催　80名参加

・27　豊平川さけ科学館において　同科学館　札幌クラークライオンズクラブ　サケ友の会の三者共催で第7回稚魚壮行会を開催　36万4,000尾放流

5・31　さっぽろサケの会解散とサケ友の会の発足披露パーティを札幌パークホテルで開催　関係者50名が参集した

6・24　写真パネル展　道内15校で巡回始まる　61年の2月15日まで

8・6～7　札幌市内の小中学生22名（応募者）を対象に1泊サケ学習林間学校を開校　北海道青少年会館に泊まり込み豊平川の観察　サケの生態などを学習した　札幌クラークライオンズクラブの共催で成果をあげた　豊平川環境社会教育への第1歩になった企画

・20　第2回カナダサケ学習派遣者を選考する機関として北方圏サケ学習選考委員会を開催し　同委員会規定を審議　委員の委嘱並びに委員長を選任し委員会が発足した

・30　サケ友の会の会員章を発行　VIP用300個　一般用500個　子供用500個を作成した

9・13　豊平川サケ連絡協議会が開かれ　豊平川はサケ事業河川からはずれ「増殖教育河川」にすると水産庁が発表した　これまでにない判断である

・15　「北の川」8号発行「サケと友達になった子供たちの記録」など

11・18　第2回カナダサケ学習派遣委員会開催　学習ツアー募集要領を討議決定　学習実施校へ募集開始

1986　（昭和61年）

1・14　第2回カナダサケ学習派遣委員会を開催　32名の応募者のなかから10名の派遣を内定（なお同上は北方圏サケ学習とも呼ばれた）

・27　サケ友の会理事会（HTB会議室）を開催　学習ツアー10名の内定を承認した　団長は常任理事久末聖治氏（北海道振興社長）副団長に仲世古正之氏（北方圏センター事業部長）

2・16　派遣者の学習を実施　第2回カナダツアー参加の札幌　千歳石狩の代表5名を対象に行った

3・20　第2回カナダサケ学習派遣団12名が出発　メープルウッド小学校など訪問　28日帰札

4・26　豊平川さけ科学館のサケ稚魚　札幌市内サーモンスクール20校で飼育された稚魚42万7,000尾を放流した　札幌クラークライオンズクラブとの共催8回目の壮行会

5・15　サケ友の会理事会開催　60年度事業・決算報告および61年度事業計画・予算案を承認

6・11　第1回サケ友の会通常総会開催（HTB会議室）

・26　派遣委員会開催（北方圏センター）北方圏サケ学習について明年3月末実施の第3回カナダサケ学習派遣の選考基準など審議決定

8・6～7　第2回林間学校開催　札幌クラークライオンズクラブ　サケ友の会共催　市内小中学生15名が豊平川に生息する生物　川辺の植物などについて　講師から専門的な講習を受けた

夜はさけ科学館の空地に設営したテントに宿泊　キャンプファイヤーや花火大会などで夏の楽しい一夜を過ごした

9・27~28　「鮭の幸グルメの旅」実施　サケ友の会企画　太平洋観光札幌主催　枝幸・宗谷の旅を楽しんだ

11・1　札幌市豊平川さけ科学館に付属さかな館が完成　サケ友の会の事務局をHTBから同館に移転

・14　北方圏サケ学習派遣委員会開催　道内サケ学習実践校から推薦のあった応募者の選考を行い17名の派遣者を決めた

12・25　この年から寄付金は特定の団体が中心になった　それらは北方圏センター　HTB　札幌市　北海道科学文化財団　希望ケ丘育英財団　北方圏交流基金　トータル額は311万円　以降毎年同様な形で協力金が贈られた

1987　（昭和62年）

2・6　メープルウッド小学校児童50名とPTAが来札した　札幌市立東白石小学校との学習交流があるので同校教師　父兄7名を招き友の会と札幌クラークライオンズクラブ関係者で歓迎のパーティを催し相互の友好を深めた

・28　「北の川」9号発行　1986年アメリカ　シアトル　エベレットで開かれた「第2回国際サケ会議」と「第2回北方圏サケ学習交流プロジェクト」を特集
第3回カナダサケ学習派遣者のうち　札幌市内選出5名に対しサケ科学館の指導によりサケ学習実施

3・21　第3回カナダサケ学習派遣団出発　道内小学生16名中学生1名　団長由良隆光氏（サケ友の会副会長）副団長山田　清（同理事）はカナダバンクーバー市メープルウッド小学校など訪問　30日帰札

4・25　第9回サケ稚魚壮行会　さけ科学館飼育稚魚と市内サーモンスクール24校の稚魚32万2,000尾を放流　札幌クラークライオンズクラブ共催　市民800名参加

・25　札幌市立八軒小学校でカナダ派遣報告会

5・1～6　写真パネル展（札幌地下街オーロラコーナー）

・8～22　同上展（北方圏センター展示室）

・12　友の会理事会開催（HTB業務センター）

・20　札幌市　カナダサケ学習交流に15万円の振興助成を決めた　同日録を受領

・25~30　写真パネル展（道庁道民ホール）

6・6　根室市歯舞中学校でカナダの自然についての講演会を開催　カナダ学習に参加した　地元の成田真吾君の報告会に加え副団長の山田清理事も講演を行い漁業者と家族　教育関係者にキャンペーンの考えを広げた

・12　第2回通常総会開催　提出議案を承認可決（グリーンホテル）

・13　サーモンスクール閉校式　札幌クラークライオンズクラブが主催するサーモンスクールは無事放流を終えスクール運営の反省と今後の計画などを協議

・30　北方圏サケ学習派遣委員会開催　第4回の派遣にあたり派遣者の選考方針などを協議決定

8・6～7　第3回豊平川林間学校開校　市内の小学生25名が参加　豊平川流域の動植物の生態観察　藻岩山に登り専門の研究家から話しを聞き指導を受けた　前回同様キャンプ　キャンプファイヤー　花火大会を楽しんだ

10・10　サケのすべて体験学習スクール開設　友の会ジュニア会員を対象に10名が学習した　サケ卵の採卵やふ化など興奮の体験

・16　北方圏サケ学習派遣委員会開催　道内のサケ学習校の校長から推薦のあった児童生徒の中から協議のうえ15名を選出した

・17　第3回国際サケ会議「アダプト・ア・ストリーム・コンファレンス」がシアトル郊外ユベレットで開かれ日本からサケ友の会の吉崎会長が出席　札幌豊平川を復活させるまでの経緯を講演した

12・3　理事会を開催　第4回サケ学習派遣団の承認

・25　この年寄付金のトータル額は252万円

1988　（昭和63年）

2・19　道の助成決定　62年度の北の文化振興事業として友の会企画の「サケと人間のかかわり」の事業について　道の生活文化課の助成対象となり20万円の助成をうけた　また北海道教育委員会からも同額の助成があり以降支援は継続された

3・23~31　第4回カナダサケ学習交流実施　道内から小中学生15名に関係者含め計25名　バッキンガム小学校訪問　バンクーバー島ビクトリア博物館など見学した　団長は気境理事

5・7　第10回サケ稚魚壮行会　20万4,000尾放流

・17　第3回通常総会（グリーンホテル）

・31　「北の川」10号発行　カムバックサーモン・キャンペーン10周年記念号

10・22~23　第4回「国際サケ会議」を北海学園国際会議場で開催　カナダ　アメリカ　イギリスから9名の学術専門家が参加　日本国内からは札幌　東京　川崎　函館　小樽　釧路　帯広　千歳　美深などからサケを守る会関係者が参加　また札幌アイヌ文化協会も参加した　アメリカ代表の「環境問題の浸透と教育プロジェクト」など海外から9つの活動報告と研究が発表された　議長は友の会吉崎会長

12・25　10周年を迎え会への寄付金は記念事業関連を含め1,046万円　HTBの550万円をはじめ三ツ輪航空サービス　きかんし印刷　松山額縁店　北海道開発協会それにレギュラーの寄付金支援各社が協力してくれた

1989　（平成元年）

3・23　第5回カナダサケ学習交流団派遣　カナダ・バーナビー　アメリカ・ワシントン州エベレット　団長は気境理事

4・1　第5回北方圏サケ学習交流派遣団帰札

・17　札幌市議会において西区村山市議会議員　小学校でのサケ飼育について市長見解を質し「前向きに考えたい」と市長答弁

・22　第11回サケ稚魚壮行会20万1,000尾　豊平川南11条左岸イベント広場にて開催　今回から札幌市は後援となった

5・13　サケ大使（サケ学習交流団）写真交換とVTR試写会

・23　ロンドンからテムズ川の魚道募金協力要請文書届く　北海道新聞にも同文が届き　友情募金記事掲載で盛り上げを図る

・25　平成元年度理事会　会員総会開催　サケ友の会会長吉崎昌一氏退任　理事・気境公男氏が新会長に就任　吉崎氏は顧問に

・26　第4回通常総会（グリーンホテル）

7・6　札幌市が河川工事でサケ産卵床を破壊した　同市内部の情報不徹底によるもの　市側陳謝　今後のコンセンサスを約束（気境会長）

・27　図書「日本の水産・鮭」（水産写真資料協会）60冊寄贈される　秋葉鉄之理事紹介によるもの　全道小・中学校に希望をとり配布　価値のある資料ということで感謝された

8・1　恒例の林間学校を市内滝野で開催30名参加　札幌クラークライオンズクラブ共催3日間

・2　サケ学習交流校のえりも庶野小・中学校児童生徒5名に同校八重樫博校長ほか教諭2名　PTA代表らがカナダ姉妹校を訪問し歓迎された　9日間の日程でカナダB・C州クロフォード・ベイスクールなどを訪問した

9・3　第6回カナダサケ学習交流第1回選考委員会を開催

10・8　動画本の出版企画・製作の申し込みがあり　コンテ提出を条件に前向きに対応

11・中旬　札幌市交通局企画で1日乗車券の絵柄モチーフとして「カムバックサーモン」を無断で使用したため抗議した　キャンペーンは同市と協調するものだがキャッチフレーズは友の会の著作であり　無断使用は不可　友の会会長あて使用要請文を提出してもらい今後の協力を約し許可

・30　「北の川」11号発行「ここにも育っていた一粒の国際交流」（庶野小・中学校の場合）

12・2　札幌クラークライオンズクラブ「サーモンスクール」開校32校参加

・13　カナダサケ学習交流2回目の選考会開催

1990　（平成2年）

2・8　カナダ・セーブ・ザ・サーモン一行6名来道　札幌　釧路　幕別　大滝を訪問交流を深めた

・17　第5回国際サケ会議「子供と環境」東京で開催　東京にサケを呼ぶ会が主催　友の会から気境会長　吉崎顧問　柴田理事　今井理事　菅原専務理事らが参加

3・22　カナダサケ学習交流派遣者の研修と結団式

・23　第6回カナダサケ学習交流派遣団カナダに出発　団長気境会長　小・中学生ら一行26名

4・1　同上派遣団帰札

・28　第12回豊平川サケ稚魚壮行会20万8,000尾放流

6・21　平成2年度理事会　総会開催（グリーンホテル2）
「サケ友の会」解散　「北海道サケ友の会」発足　会長は気境公男氏

・下旬　北海道教育委員会から水産庁へサケ受精卵を　教育素材として貸与を要請　同庁はこれを了解し全道ふ化場に通知した

・30　ロンドン・テムズ川友情募金を手渡すため全日空の協力を要請　具体化を約束

7・10　札幌クラークライオンズクラブのサーモンスクールについて札幌市教育委員会に水温調節器の補助を要請　了解

8・20　厚別川流域支流について調査

9・初旬　サケ大使（学習交流団）の隔年交流について　カナダ・ブリティッシュコロンビア州政府と交渉を開始

10・下旬　サケ大使（同上）派遣について　湾岸戦争を考慮しアメリカの事情などを調査

1991　（平成3年）

1・10　サケ大使（学習交流団）はアメリカの国内事情が複雑なためアメリカ部分をカナダに変更してスケジュールを組み直した

2・4　自治省「新時代の都市の動き」研修会　札幌市からの依頼で講演　同研究会は政令都市企画担当者が参加した

・16　サケ大使（学習交流団）父兄参加打ち合わせ会（HTB会議室）

・18　B・C州日本事務所ジェームズ・イェロリーズ氏来札　サケ大使隔年交流打ち合わせ

3・5　臨時理事会開催

・7　福島県「町おこし」でサケ交流取材

・20　サケ大使（学習交流団）派遣で道教育長に挨拶　菅原専務理事　佐賀庄蔵理事が対応

・22　サケ大使（学習交流団）ら板垣武四札幌市長を訪問

・24　第7回カナダサケ学習交流団結団式

・25　サケ大使（同上学習交流団）小・中学校児童生徒ら27名出発　団長菅原専務理事

・31　北海道新聞日曜版で「サケ友の会」を紹介

4・4　サケ大使（学習交流団）帰札

・18　道教育委員会にサケ交流報告

・27　第13回豊平川サケ稚魚放流壮行会18万9,000尾放流

5・20　B・C州日本事務所ジェームズ・イェロリーズ氏来札　気境会長提案の「サーモン大使の相互隔年交換交流」について同州教育大臣も具体化の方向で賛意との返事を伝えてきた

・22　平成3年度北海道サケ友の会通常総会を開催（札幌市青少年文化会館）

6・6　サケ大使「反省と写真交換会」

7・3　カナダからのサケ大使迎え入れについて選考委員会で打ち合わせ『迎え入れ態勢　カリキュラム　スケジュール』などの骨子を決定

9・2　道教育委員会生涯学習部に全面協力を依頼　了承を得る

・7　カナダ・サーモン大使を迎え入れる学校　ホスト・ファミリー父兄らの打ち合わせ

10・8　カナダ・サーモン大使来道　大滝温泉　滝野自然公園山の家で自然学習　札幌市内小・中学校で体験学習　ホームステイを楽しむ　一行は生徒20名　教師4名

・12　子供交流会　札幌クラークライオンズクラブ

・14　第1回北海道サケ会議「サケ学習のアイディア」開催（北方圏センター国際会議場）
「北の川」12号発行　特集「世界のサーモン・フレンドから

のメッセージ」
11・23　在日カナダ大使館でB・C州政府が「環太平洋教育計画イニシアチブ」気境会長　菅原専務理事ら参加同州政府は教育・通産の分野でデモンストレーションを行った
・25　B・C州国際教育局長クロフォード氏来札　今後の交換交流についてミーティング「プラン」を決定

1992　（平成4年）

2・5～11　環太平洋「サケ学習国際交流」フォト展開催（かでる2・7拓殖銀行本店地下サービスコーナー　札幌地下街ふれあい広場）4月30日からは安田信託銀行ロビーでも開催
4・25　第14回豊平川サケ稚魚放流壮行会18万8,000尾放流
5・13　平成4年度北海道サケ友の会通常総会（かでる2・7）「同会会則改定」ほか
・14　全国経済同友会セミナー「地球環境問題」が札幌で開かれ北海道経済同友会が「カムバック・サーモン運動」を紹介した　席上「環境保護に対する市民意識の浸透と高揚に大きく貢献しているようだ」の感想があった
・21　ロンドン・テムズ川魚道開通式に中学校2年川島美佳さんを派遣「友情募金を持参」
10・31　第2回北海道サケ会議「川の文化とサケ」開催（かでる2・7）
12・25　会への協賛助成金は590万円　毎年の協力企業　団体の他北海道自然体験学習振興財団　河川環境管理財団　北海道電力などが新たに協力してくれた

1993　（平成5年）

3・26　第8回カナダサケ学習交流団　レイク・カウチン　バーナビーを訪問　小・中学校児童生徒ら25名団長佐賀庄蔵理事　副団長川合祥隆氏
4・19～23　「カムバックサーモン運動15周年記念」フォト展（道庁道民ホール）
・24　第15回豊平川サケ稚魚放流壮行会19万8,000尾放流　札幌クラークライオンズクラブ共催
6・22　平成5年度北海道サケ友の会通常総会開催
9・13　石狩川水系サケ魚道整備促進の陳情を石狩川開発建設部長に行った　植村敏副会長　江利川喜一理事
10・9　カナダB・C州からの「サケ学習交流団」来道受け入れ
児童生徒20名　教師3名
また気境会長から学習交流の受け入れの主体を市町村教育委員会とする案が披露された　今回は昭和新山の見学　八雲町遊楽部川のサケを観察し　地元の子供たちと交流も行われた18日まで
北海道教育委員会が一行の団長らを歓迎夕食会に招待　気境会長　植村　前田両副会長らも出席した
・16　第3回北海道サケ会議「サケと親しむ川づくり」開催（北海学園国際会議場）来道中の「サケ学習交流団」を迎えての会議となり国際色の濃いものになった
・17　豊平川市民サーモン・ウォッチング　札幌市豊平川さけ科学館共催
11・1　「北の川」スタイルを変えて13号を発行
・5　北海道水産部栽培漁業課（道立水産ふ化場）に道内各サケの会（社会教育団体）への受精卵貸与を要請承認される　同日付け各団体に文書通知
・8　北太平洋「サケ学習国際交流」写真パネル展を北洋銀行道内24支店を巡回開催　パネルは20枚　会期は平成6年3月23日まで　友の会と同銀行の共催
12・25　この年新たに札幌国際プラザの助成支援があった

1994　（平成6年）

1・6　北海道土木部河川課の親水事業計画策定に協力し道教育委員会を通じてサケ学習校の河川改修についての要望調査
・21　北海道社会貢献賞を受賞　これまでの「河川愛護功労」による
3・16　豊平川「サケ自然産卵床保護標識」の増設を石狩川開発建設部次長に陳情
・17　豊平川豊平橋3号床止め（豊平橋下流150メートル）サケ魚道が完成した　友の会と北海道開発局石狩川開発建設部が現地で　記者説明会を開催
4・1　カムバックサーモン資料「サケの知識」を編集刊行
・1～19　カナダ「サケ学習国際交流」フォトパネル展（札幌サンプラザ　かでる2・7）開催　同展は昨年11月にスタート今回が最終シリーズ
・23　第16回豊平川サケ稚魚放流壮行会19万5,000尾放流　札幌クラークライオンズクラブ共催　札幌市民サケセミナーも開催カナダB・C州教育大臣からのメッセージが披露された　市内45小学校児童生徒をはじめ市民およそ700名が参加した
5・25　平成6年度北海道サケ友の会通常総会開催（かでる2・7特別会議室）
昨秋第3回北海道サケ会議の席上　気境会長から提唱された「サケ学習国際交流」受入れの主体を市町村教委とするについて　伊達市が名乗りでた
6・1　「北の川」14号発行「北海道サケ友の会」事業内容など特集石狩川開発建設部に道内河川サケ遡上環境整備促進を陳情
8・16　第8回カナダサケ学習交流団参加者友の会開催（かでる2・7視聴覚室）
9・9　「サケ産卵床保全標識」設置　除幕式が行われた
10・15　第4回北海道サケ会議「サケに優しい川づくり」開催（北海学園国際会議場）
・30　豊平川市民サーモン・ウォッチング開催　友の会と札幌市豊平川さけ科学館共催　サケの自然産卵観察学習など　市民25名が参加
11・1　「北の川」15号発行「サケ学習国際交流」参加校一覧など

1995　（平成7年）

3・26　第9回「サケ学習国際交流団」を北米シアトルとカナダB・C州へ派遣　中心は同州アームストロング・スパルムチーム第21学区　一行は団長植村敏サケ友の会副会長　熊木梅雄専務理事　教師2名　児童・生徒20名　4月4日まで
4・22　豊平川サケ稚魚放流壮行会19万4,000尾放流　豊平川イベント広場で開催　市民ら700名が参加
5・10　北米・カナダ「サケ学習国際交流」フォトパネル展
・18　環境事業団に地球環境基金助成要望
・19　札幌サンプラザのふれあいひろばに約60点を展示した　期間中880名が入場
・31　平成7年度北海道サケ友の会通常総会開催（かでる2・7）役員補充議案など可決承認
6・1　「北の川」16号発行　特集「サケ・チビッコ大使20名カナダB・C州を行く」
7・19　北海道サケ友の会会長　気境公男氏死去
8・21　臨時理事会開催　植村敏副会長がサケ友の会新会長に就任　副会長3名体制に
9・7　気境家より友の会に100万円の寄贈　故気境公男会長の遺志による
・23　サケの生態・施設見学会　北海道さけ・ますふ化場千歳支場千歳サケのふるさと館などサーモンロード見学の旅　25名参加
10・7　カナダB・C州「サケ学習交流団」来道　小・中児童生徒20名　教師5名　伊達市が受け入れ　15日まで
・14　第5回北海道サケ会議「サケを育む川づくり」開催（北海学園国際会議場）カナダからB・C州第21学校区教育長ロナルド・D・サンボスキー氏　また北海道～アームストロング交流委員会キム・フルトン氏らも参加
11・1　「北の川」17号発行　次年より同紙は年間3回の発行を決めた
11・30　北海道開発庁に石狩川水系等サケ魚道ほか整備促進陳情
12・12　友の会理事会第1回研修会「ニシンはなぜ消えた」講師　堂前暁氏　同氏制作のドキュメンタリー「森が歌う日魚が帰る」視聴後に研修会（HTB会議室）
12・25　この年北洋銀行　植崎産業からの寄付金があった　北洋銀行は以後も協力を続けた

1996　（平成8年）

4・1　「北の川」18号発刊　特集サケ学習先進地レポート「サケのふるさと標津町」
・20　豊平川サケ稚魚放流壮行会22万6,000尾放流　札幌市豊平川さけ科学館前庭で開催
5・23　平成8年度北海道サケ友の会通常総会開催（かでる2・7特別会議室）
第1回理事会
7・1　「北の川」19号発刊　特集「サケのふるさと公園・親水公園（帯広）」
・19　気境前会長1年祭　「カナダ・サケ学習国際交流」第4回受け入れについて　岩見沢市教育委員会が協力快諾　また第5回受け入れは旭川市が行うことに決まる
8・16　「北米・カナダサケ学習国際交流」フォトパネル展開催（かでる2・7展示ホール）1,200名来場　22日まで
・21　植村会長　札幌市環境保全活動推進会議委員就任
9・3　カナダ・キャンベルリバー市長とサケ学習国際交流について懇談　友の会から佐藤直一理事　小本毅専務理事（事務局長）（テルメインターナショナルホテル）
・28　サケの生態・施設見学会　余市の北海道立中央水産試験場フゴッペ洞窟　観光農園などをめぐる　20名参加
10・12　第6回北海道サケ会議「サケと川・そして森」大雪森林センター所長・上川町森を育む会実行委員長の一谷源一氏らがプレゼンター（北海学園大学国際会議場）
11・1　「北の川」20号発行　特集「サケのふるさとまちづくりと市民活動」（幾春別川と岩見沢市）
・14　サーモンスクール協議会出席　小本事務局長
12・4　第2回理事会（ホテルアカシヤ）　理事研修会「サーモンフィッシング・イン・カナダ」講師　友の会理事・北海道スポーツフィッシング協会会長　鍛治英介氏
・6　北海道サケ友の会の助成等を札幌市に陳情
・7　サーモンスクール開校式
・11　北海道開発局　石狩川開発建設部等に「石狩川水系魚道等整備促進」陳情
・12　第10回北米、カナダサケ学習国際交流打ち合わせ

1997　（平成9年）

1・14　カナダ派遣団選考委員会
2・8　カナダ派遣団事前研修会
3・1　カナダ派遣団引率者打ち合わせ会
・26　第10回カナダサケ学習国際交流派遣団結団式　カナダB・C州北オカナガン・シャスアップ第83学校区に向け出発　団長江利川喜一副会長　副団長新川勝久氏（岩見沢幾春別川をよくする市民の会事務局次長）小・中学校児童生徒20名教師6名岩見沢市から男女児童生徒10名が参加した　4月4日まで
4・1　「北の川」21号発行　特集「豊かな人づくり　まちづくりを目指して」（恵庭市）
・19　豊平川サケ稚魚放流壮行会17万尾放流　真駒内川が会場　今年で19回目の放流セレモニー　真駒内本町少女鼓笛隊が初の試みである放流演奏を行い評判になる
・26　カナダ派遣団帰国報告会（ホテルライフォート）
5・15　第3回理事会開催（北海道中小企業会館）
・23　平成9年度北海道サケ友の会通常総会（かでる2・7特別会議室）理事会開催　来年友の会が20周年を迎えるため「4部門の事業推進プロジェクトチーム」の本格的な活動開始を確認
6・12　第1回組織活性化プロジェクトチーム動く　キャップ佐賀副会長（エルム会館）
・18　第1回20周年記念事業推進プロジェクトチーム初会合　キャップ高畑理事（かでる2・7）
・19　サケ学習国際交流写真パネル搬入打ち合わせ
7・1　「北の川」22号発行　特集「サケ学習カナダ派遣団レポート

何を見・何を学んできたか」
・17　写真パネル展　岩見沢市役所ロビーではじまる
・23　第2回20周年記念事業推進プロジェクト会議（かでる2･7）
・24　「サーモンロードふれあいの旅」石狩市を事前調査
・28　第2回組織活性化プロジェクト会議（エルム会館）
・29　写真パネル展　岩見沢市コミュニティプラザで開催
31日まで
9・9　カナダ交流団の受け入れを旭川市と打ち合わせ　小本事務局長
・10　第3回組織活性化・20周年記念事業推進プロジェクト合同会議（かでる2･7）
・27　サーモンロードふれあいの旅（サケの生態・施設見学会）は石狩市へ　45名参加
10・13　カナダ・サーモン学習国際交流団来道　岩見沢市受け入れ　カナダB・C州アームストロング市小・中学生ら25名　地元北海道から岩見沢市　三笠市　札幌市　北村などの小・中学生70名　自治体ネットワークセンター・マルチメディアホールで「サケ学習国際子供サミット」を開催　話題を呼ぶ
・17　第7回北海道サケ会議「サケと川・環境を考える」を岩見沢市で開催　来道中のカナダB・C州サケ学習交流団関係者も会議に出席　B・C州第83学校区キム・フルトン氏「カナダのサケ学習と環境教育」特別講演（岩見沢市コミュニティプラザ　マルチメディアホール）
・27　NHK番組「ふれあいラジオパーティー・秋味サーモントキシラズ」（全国放送）に木村義一理事（千歳サケのふるさと館館長）小本事務局長が出演
・30　第4回組織活性化・20周年記念事業推進プロジェクト合同会議（かでる2･7）
11・1　「北の川」23号発行　漫筆閑話筆者交替　木村義一理事のシリーズ開始
・4　サケ学習国際交流カナダ団受け入れ反省会（岩見沢市）
・28　20周年記念音楽祭小委員会（HTB会議室）
12・1　北海道開発局　石狩川開発建設部等に「魚道整備促進陳情」
・12　第2回理事会・理事研修会（エルム会館）　木村理事がNHKラジオに出演したテーマで講演

1998　（平成10年）

1・1　北海道サケ友の会創立20周年の今年は　以下四つの記念事業が決定している　（　）は主担当
「記念誌の発行」（高橋理事）　「まめ本の発行」（高畑理事）
「記念音楽祭」（宮崎理事）　「記念植樹」（泊出理事）
・7　20周年記念誌の第1回編集会議（HTB業務センター）
・20　20周年記念音楽祭への協力依頼　札幌合唱連盟の長内理事長ほか
2・4　20周年記念事業推進会議・第2回記念誌編集会議（HTB業務センター）
・21　「身近な水辺としての豊平川の検討会」活動報告会小本事務局長出席（かでる2･7）
3・6　第3回記念誌編集会議（HTB業務センター）
・13　第5回組織活性化プロジェクト会議（エルム会館）
・26　第4回記念誌編集会議（HTB業務センター）
・31　20周年記念音楽祭第1回企画委員会（かでる2･7）
4・18　第20回豊平川サケ稚魚放流壮行会24万1,000尾放流　豊平川河川敷イベント広場で開催　記念すべき壮行会に市民　サーモンスクール校児童生徒300名が参加した　札幌クラークライオンズクラブ　国際ソロプチミスト札幌中央　財団法人北海道開発協会　札幌市豊平川さけ科学館など関係者が全員で見送った
・23　記念音楽祭2回目の企画委員会（KKR）
5・1　「北の川」24号発行　漫筆閑話「あぶらびれ雑記」
・8　第3回理事会（かでる2･7）
・13　第5回記念誌編集会議（HTB業務センター）
・14　平成10年度北海道サケ友の会定例総会・同第1回理事会開催（かでる2･7）
・30　第6回記念誌編集会議（HTB業務センター）
6・15　第7回記念誌編集会議（HTB業務センター）
7・2　記念音楽祭第1回実行委員会開催（エルム会館）
・8　第8回記念誌編集会議（HTB会議室）
・21　第9回記念誌編集会議（HTB会議室）
8・1　「北の川」25号発行
・4　記念音楽祭第2回実行委員会開催（道中小企業会館）
・21　第10回記念誌編集会議（HTB会議室）
9・1　記念音楽祭第3回実行委員会開催（道中小企業会館）
・16　第11回記念誌編集会議・座談会実施（HTB会議室）
・30　第12回記念誌編集会議（HTB業務センター）
10・2　創立20周年記念　まめ本「サケ」（木村義一氏著）発行
・3　サーモンロードふれあいの旅（静内町）32名参加
・6　記念音楽祭第4回実行委員会開催（KKR）
・20　第13回記念誌編集会議（HTB業務センター）
11・5　記念音楽祭第5回実行委員会開催（道中小企業会館）
・6　第14回記念誌編集会議（HTB会議室）
・7　記念音楽祭・出演団体との打合わせ会（ライフォート札幌）
・13　創立20周年記念　記念誌発行
・14　創立20周年記念　記念音楽祭「水と緑のコンサート～生命はぐくむもの」小・中・高・大学・一般の7団体出演　札幌合唱連盟協力（札幌コンサートホール・Kitara小ホール）
写真パネル展開催（　同　会場ロビー）
創立20周年記念植樹（鴨々川河畔）
12・上旬　石狩川開発建設部に道内河川サケ魚道整備促進の陳情
・19　第8回北海道サケ会議開催（北海学園国際会議場）
・20　「北の川」25号発行
・25　今年の協賛助成金は「20周年記念事業」を含め　北海道教職員厚生会や宝酒造などの支援が得られ寄付金は500万円を越えた

あ と が き

北海道サケ友の会20周年記念事業の一環として、１年がかりで取り組んできた記念誌“碧”の発行が、このほど漸く上梓に漕ぎつけ、編集委員一同はほっとした安堵と達成感に浸っているところでございます。

編集に携わって一番腐心したのが、何といっても20年の史実をいかに遵守するかということでした。当然手元にあるだろうと確信していた資料や写真が、すでに散逸してしまったものもあって、その収集にかなりの時間と精力を注ぐ結果となりました。

資料の収集、整理には小本毅氏(当会事務局長)高畑一夫氏(HTB・当会理事）のお手を煩わせました。特に、境慧氏（元HTB・報道局長)には、お忙しい時間を割いて編集作業に参画していただき、取材から筆述まで終始リードしていただきました。心から御礼を申し上げる次第です。

また、雷雨の中をお集まりいただきました座談会は、今だから言える真実の証言や数々のエピソードが披露されましたが、終始和やかに進めることができ、私にとっては生涯の思い出となりました。ご出席いただいた吉崎昌一氏、木村義一氏、森脇香さん、植村敏氏をはじめ、お手伝いをいただいた横山憲治氏（HTB・当会理事）に、心から感謝の意を表する次第でございます。さらに前鼻昌司氏（山藤印刷）には、編集全般にわたって適切なアドバイスをいただきました。

この間、友の会会員をはじめ海外を含め、多くの関係者から励ましの御声援を賜わったことは申すまでもありません。

こうして、20年の歴史の一コマに思いを馳せながら、注意深く編集したつもりの記念誌ではありますが、いざ完成してみると思わぬ欠落が無かったかと、心配の種はつきません。お気付きの点がございましたら、御遠慮なく御叱正を賜りたくお願い申し上げます。

終りに本誌が、これから当会が歩む21世紀への指針の一助になれば、編集委員の一員としてこの上ない幸いと存じます。

平成10年11月

記念誌編集責任者
高橋　重義
（北海道サケ友の会理事
北の川編集担当）

北海道サケ友の会　20年のあゆみ　「碧」

発 行 日　平成10年11月13日
発 行 人　北海道サケ友の会
〒005-0017　札幌市南区真駒内公園2-1
札幌市豊平川さけ科学館
TEL 011-584-6666
印　　刷　山藤印刷株式会社
〒063-0051　札幌市西区宮の沢１条４丁目16-1
TEL 011-661-7161

©北海道サケ友の会　1998
日本音楽著作権協会　特許番号　JASRAC　出 9811773-801

TaKaRa

タカラは「緑字企業」をめざします。

二一世紀の視点から、自然環境保護と環境負荷削減を考えます。

私たちはハーモニストTaKaRaの企業理念のもと、環境保護と経済活動の両立をめざした「エコチャレンジ21」というプロジェクトを昨年スタートさせました。二一世紀に予想される環境問題にいち早く対応していくつもりです。

●　●　●

「エコチャレンジ21」を進めていく上で、私たちの指針となるのが「緑字」という概念です。企業が経済活動の結果を「黒字」で表現するように、企業活動が自然環境に及ぼした影響を私たちは「緑字」と呼んでいます。一年間のプラス・マイナス両面の結果を「緑字決算報告書」としてまとめ、毎年公表することにしています。その緑字をめざす思いのひとつが、商品設計です。「純」と「純レジェンド」のリターナブルボトル化の普及推進をはじめ、ステイオンタブ缶の日本初の導入など、多方面で対応に努めています。もうひとつ、緑字経営を支えるのがTaKaRaが支援する環境政策です。1979年「さっぽろサケの会」支援に始まった「カムバックサーモン」キャンペーンがそのスタートでした。現在も、各地で行なわれている環境活動への支援を続けています。

●　●　●

「緑字企業」をめざして、私たちがやらなければならないことはまだまだたくさんあります。その次の一歩が、いま始まろうとしています。





純と純レジェンドはリターナブルボトルを採用しています。

1994年全国に先駆けて、北海道で中容量ビン専用P箱を使用した空ビン回収システムを開始しました。



お酒は20歳を過ぎてから

宝酒造株式会社

いつも、いっしょ。
ずーっと、いっしょ。

あさのひかりに、うつむいて
おこんとさまは、どこへやら
たそがれどきも、ほおづえついて
そんなじだいだから



かえれるふるさとはありますか
えがおでだきしめてくれる
なみだでほほえんでくれる
そんな、そんなふるさとが

ふるさと、ほっかいどう
onちゃんはそんなみんなと
いつも、いっしょ。
ずーっと、いっしょ。だよ。

北海道テレビ